
日々是迷宮ナリ

朱月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日々是迷宮ナリ

【Nコード】

N5949F

【作者名】

朱月

【あらすじ】

ハイ・ラガード公国。その国が世界樹と呼ぶ神木に現れた巨大な迷宮。多くの冒険者がその世界樹の迷宮に挑み、破れて行く。そしてまた一人の若き冒険者がハイ・ラガード公国に足を踏み入れた。

一階・天に挑みし冒険者が地図に翻弄される場所（前書き）

この作品は世界樹の迷宮2を元にしたファンフィクションです。大筋にそった内容になっているので、ネタバレになる可能性や、未プレイの方にはよくわからない所もあるかもしれませんが、ご注意ください。

一階：天に挑みし冒険者が地図に翻弄される場所

ハイ・ラガート公国

大陸の遙か北方に位置する高地に存在するその国では巨大な樹を神木として崇めていた。

その神木は世界樹と呼ばれ、空飛ぶ城へと繋がっているという伝説があった。

だが伝説は伝説でしかなく、ラガート公国で暮らし、生活している者でさえその伝説を心から信じている者は一握り程度しかいなかった。

しかしあるとき伝説を裏付けるかのような謎の遺跡群と未知の動植物を内包した巨大な自然の迷宮が見つかった。

伝説は本当なのか、住民たちが騒ぎだす中、その地を治める大公は、その迷宮が伝説と繋がっているのかを調べるために大陸全土に触れを出した。

伝説と未知の迷宮ほど冒険者達の心を捕える話は無く、多くの者が公国に訪れた。

世界中の冒険者が一か所に集まっているのではないかと思うほど公国には冒険者が溢れ返った。

しかしその誰もが迷宮の道半ばで倒れ、諦め、去っていく。

難攻不落という更なるエッセンスが加えられ、さらに多くの冒険者を魅了していった。

そしてまた、一人の若き冒険者が公国へと足を踏み入れた。

彼の活躍をその目で見たいというのならこのまま読み進めるといい。

特に興味は無く他の作品を読みに行くのも君の自由だ。

「地図が完成していない」

「なっ……」

ばふ、と草が生い茂る地面に地図が落ちる。

かすかに流れた空気が揺らす緑がむなしさをかきたてる。

世界樹の迷宮第一階層『古跡ノ樹海』。

『天に挑みし冒険者が歩みを進める場所』と呼ばれるのはその階層の一番下、つまり誰もが最初に足を踏み入れる場所である。

ラガート公国ではあまりにも多くの冒険者達がこの迷宮で果ててしまう事を重く見て、最近になって挑む力量を持っているかどうかを見るためテストを行っている。

そのテストとはこの階の地図を完成させる事。

広大な迷宮に置いて、地図を書く……つまりマッピングは生死を分けると言っても過言ではない。

迷宮にはびこる魔物、それを相手にしながらの作業は想像以上に厳しい。

つまりこのテストは戦闘と地図、両方の力量が試されるのである。

「一体残りはどこなんだーっ！」

悲痛な叫びをあげたのは二十前後かと思われる年のパラディンの青年である。

名をフォンと言い、ギルド『リアーリス』のメンバーだ。

テストを受けている事からもわかるが、リアーリスは最近できた新しいギルドであり、所属する冒険者も少ない。

彼はその少ないメンバーにおいて、パラディンという最前線で敵の攻撃を受け止める職業から基本六名で行われる迷宮探索においてリーダー的な役割を任されていた。

初の迷宮において怖気づく事もなく、皆を引っ張る頼りがいのある彼だったが、衛兵による三度目の未完成通告で、ついに両の手を地面につけることとなった。

「もらったお薬も、私の医術もそろそろ尽きてしまいます……」
白衣を着た小柄な少女が疲れた顔で嘆く。

ソニンと言う名前の子メディックだ。

彼女の体に不釣り合いなほど大きな鞆は、既にスカスカになっ
てしまっている。

「こちらにも……弾がもう残り少ない」

厚めの青い服に身を包んだ金髪の女性。

彼女の持つ銃にはリズという自身の名が刻まれている。

残弾数に加え、疲労による集中力の低下はガンナーの彼女にと
って深刻な問題となっていた。

「喉がからからで思うように声がでないよお」

頭の左右で揺れるピンク色の髪と、装飾が施された腰巻が印象的
な少女。

陽気そうな印象を受ける彼女の名はリリック。

バードという本来ムードメーカーになるべきの彼女も疲労の色
を隠せないでいる。

「修行だ……実践における苦境こそ真なる修行……」

後ろで結った長い黒髪と、サラシが巻かれた控え目な胸が目を引
く女性。

血走った目を研ぎ澄まされたカタナに映しながら言い聞かせる
ように修行、修行とつぶやいている。

異国からやってきたサクというブシドーは我々とは違った考え
方を持っているようだ。

フォンを含めた五人にボクを加えた六人がリアーリスの初期メ
ンバーだ。

まだテストを受けている段階の小さなギルドだが、それも今の
うちだけ……と思いたい。

「とりあえずやり残しが無いかも一度慎重に見ていこう」

地図というのは迷宮探索において重要な物だが、頼り切るのもまた問題がある。

例えば本来なら分かれ道の場所を、一方の道しか記さずあまつさえもう片方を行き止まりと記してしまつと、地図を見ながら未踏の地を探そうとしても見つからない。

ボクらが今陥つてる状態も恐らくソレなのかもしれない。

あくまで自分達を作つた地図を信用するのもいいし、いつその事最初から洗い直すというのも手だ。

「完成するまで街に戻らせてくれないって、本当にこれは迷宮の犠牲者を減らすためのテストなのか？」

「どれだけ衛兵に一度街で休息をとらせてくれと頼んでも道を開けてくれない。

仕事に忠実なのはいいが、流石に融通が利かなさすぎではないだろうか。

「とりあえず水を補給しにいきませんか？湧水があつた場所は記録してありましたよね」

「幸いな事に命を繋ぐための水が不足する事は無かつた。

とはいっても、この状況はもうそう長くは続かないだろう。

「早く街に戻つてぐつすり休みたいよう」

泣き事を言つても仕方がない。

とにかく水が尽きては更に困つた事になる。

命に関するエキスパートであるメディックの提案に全員が頷いて行動を再開する。

「で、だ」

「リズが銃を構えた腕を力なくおろす。

「何で二階に来てるんだあー！っ！」

「フォンは重そうな盾を放り投げて頭を抱える。」

「修行修行修行修行……」
サクのつぶやきも加速する一方だった。
「階段登ってた事に何で誰も疑問に思わないのぉ!」
全員疲弊で頭がうまく回らなくなってきたしまっているようだった。

とにかくこの階にとどまる理由はない。
ボクらは今上がってきた階段を今度は下りはじめた。

「ここ、ここか……」
そしてついに地図に書かれていない部屋を発見するに至った。
場所は意外にも迷宮の入口から近く、一階全体では右下に位置していた。

「よし、ここをマップピングして、帰るぞ……」
入口から近いのは不幸中の幸いだった。
部屋を調べて帰るだけの体力は何とか残っている。
「入るお、早く入るお!」
リリックが急かす。

既に正常な判断能力は無く勢いよく扉を開けた。

「む、リアーリスか。地図は……出来ているな。合格だ……だが」
「ど、毒が……」
「ぐ、ぐう」

ボクの後ろにはかろうじて生に踏みとどまっている仲間が五人。
部屋に入った瞬間毒鱗粉を撒き散らす蝶に襲われ、最後尾にいたボク以外、やられてしまった。

何とか追い払えたものの、その後は大変の一言につきた。

「迷いなく合格と言いきい状態だな……」

ボクらのギルドの初探検は決して順調と言えるものでは無かった。命が惜しいのなら多くの冒険者がそうしたように諦めるのも良い。

しかし命を賭してでも得たい物があるというのなら、それを目指すのもボクらの自由だ。

とりあえず病院を手配しなくてはいけない。

一階：天に挑みし冒険者が地図に翻弄される場所（後書き）

というわけで、1Fでした。

実際にプレイしながらならもっと忠実に書けたかもしれないんですが……。作者は現在16Fに生息しております。11Fで数か月ストップしてたので下の階の記憶は既にあやふや……。

なので原作とは色々相違点が出てると思います。

原作プレイ済みの方やそうでない人にクスリとでもしていただけたら幸いです。

パーティ構成とかは作者のプレイにそこそこ忠実にしてあります。そして男女比1：4は作者の趣味です。

二階：危険な獣となった樹海の広場

階段を上がり、二階へと足を踏み入れる。

以前に地図作成のテストの折りに間違えて二階へと来てしまった事があったおかげか、迷わずに到着する事ができた。

「一階で一度見かけた蝶がいるな……目視できるだけで……いや三匹か」

先頭に行くフォンが先立って見てきた奥の様子を報告する。

それを聞いた他のメンバーの間に緊張が走る。

かく言うボクもあの時の苦勞を思い出して溜息を吐いていた。

「不意さえつかねなければ毒をもらっ前に仕留められる。先手必勝だ」

鞘から抜いた刀を握りなおしながらサクが言う。

速さと威力を兼ね揃えたブシドーの戦闘スタイルはまさにやられる前にやれを体現しているといっても過言ではない。

「サクはやれなかったら真っ先にやられちゃうもんネ」

「うぐ……」

リリックに痛い所をつかれサクは言葉を失った。

自覚があるのならもう少し着こむくらいはしたらいいと思う。

そのまま袴の上を着てもいいし、奇を衒って革ジャンを羽織ってもいい。

「こ、これじゃないと動きにくいんだ！」

「サ、サクさん！そんな大声出すとっ」

サクはしまった、と口を塞ぐ。

しかし時すでに遅し。先ほど偵察に出ていたフォンが見た蝶三匹がこちらに気づいて颯爽と羽ばたいてきた。

「先手、必勝？」

肩にかけていた鞆を下ろし、杖を構えながらソニンは苦笑いを浮かべる。

完全に不意、というわけではないが少なからず後手に回らざるを得ない状況だった。

「まったく世話がやけるな」

フォンは大きな盾を構え、防御の体勢を取る。

彼の守りは敵の攻撃から味方を守る。

しかし不安は残る。直接的な攻撃は防げて、毒をもらってしまえばそれを盾で防ぐ事はかなわない。

守りの要である彼が倒ればパーティは瓦解する。それを防ぐためにも今は一匹ずつ確実に仕留めていくだけだ。

「ハイッ」

フォンの体勢が整ったのを確認した後、リリックは弓を構え宙を舞う蝶めがけて矢を放った。

矢は羽をかすり、蝶は僅かにその高度を下げた。

「もらったっ」

その瞬間を見逃さず、サクは一足飛びに間合いを詰め蝶を一刀のもとに両断する。

先ほどの失態はこれで返上だと満足げに刀を鞘に戻す。

「サクさん後ろ！」

されど失態は再び上乘せされた。

仲間をやられて激昂したのか、残り二匹が一齐にサクに向かっていく。

事態を察知して二つの影が動いた。

一つはリズ。雷鳴のような銃声を轟かせながらも正確無比な銃弾はピンポイントに蝶の頭部を貫通し、勢いのまま地面へと落ちて行く。

そしてもう一つはフォン。最後に生き残った蝶とサクの間へと入り、攻撃を受け流す。

完全にはいなし切れず、サクに攻撃が当たってしまったが、それは自業自得という事で大人しく受けてもらおう。

「自覚があるんなら、せめてあまり離れないで欲しいもの……だね

っ

守りの構えを戻して、そのまま剣を振るう。

蝶はそれを上へと逃げてやり過ぎす。

しかしそれを待っていたのか、リリックの矢が中心を捕える。

ふらふらと羽を散らしながら落ちてくる蝶が地面に到達すると同時に、その場に静寂が戻ってきた。

で、反省会。

草の上に正座しているサクをリズが見下ろしている。

「大声で敵を呼び寄せ、その上自分の弱点を顧みず踏み込むとは、無謀とは思わないのか」

まだ下層であったからあの程度で済んだが、これから上に登るにあたって、今のようないざな事があつてはたまらない。

「返す言葉も無い……」

がつくりと肩を落としてしよげている。今つっいたら崩れてしまふんじゃないかと思うほど、へこんでいる。

「まあ皆無事だったんだし、いいじゃないですか」

ソニンはそんなサクの傍に座り、先ほど受けたサクの傷を治療していた。

「すまない……。こんな私なんかの傷をお……」

おおおおとおうとおうと悲痛な呻きをあげるサクを見て、リズもこれ以上は可哀想だと思ったのか、それ以上言及はしなかった。

「またフォンが偵察に行っている。今度こそその労力を無駄にするんじゃないよ」

そう言つてリズも草の上に腰を下ろす。

今朝迷宮に入り、今は昼を過ぎた頃だろうか。

夜になれば魔物の危険は減るが、地形的な危険に遭う可能性が高くなる。

迷宮内で夜を過ごすつもりでないのなら、今日の目的みたいなものを決めておく必要がある。

そうしなければ気づいた頃には日は傾き、復路に迷うかもしれない。

「あ、帰ってきたヨ？」

思うように騒げなくて退屈そうにしていたリリックは、戻ってきたフォンをいち早く認識した。

彼はどこか興奮しているような表情と声でメンバー達に報告した。

「な、なななんかいた！なんかいた！オ、オレンジ色のもやもやしたのが！」

『FOE』ふおえ、またはえふおーい！。

世界樹の迷宮にて生息する魔物の中でも特別な存在。

普段から相手にしている魔物達は、魔物といっても動物の延長線上にあるようなもので、通常その姿を隠している。

しかしFOEと呼ばれる者は違う。

その姿を冒険者達の前に堂々と晒し、自分の思うように行動している。

遠目ではオレンジ色のもやもやにしか見えないが、いざ彼らと戦闘状態に入ると固有の姿を現すらしい。

同じ階に生息する魔物が束になってかかっても勝てないような…
…恐ろしい存在である。

「わかっていると思うが……」

リズの忠告にサクが必死に頷く。

シャルレでは済まされないと、あの奇異な姿を見た瞬間誰もが感じた。

「観察した限りだと、決まったパターンに従って移動しているよう

だ。」

「しかし、どの道を通ろうにもヤツの巡回ルートをまったく必要がありそうだな」

「大丈夫。一定距離内に入りさえしなければ、視界に入ってもこちらの事を狙ったりはしてこないと考えていいようだ」

「視界って……、ただのもやもやだヨ？どっち向いてるなんてわかんないよう」

「その点は俺に任せてくれ。なんとなくだが見分けはつく」
「フォンは全員に目配せをして確認を取る。」

それは自分の『なんとなく』を信頼してくれるかどうか。
全員迷わず了承の意を返した。

「FOEの行動の把握と対策。今日の課題はそんなところか」
ぐつと気を引き締め、身を潜めていた草場から抜け出しオレンジ色のもやもやへと近づいて行く。

付かず離れず、オレンジの後を追って行く。
振り返る事も無く、来た道を逆走する様子もないのでそれが最良と判断したのだ。

一定の距離を保ったまま少しずつ歩を進めていく。
次の部屋へいくには少し遠回りの道になるが、急がば回れである。
「……………っ！！」

突然サクが走り出す。

草と草が触れ合う音を出すのも気にせず全力で直進していた。

「お前はまた……っ、伏せる！！」

突然の行動をリスが声で静止させようとし、瞬間その本意を悟り焦った声で指示を飛ばす。

皆の反応は早かった。受け身も取れないほど雑な動きではあったが、一瞬にして地面に体を伏せた。

その上を無数の針が飛び、伏せていなければすべてが命中していただろう位置に刺さる。

「敵！？」

前方ばかりに集中し、自分たちが目立つ位置にいたという事に気づけなかった結果、不意打ちを受けたのだった。

「サクさんが、奥に！」

その不意打ちにいち早く気づいたサクは先ほどの針の主を止めに行っただった。

「だからと言って、先走りして！」

リスが後を追う。

他の三人もそれに続く。

サクに追いつくと、そこには二つに切り捨てられたサボテンのよな魔物、そして視界一杯に集まった魔物の群れがいた。

「サク！無事か！？」

「すまない、私はまだ……」

「謝るのは後！今は目の前の敵を倒すことだけ考えろ！」

リスは懐からいつもとは違う形状の弾丸を取り出し、装填、発射した。

銃口から飛び出したのは鉛の玉ではなく、青白い稲妻がうなるように蝶の群れへと向かっていく。

稲妻は蝶達の間を通過していき、それに触れてしまった蝶を次々と落としていく。

しかしリスは威力に見合った反動をその身に受け、体勢を崩してしまふ。

そこを針を身にまとったネズミ達が襲う。

フォンはその間に入り、受け止めようとするが数に押され数匹のネズミは守りを越えてリスへと向かう。

「くう……」

急いで身をかわすが、ダメージを免れる事は出来なかった。

「リスさん！」

すぐに駆け付けたソニンが治療を開始する。

暖かい光がリズの傷口を包み、塞いでいく。

「危ない！」

その隙にと魔物達が一斉に襲い掛かる。

リリックは急ぎ弓を引き絞り、射抜くのではなく足止めをするように矢を放つ。

地面に突き刺さった矢に驚いた魔物の足が一瞬止まる。

「はぁーっ！」

その一瞬のうちに疾風のごとき動きでサクが魔物を切り裂いていく。

まさに一瞬の攻防。その結果は一目ではこちらの圧勝に見えるが

……。

突然鉄の音が鳴り響く。サクが落とした刀によるものだ。

見れば刀を握っていた腕には針が刺さっていた。

恐らく最初の、サボテンの魔物が放ったものだろう。

ソニンがあわててその治療に向かうが、サクはそれを手で制止する。

まだ魔物はいる。崩れた隊列の中で治療を受け無防備になるわけにはいかなかった。

皆も、魔物も動かない。しんとした空気。

「ん……？」

しかし急に魔物達は向きを変え、森の奥へと走り去っていく。

理由はわからないが、どうやら切り抜けたようだ。

安堵し、肩を下ろす一行。だが……。

「あ、あれえ。みんなあ、向こう……」

リリックが怯えた声で、背後を指さす。

その先には凶悪な眼光を持った一頭の巨大な鹿が立っていた。

恐怖のオレンジモヤモヤ……FOEがついにその姿を現した。

鹿が走り出す。あの巨体にはねられれば恐らくひとたまりもあるまい。

しかし皆動けない。先ほどまでの戦闘の疲れと、強敵を目の前に

した事で。

ただ一人、フォンだけは一心不乱に鹿へと向かっていく。彼はパラディンであり、パラディンとは仲間を守る者。

ここで動けなければどこで動くというのだ。

「ぐっ、うっうっ……っ」

真正面からぶつかり合う。

ほんの数秒、激しい音を鳴らし合った末に鹿の突進は止まる。

代償にフォンの体も大きく後ろに吹き飛び、気を失ってしまう。その体をサクが傷ついた腕に構わず抱えあげ、大きな声で叫ぶ。

「撤退だ！」

必至の逃走の末、どうにか安全な通路まで逃げ出す事ができた。先ほどの鹿が追ってくる様子も無し、まわりに魔物がいる気配も無い。

安全な場所、そう頭が理解した瞬間フォンを抱えたまま走り続けたサクが倒れる。

「サクさん！」

すかさずソニンがサクの側で治療を行う。

彼女自身も相当疲労していたが、先ほどのフォンのように彼女もメイックとして動く事にためらいはなかった。

「はあっ、はあ……」

その甲斐もあり、サクが持ち直す。

「私は大丈夫だ……。それよりフォンを……」

ソニンは頷き、今度はフォンへ治療を施す。

気を失ってはいるものの、傷は治療できる範囲内でほっとする。

「流石に今のは……やばかったネ」

リリックが無理やりな笑みを浮かべる。

今回は樹海の恐ろしさというものを体の芯に教え込まれる事となつた。

「フォンが目覚めたら今日は街へ戻ろう」

リズの意見に反対するものは誰もいなかった。

「目が覚めたか、フォン」

それから十分ほど経ち、フォンが目覚めます。

無事に目を覚ました事に皆が安堵の溜息を吐く中、サクはふと違和感を感じる。

「フォン……お前……」

「ぐへ」

彼の目に正気の光は宿っていなかった。

「俺が気を失つてる間に何があつたんだろう……」

その晩、鋼の棘魚亭の一角に異様な集団がいた。

新生ギルド『リアーリス』の女性メンバーが、酒をそれも一際度の強い者を浴びるように飲んでいた。

「もう……嫁に行けぬ」

サクがテーブルに突っ伏しながら暗い声を吐き出す。

胸に巻かれたサラシが若干乱れているようにも見える。

「お前をもらおうなんていう奇特な男はいないよ……。いや私ももう同じ人間か……」

乱れた金の髪を気にもせず、自虐に浸るリズもいつもの輝きがない。

「フ、フフ、フ……」
「ラー、ラー、ハハ」

他の二名も、どこか遠くを見ながら不気味な笑みを浮かべていた。そしてピタリと動きを止め、四人は揃って大声をあげる。

「……あの鹿野郎！！ 次あつたらただじゃ済まさない！！」「」

狂乱の角鹿……。

二階に生息するその魔物が踏むステップは、見る者の正気を奪つという。

何が起こったか詳しくは伏せておく。

君はそれを想像してもいいし、しなくてもいい。

二階：危険な獣を××した樹海の広場

ハイ・ラガート公国にシトト交易所という所がある。

冒険者達が迷宮にて取れた魔物の体の一部や、石材、木材、植物等を引き取りそれを加工し販売している場所である。

冒険者にとって素材を売ったお金が資金の大部分となり、より強大な魔物に打ち勝つための装備を仕入れる場所であるため、馴染みの深い場所だ。

そんな場所で接客をしているのは通称ひまわりちゃん。

今日も今日とてあふれる冒険者達の相手に頑張っています。

ダンツと机に財布を叩きつける。

いつも通り店番をしていたひまわりちゃんが物凄い勢いで驚いているのも気づいていないようだ。

「この金、全部テリアカに変えてくれ！」

財布の中身はしめて5000en。まだ二階に到達したばかりのリアリスにとってそれでも大金の内に入る。

ひまわりちゃんはそれを承知してかしくないか、確認するように問う。

「え、ええつと。リアリスさんからはまだテリアカの原料を売っていただけでないので割高になっちゃいますけど……」

シトト交易所は冒険者が持ち込んだ素材を、商品に変え、それを冒険者が買うという相互関係で成り立っている。

なので素材を売った事のないギルドにはわずかばかり高めの値段で販売せざるを得ない。

「かまわん！」

力強くサクが答える。

その声にひまわりちゃんも再び驚かされる事になる。

余談だが、テリアカとは状態異常を回復する薬である。
主に混乱とか、混乱とか、混乱とか……。

「一体何があつたんだろう……」

再び二階へと足を踏み入れたリァーリス一行だが、フォンを除いたメンバーの様子がどこかおかしい。

口々に「鹿はどこだあ〜鹿あ〜」と呻くように声を出し、まるで歩く屍である。

フォンとしては危ない橋は渡りたくはないのだが、どうやらその橋を自ら渡ろうとしているらしい。

「いた」

リリックがそう一言告げた。

普段の陽気な口調はなりを潜め、暗いトーンだ。

「よし、作戦の確認を」

ソニンの号令で四人はさっと集まり、これまた暗いトーンで何やら話している。

「お、おい。作戦会議なら俺も……」

「全部、受け止めて。絶対、必ず」

フォンに与えられた作戦はそれだけだった。

「バードエンシェントリリック！ 猛き戦いの舞曲！」

一直線に鹿へと向かいながら、リリックがバードとしての真髄を

発揮する。

熱く、心を震わすビートは戦士達の本能を揺り起こし、その攻撃力を高めていく。

「フ、フハハハハアアー！」

「クツクククク！」

それは……元より高ぶっていた精神を、更なる高みへと運んでいった。

「……大丈夫なのか？」

盾を構えながら、フォンは不安を覚えていた。

「シヤアアア！」

サク（？）の一撃が鹿へと迫る。その毛皮はそこいらの魔物より数段硬いものだが、それを突きぬけダメージを与える。

「お祈りはすませたかあ！」

サクの一撃にひるんだ所にリズの鋭い弾丸が放たれる。

弾は毛皮と一緒に皮膚も削り、鹿はたまらずに鋭い鳴き声をあげる。

だが鹿の巨体はそれらのダメージを受け止め、猛然と突進を仕掛けてくる。

「任せる！」

そこにフォンが間を割って入り、二人を庇う。

強烈な威力を持った突進を受け切れずフォンは弾かれてしまう。

だが進路を逸らす事には成功し、本来の目的は果たす事が出来た。

そして……、

「……ぐへ」

「テリアカアアー！」

突進を受けたことで混乱してしまったフォンに、ソニンがさかさ買いためておいたテリアカを使う。

「俺は一体何を……」

「気にしない気にしない。治療しますから頑張ってくださいね」

「あ、ああ……、助かる」

再びサクが走り出す。

素早い足さばきで鹿の死角に入りこむように動き、隙を窺う。

そして鹿がサクを完全に見失った瞬間に飛びあがり、その刀を振り下ろした。

だがリリックの歌で高ぶった精神では殺気を隠しきることができず、気づいた鹿が振り返り頭上へと角を振り上げた。

刀と角が重なりあった音が風のようにかけめくる。

「チィ」

かなりの硬さを誇る角を切り裂く事はできず、刀を落としてしま
う。

そのままサクも落下するかと思われたが、鹿の頭を蹴りあげ空
中で体勢を整える。

そしてもう一撃、その両の手に握られた刀の鞘で角を叩き割る！

斬る性質を持つ刀では硬い角は切れなくとも、破壊の性質をも
った鞘撃ならへし折る事が可能だ。

たまらず鹿は大きく身を仰け反らす。

「サク、よくやった！」

その瞬間を見逃さず、リズは特製の弾丸を射出する。

それは貫通力を持たず、鹿の胴体にあたったそばから地面へと
落ちてしまう。

だが着弾点から突如炎が立ち上り、鹿をあっという間に包み込
む。

暴れまわるも火は消せず、その勢いは命さえも燃やしつくした。

「よし、これでこの辺りは安全に通る事ができるな」

鹿の絶命を確認し、ほっと一息……、

「何を言ってるんですか？」

する暇も無く、暗い声が漏れる。

「この階層にいる全ての鹿を根絶やしにするまで終わるわけじゃないですか……!!」

高らかに宣言する声に、フォンの顔はただひきつるだけであった。

ハイ・ラガート公国、シトト交易所。

先日、割高値段にも関わらずテリアカを大量に買っていかれるという珍事があったけど、今日は平和も平和。

特に珍しい売りがあるわけでも、他の商品より桁が一つ二つ多い商品が売れるわけでもなく、ごく平凡な一日だった。

時間も遅いし、今日はこれで閉めてしまおうかなと思った矢先、店のドアが勢いよく開けられた。

「リ、リアーリスさん……」

ひまわりちゃんの顔がわずかに強張る。

若干デジャヴを感じざるを得ない状況に緊張しているのだ。

「え、えっと、今日は何をお求めですか……?」

いつもどおりの接客文句に、精一杯の笑顔で対応する。

「今日は、買いじゃなくて売りなの」

ドサツとカウンターに大量の何かが積み上げられる。

「これは……鹿の皮、ですね。随分とたくさんありますけど……」

焦げている物や、傷の多いものがあるものの何分量が量だけに中には良質な物が混じっていたりと、全部あわせたらかなりの金額になる。

それすべてをこれから査定しなければならない。

夜も更けかけた、閉店間際のこれから。

「あ、ありがとうございますーっ!」

それでもお客様に失礼な態度をするわけにもいかない。
ひまわりちゃんの苦勞はまだまだ続く。

三階：妹と隣合わせに進む樹海

鹿を殲滅し、意気揚々と三階へと到達したリアーリス一向は天へと伸びる光の柱を発見する。

初めて見るそれに警戒していると、一人の男が一匹の獣を連れて彼らの前に現れた。

「それは磁軸の柱だ」

人の良い笑顔を向ける聖騎士風の男は「磁軸の柱？」と初めて聞くような表情をする一行に説明を加える。

「誰が作ったかはわからないが、触っておけば街から瞬時に移動できるという冒険者なら何度も利用するものだ。覚えておくといい」
全員がへえ、と頷く。

「街へ戻る事はできないのか」
街から樹海への一方通行という半端な機能にリズが不満の声を漏らす。

「更の上の階には樹海磁軸というものがある。それならどちらへにも行けるはずだ」

それはまだまだ上の階だけだね、と付け加えて男はふと思い出したように聞く。

「もしかして君たちはリアーリスか？」

突然自らのギルドの名を呼ばれ、驚くと共に少しは名が知れてきたかと少しの喜びを覚える。

その喜びのせいか、大袈裟な素振りですうだと答えてしまい、男の苦笑を買ってしまう。

「下の階で随分派手に暴れていたようで、噂になっていたんだ。でもそうか、あの鹿をあれだけ倒せるのなら……」

暫く考え込んだ後、何かを決心したかのように男は告げる。

「この階を進む前に一度、大公宮へと行ってはくれないか？理由？

……大公宮で話を聞けばわかると思う」

男の真意を掴む事ができない。ただ自分たちに雑用を押しつけようとしているのではないかとも思える。

しかし男は大公宮で話を聞くまではここを通さないと言わんばかりに道を塞いでいる。

男の言葉に従って大公宮に行くのも、強引に突破するのも自由だ。「そうだ。自己紹介が済んでなかったな。私たちはギルド・ベオウルフの者だ。こっちがクロガネ、そして私がフロ……」

君達は結局フロなんとかさんの指示に従い、大公宮へと足を運ぶ。来た者の気分を高揚させるような華美な作りではなく、安心を与えるような堅実な作りとなっている廊下を歩く。

小気味よい足音が響き、奥にいた大臣がこちらの事に気がついた。

「おお、そなたらはリアーリス殿か。調度良い所に来てくれた」

大臣はいつもの長い前置きを飛ばし、事情を話し始めた。

「行方不明？」

「そうじゃ。公国の衛士たちには、治安維持と新米冒険者たちの保護も兼ねて浅い階の巡回を命じておる。じゃが、先日から見回りに出た衛士がすでに十人戻ってこなんのじゃ。本来なら、ベオウルフやエスバットといった名高いギルドに頼む仕事かもしれぬ。しかしリアーリスのそなたらにも名高いギルドに負けぬ力をもっておるとこの老体は信じておるぞ。どうじゃ、行方不明の衛士の搜索任務、受けてはくれないじゃろうか」

一行はどうすべきか考える。比較的危険の少ない浅い階層での衛士の行方不明。ただ事ではないにおいがする。

それに何より、大臣から名高いと言われるギルドと、直接という

わけではないがその名高いギルドのメンバーから『リアリスならやれる』と思われているのは悪くない。そして、その期待に背くのは色々な意味で良くない。

そう思った一行は自信を込めて、その依頼を受ける事にした。

しかし物事はそううまく運ばなかった。

「ぐ……」

大臣との打ち合わせがすみ、大公宮から外へ出た瞬間にいきなりサクが地面に膝をつく。

息は荒く、熱っぽい。

一目みて病気とわかる症状にあわててサクを宿屋まで運んで行く。

「すみません……。すぐ傍にいたのに気づけなかったなんて。メデイック失格です……」

ソニンが申し訳なくサクに謝る中、フォンとリズは今後の事を話しあっていた。

大公宮から正式に依頼を受けたとなると、そう安々と依頼を破棄するわけにはいかない。

サクの病気自体は樹海特有の病気ではあるものの、有効な薬は既に作られており安静にしていれば良くなるものであった。

しかし回復には暫く時間がかかり、その間行方不明の衛士達を放っておくわけにもいかない。

新しい冒険者を探すにしても、それこそサクの回復をまっただぼうが早いくらいである。

いつそ四人で、とは誰もいわないあたりサクのパーティでの重要さが伺える。

どうするべきか……と頭を悩ましている時、急に勢いよく宿屋の

ドアが開かれ人が飛び込んできた。

突然の事に誰もが反応できないまま、飛びこんできた勢いそのままにリズに突っ込んでいく。

「ぐふっ」

「お姉ちゃあん。置いて行っちゃうなんてひどいよお！ここまで来るのにどれだけ苦労したと思ってるの！」

涙を流しながらリズを姉と呼ぶのは、頭の後で複雑に髪を結っているソードマンの少女だった。

髪の色こそ違うものの、顔立ちは姉妹とわかるほど似通っている。

「リン……、どうしてここに」

「どうしてじゃないよお。一緒に行こうって言ったのに！」

「いや……、言っていないが……」

リズが呆れたような溜息を吐く。

その間にも泣き声は更に大きくなり、部屋中に響き渡っていく。

「うるさい……、静かにじで……」

頭をつんざくような悲鳴に、サクの病状は悪化の一途を辿った。

「でも調度いいんじゃないかな？」

サクを安静にさせるため、リンを含む一行は街道を歩いていた。

その折、リリックが思い出したかのように提案した。

「調度いいって、何が……」

リズが視線をそらしながら応える。その素振りには既に答えを知っていると言っているようなものだった。

「リンちゃん、サクの代わりで」

フォンヤソニンはその提案に「おおっ」と、今初めて気づいたという声を出した。

逆にリズは隠す気の無い溜息を吐き、リンはどういう事かわからず首を傾げていた。

「そういえばそうですね。リンさんってソードマンなんですよね。確かに今必要としているタイプですけど……」

問題はその力量である。自分達も他人にどうこう言える實力を持っているとは言えないものの、一番大切なものはしっかりと持っている。

それは樹海に赴くと言う事に対する覚悟である。

「腕は問題ないのだが……。故郷の皆も私達姉妹二人で行くものだと思っていたようだが……」

「おおっ、見た事もない建物に食べ物！すごいなあ、すごいなあ。

色々な物はあるし、世界樹はものすつごく大きいし、すごいなあ」

「あれを連れていく気には……。どうにもなれなくてな」

今度はリリックを含めた三人が「おおっ」と声を上げた。条件はばっちりなのに、中々同行してもらおうという結論に至れなかった理由はそこにあった。

「仕方ない……。騒ぎださないように手綱を引きながらやるしかないか……」

「どうやら、受けてくれたようだな」

早速磁軸の柱を用いて三階へと戻ってきた一行を待ち受けていたのは、大公宮へ行くようにと言ってきたベオウルフの男だった。あれから丸一日は経過しているので、ずっと待っていたという事は無いだろうが、あまりのタイミングの良さに少しばかり不審に思う。

「冒険者が樹海に入る時間は大体決まってるだろ。私も先ほど磁軸の柱で樹海に入ったところでね。もしかしたらと思っただけ待っていたんだ」

不審の心を見抜いたのか、聞いてもいない弁明を始める。優しいげな笑みを浮かべながら男は一行を見渡し、ふと違和感に気付く。

「ん？ブシドーのお嬢さんが見当たらないみたいだけど」

「彼女はちょっとアクシデントで、今は来ていない。その代わりに……」
アイコンタクトでリンに合図を送る。

「あ、どうも……」

樹海の景色に見とれているのか気の抜けた返事をする。

「まったく……」

妹の不出来さに頭を悩ませる姉。男はそんな対応も柔らかく受け止め、傍らに座っていたクロガネと共に踵を返して進んでいく。

「君たちが依頼を受けてくれたのなら安心して先に進めるよ。衛士の件、よろしく頼む」

「心配だというのなら自分でやれば良かったのでは？」

フォンが少し荒い調子で尋ねる。同じパラディンとして、危険に晒されている人がいるのを知りながら自分は動こうとしない態度に苛立ちを感じたのだ。

「そうしたいのだけどね。私たちにはやらなきゃならない事があったてな。せめて頼れる誰かに任せるところまではと、ね」

納得はいつていないようだがフォンはそれ以上追及はしなかった。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

そう言ってフロ……何とかさんは樹海の奥へと消えていった。

フロ何とかが消えていった通路を遅れて一行も進んでいく。

フォンが前方、リスが後方。そしてソニンとリックはリンが大きな声を出して魔物の気を引かないように注意しつつ奥へと進んでいく。

暫く行くと目の前に扉が見えてきた。恐る恐る開いてみれば、その先には見渡す限りの広場があった。

ここまで開けた場所というのは樹海を探索していて初だ。果てが見えないというのは複雑な分かれ道に遭遇した時とはまた違う不

安に襲われる。

それに視界が開けているという事は身を隠す場所が無いという事。魔物に見つかる危険性は普段の倍では済まされない。

「あーっ」

だというのに……。

「リン！こんな所で大声あげたら！」

「いや、お姉ちゃん！あれっ」

そういつてリンが指をさした場所には……。

「FOE……か？」

遠くにあのモヤモヤが漂っているのが見えた。しかしその色は鹿のそれと違い血のように濃い赤色をしていた。

「見るからにやばそうだよ」

あの赤い色は見る者全てを威圧しているかのようだった。迂闊に近寄るわけにはいかないが、FOEの対策はその行動範囲の特定が基本だ。そのためにはよく見える位置までは接近しなければならぬ。

「こっちに来た……。皆少し下がって」

フォンを戦闘に、FOEと一定の距離を保ちながら移動する。

「また来た……。少し下がる方向を変えよう」

今度は横に移動して距離を取る。

「あ、こっちに曲がってきた。あそこで曲がるのカナ？」

鹿の時と同じく四角を描くように移動するのならば、逆側にまわりこんで抜ければやり過ぎせるのだが……。

「あれ、またこっちに来た」

前例が崩される。どうやら前ほど単純にはいかないようだ。

もう一步退く。そろそろ背中が壁についてしまう。

「あの……これって」

またも退いたのと同じ方向に距離をつめてくるFOE。

「こっちを……まっすぐ追尾してる……？」

そう、結論にたどり着いた。

「ぜ、全員扉の向こうに退避い！」

一目散に入ってきた扉に向けて走り出す。背後は壁で、一歩でも F O E に遅れをとれば扉を塞がれてしまう事になる。

そうなればあの毒々しい赤色のモヤモヤと戦わなければならぬ。それはどうしても避けたい事だ。

「く……間に合わないか」

一歩分、相手の方が先に扉に到着してしまいそうだ。

「やあっ！」

生えている草を千切るほどの強い踏みきりで F O E へと肉薄していったのは茶色の髪を靡かせたりん。

手に持った剣で素早く空を切り裂いた瞬間、突風が巻き上がり F O E の視界を封じる。

「今のうちに！」

無言で頷き、一斉に扉の向こうへと駆け込んでいく。

F O E の視界が回復した頃には全員の退去を完了させる事ができた。

「なんとか……逃げ切ったか」

扉の後ろからは未だ強烈な威圧感を受けているが、扉を挟んでいる以上 F O E はこちら側には来れない。

安全という事実が体全体にいきわたって初めて安堵の溜息が洩れる。

「にしても……」

本当に実力は大したものなんだなという視線がリンに集まる。それを受けて恥ずかしそうにはにかむ。

「これでしとやかになってくれれば言う事は無いのだけど」
リスの指摘にはにかみは苦笑いへと変わっていった。

というわけで、再挑戦。

奴の動きはこちらを発見したらまっすぐこちらを追尾するで確定のようだ。

最大にして唯一のポイントは見つからない事。見つかった時点で進めるか、戻るかを見極めなければ袋小路にはまってしまう。

壁にそって、視界に入らないように進んでいく。

追尾するといっても、こちらを視認するまでは決まったルートを巡回しているようで、進行方向から視界を推測する。そして反対側を向いたのを確認した所で、

「今だ！ 駆け抜ける！」

すでに次の扉を視認できていた事もあり、一斉に駆け出した。

けたたましい足音にFOEがこちらの存在に気付くが、追いつかれるよりも早く扉の向こうへと駆け込む。

「何とか切り抜けたか……」

扉の向こうから感じる気配が去っていくのを確認し、二度目の安堵の溜息をはいて更に奥へと歩を進めていく。

「このあたりか……」

大公宮で聞いてきた衛士達と連絡がつかなくなったという場所。目の前には扉があり、恐らくはその先で何かあったのだろう。

扉の先、というのは先ほどの事もあり中々行きにくいものがある。場合によってはあの赤いFOEと戦う事になるかもしれない。

「よし……いくぞ」

意を決して扉を開けて先に進む……と。

「くっ、何だこの臭いは」

扉を開けた瞬間、ものすごい臭気襲われ、たまらず鼻を塞ぐ。嫌悪感を直接めぐりだすような濃くて生臭い臭いはまるで……。

「あれは……」

扉の先にあつたのは先ほどと同じくらいの広場。ただ先ほどと違うのは視界に入れないのが無理なほどたくさんの死体が転がっていた。

「ひどい……」

その凄惨な光景にリンはふらつと後に倒れかけ、それをリズが支える。

死体は皆、公国の鎧を着ており行方不明とされていた衛士のもとと推測される。樹海で果てる事はよくある事とはいえ、ここまでのはそうそうにない。

生き残りはいないのかと辺りを見渡すと、先ほどの広場で感じたそれと似たような威圧感に気付く。

「鹿……？」

その威圧感の主は、下の階に生息していた鹿のFOEのような魔物だった。非常によく似ているがそうではないようだ。

体も角も一回り大きく、まるで鹿達をまとめる王のようだった。その鹿王はこちらをじっと見てはいるものの、一行に動こうとしない。よく見れば後ろには細い通路があり、まるでその通路を塞いでいるようである。

「あの奥、もしかしたら生存者がいるかもしれない」

「戦うんですか？あまり……気は進みませんが……」

何せこれだけの衛士がやられたのだ。先日倒した鹿と同じと思っ
てはいけない。

しかし君達は忘れていないだろうか？ミッションを受けた時に大臣から受け取った物があるという事を。

「そうだ、引き寄せの鈴……。これを使えば……」

取り出したのは小さな鈴。その音色はFOEを引き寄せるという頑として動かないあの鹿も、その場を離れざるを得ないだろう。

しかしFOEを引き寄せると言う事はそれだけで多大な危険を伴う。それに加え奥の通路を調べている間に、鹿王が元の位置に戻ってしまったりしては自分達も行方不明者の仲間入りしてしまうかも

しない。

「誰かが引き寄せておいて、他が調査する事に？でも……」

それは誰もが危険な事だと簡単に思うだろう。この広場、他に魔物の姿は見えないもののどこに何が隠れているのかなんて誰にもわからない。

「私がやるよ！」

それだけで引き寄せてしまえそうな大きな声でリンが立候補する。

「リン？」

「きつと私が一番身軽に動けるよ。足の速さだって、自信あるんだ。そう胸を張って主張するが、表情には緊張の色が現れている。」

危険だ、とは誰も言えなかった。誰かがやらなければならぬ事で、その中で一番危険が少ない適任である事が確かだからだ。

「しかし……」

リズは納得しきれない様子でためらいを声に出す。

妹を置いて一人でこの国にやってきたのは、やはり危険な目に遭わせたくなかったからなのだろう。

「その代わりに、ちゃんと出来たら皆のギルドに入れて欲しいな。」

お姉ちゃんと一緒に戦いたいから……」

その申し出に、リン以外のメンバーはくすりと笑う。

「もう、仲間だろ」

彼女の顔に満開の花が咲く。その嬉しそうな表情に全員の覚悟が決まったのか、一段と引き締まった表情になる。

「任せて、いいんだな」

フォンが鈴を取り出しながらもう一度問う。

「うん！」

元気よくそれを受け取り、パーティはそれぞれの役割を果たすため走り出した。

木々のざわめきは静寂を表わす事もあれば、一転して騒音にもなり得る。

力強く響かせた鈴の音も、それを追う激しい足音も吸い込んで聞こえなくしてしまう。

リンを欠いたパーティは素早く通路の奥へと進み、やがて小さな小部屋へと到着する。

「ひい……あ、ああ君達は……冒険者の人達か？」

そこにはひどく怯えた衛士が一人部屋の隅で身をかがめていた。

「そうだ。大公宮から依頼を受けて捜索にきた」

伝えると衛士はひどく安心した様子で握っていた武器を落とす。

ソニンが慌てて駆け寄り、医術を施す。

「た、助かった……。俺以外の皆はあの鹿の群れにやられちまうし、道は塞がれるしでどうしようかと思ってたところだ……。本当にありがとう」

衛士は君達へ感謝の言葉を何度も繰り返す。

しかしその言葉の中に聞き逃せない言葉が混ざってはいなかっただろうか。

「鹿の、群れ？」

「ああ。ここへの通路を塞いでいたやつがこの辺りの群れのリーダーなのか、やつに目をつけられると逆側にいる鹿どもが集まってくるんだ。俺達は完全に不意をつかれて……」

リズが一瞬にして部屋を飛び出す。突然の事に目を丸くする衛士もフォンが無理やり体を起こさせる。

「走れるか！？悪いが、仲間がピンチなんだ！」

「お、おう。メディックの彼女の腕がいいのかももう大丈夫だ」

ソニンは少し嬉しそうな顔をするが、すぐに戻しリズの後を追いつ始める。

送れて他のメンバーも全力で走りはじめた。

「リン！」

広場に出るなり、大声で名前を呼ぶ。リンの姿も、鹿の姿も見えない。

しかしうつすらと遠くに巻き上がっている砂埃が見える。

「お、お姉ちゃああん」

その砂埃の中からリンが姿を現した。

大量の鹿を引き連れて。

「良かった……」

とにかく手遅れでは無かった事を安堵する。しかし問題が解決したわけではない。

一直線に向かってくる鹿達は到底相手にできる量ではない。

「つて、こつちに來たら行き止まりだ！」

そう、このままでは引き寄せた意味がなくなる。だからといって今から入ってきた扉まで向かうには距離的に不可能だ。

「こつちに細いけど抜けれそうな道があるヨ！」

リリックが指し示す所は確かになんとか通れそうな抜け道だった。無理に通ればあちこちに傷を負う事になるだろうが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

「急げ！」

一人ずつ抜け道を通って行く。

リンがその抜け道に入ったのに続き、鹿達もそのままの勢いで抜けようとするが、その巨体に阻まれ侵入する事はできなかった。

狭い道を抜けた後、ようやく一息つけた所でリズがそつとリンを抱き締める。

「お、お姉ちゃん!?」

「無事で……良かった」

普段見られない姉の優しい行動と言葉に照れながらも、胸に顔をうずめ幸せそうな表情をする。

「本当に君達には助けられた。まさに命の恩人だよ」

「一人でも助けられて良かったです。では、街に戻りましょう」

幸い抜け道の先はマップング済みの通路だった。これなら迷わず

に街へと戻ることが出来るだろう。

御苦労だった！君達は無事に大公宮からの依頼をこなす事が出来た。街へ戻り報告を行うといい！

四階：空を舞う虫に脅え進んだ道

行方不明であった衛士を見事救出した君達は、その衛士から無視できない話を聞く。それは最近の魔物の大量発生、先の衛士行方不明事件が起きた原因の根本に位置する話だった。

公国の大臣はその話を重く受け止め、リアーリスに新たな依頼を出すのだった。

それは、百獣の王キマイラの討伐。

君達は期待に応えるべく意気揚々と受けてもいいし、自信が無いのなら断るのも自由だ。

病で伏せていたサクに、衛士の件と共にキマイラ討伐の人を受けたことを伝える。病状は快復し、なまっってしまった体をほぐしていたサクは、俄然やる気が出てきたとトレーニングにさらなる力を入れ始めた。

「そういえば、あの騒がしいリズの妹はどうしたんだ？」

ギルドの新しいメンバーとなったリン。その姿は辺りには見受けられない。

「あの子は今仕事中。貴方が行けるのなら探索の方はそれで事足りるから」

「病み上がりの人間にそこまで期待されても困るな」

「それだけ元気に動き回ってる人を病み上がりなんて言わないヨ」

「他の病人に失礼です」

「まっただ」

そこまで言うかというサクの苦笑いに、四人の笑い声が合わさって響く。

鹿の住処となっていた三階の広場を抜け、四階へと到着する。新たな階層へと足を踏み入れる時にいつも感じていた期待や不安は、今回は少ない。慣れてきたのか、それともキマイラという大きな目標があるせいで、薄れてしまっているのかもしれない。

ただし、少しの気の緩みがこの樹海では死に繋がる。君達は今一度気を引き締めて探索を始めるといい。

「ん……、人がいる」

先頭に行くフォンが、歩いている通路の先に公国の衛士がいるのを確認する。

どこか緊張した様子で辺りを見回していた兵士はこちらが気付くのと同時に君達の存在に気付く。

「君達がリアーリスかね？」

衛士はまるで君達が来るのを待っていたような口ぶりですら尋ねてきた。

「そうですか……」

「百獣の王を倒すべく新鋭の冒険者が送られたという話を聞いて、ここで待っていたんだよ」

会えて良かったと衛士は先ほどの緊張を解いた。樹海の中を一人で待つ、それがどれほど危険な事なのか君達にはわかるだろう。そうまでして待っていた彼の言葉を君達は心して聞くべきである。

「実はベオウルフが百獣の王を討伐するため、既に五階へ向かっている。彼らは、かつてあの魔物に挑み多くの仲間を失った過去がある。その恨みを果たすため、彼らは残った2人で魔物を倒そうと冒険を続けているのだが……。正直、5人で負けた相手に2人で勝てるのかどうか……」

ベオウルフという名前に君達は聞き覚えがないだろうか。

下の階層で出会い、大公宮の依頼の事を君達に教えた男は確か自分をベオウルフの者だと名乗ってはいなかっただろうか。

彼は衛士の事を君達に任せ、自分はやるべき事があると言って

去っていった。

「ベオウルフのリーダーはいいヤツだ。彼に万が一の事が無ければいいのだが……」

君達にも彼の心配がわかるはずだ。

「リアーリスの者たちよ。ベオウルフの事を頼んだよ」

だからこそ彼の頼みを快諾するのに何も問題はない。

君達は一刻も早く四階を踏破し、ベオウルフに追いつかなければならない。

「急ぐぞ、皆」

一行は衛士に軽く会釈をし、奥へと歩を進めていく。

「はあ！」

赤い袴が風よりも早くなびくほど一瞬のうちに懐へと踏み込み、胴体を真つ二つに斬る。

赤く、翼の生えた小さな獣は断末魔の叫びをあげる事も叶わず地面に落ちた。

「大した事は無かったな。障害物を越えて襲ってきた時には肝が冷えたが」

今一撃のもとに斬り伏せた獣はこれまで見たことがないタイプのFOEであった。積み重なった瓦礫に進路を阻まれているかと思いきや、それを飛び越えて襲いかかって来たのだ。

「この分じゃ、普通の魔物のほうが手ごわそうだな……ほら」

フォンが指さしたその先、何匹もの魔物がこちらを今にも襲い掛かってきそうな目でこちらを見ていた。

一步でも動けば、魔物達是我先にと君達という獲物に飛びかかってくるだろう。

「いくぞ！」

盾を構え、防御の姿勢を取るフォンを皮切りに一斉に空気が動き

始めた。

敵は今回初めて見るカタツムリの魔物のマイマイダイオウや、下の階で何度か見かけたオオテントウ等かなりの数がいる。

「手始めに一曲、いくヨ！」

リリックが猛き戦いの舞曲で味方をサポートする。

刀を握る手に確かな力強さを感じたサクは青眼に構え鋭い突きを繰り出した。

狙われたマイマイは慌てて自らの殻で防ごうとするが、リリックの歌に後押しされたサクの攻撃はその程度で防ぎきる事は出来ずにそのまま串刺しになる。

刀を引き抜く勢いのまま、パーティの元へと後退する。

それとすれ違うようにリズ放った弾丸が一匹のオオテントウを地面へと落とす。

その動きには無駄が無く、誰の表情にも不安や焦りの表情は見えない。

「猪が後退するとは奇妙な光景だな」

「誰が猪だ！」

そんな軽口も言えるほどに余裕があり、一匹、また一匹と魔物達はその数を減らしていく。

魔物達は隙とあらば襲いかかってくるものの、その全てがフォンの盾で行く手を阻まれ何も出来ずにいる。

鹿狩りや先日の衛士救出の件でそこそこの名前が売れはじめたりアリスであったが、その名に違わぬ戦いをしていると誰もが思うであろう動きだった。

「はあっ！」

サクの鋭い斬撃でマイマイが二つに分断される。あれだけいた魔物の軍団も、今やオオテントウ一匹を残すのみとなっていた。

「大した事なかったな」

フォンはもう必要ないだろうと防御の構えを解き、ソニンは治療に専念し、リリックは歌うのを止めた。あとはサクがもう一太刀振

るえば戦闘は終結する。

その様子は……やはりまだ新米ギルドであると言つ事を見せつけているようなものだった。

「ギイイイイ!!」

突然オオテントウが耳をつんざくような鳴き声を上げ始める。

止めをさそうとしていたサクは、その声に驚き刀を振り下ろす事ができなかつた。

「何だ!?!」

最後の一匹になった途端の強烈な鳴き声、予想される結果はそれほど多くは無い。

「仲間を呼んでいるのか……。しかし今更数匹くらい増えた所で……」

その瞬間、背後の木がなぎ倒され物凄い衝撃が起こる。

強烈な気配、低く唸るような息を吐く音。

「皆!散れ!」

フォンが焦つた声で指示を出す。

飛ぶようにその場を離れ、そして一瞬前まで彼らがいた所に植物のツルが振り下ろされる。

「なっ……」

その勢いもさることながら、それを打ち出した魔物の正体に声を失うしか無かつた。

自分達の二倍、いや三倍はあるのかという巨体。幾重にも絡まり合ったツルに支えられているように頂点に巨大な花を咲かせた魔物だった。

「サク!」

触手のようにうごめいていたツルの一本が勢いよくサクに向かつて伸びていく。

先ほどの攻撃で隊列が崩れたせいでフォンの守りが間に合わず、正面から受けてしまう。

「ぐ、っ」

自分の軽装を今更悔やむ事はしないが、軽傷とはいかないであろう感触に焦りを感じる。

何とか踏みとどまり、自らを襲ったツルを切断するがあの無限とも思えるツルをいくら切断したところで有効なダメージになるとは思えない。

「ならば！」

リズが赤色の弾丸を装填し、フレイムショットを撃つ。真紅の軌道は魔物の体に引火し、燃やしつくすはずだったが……。

「なっ！？」

巨大な花弁の中央、口と思われる場所から猛烈な冷気を吐き、炎の弾丸を打ち消してしまう。

冷気はそのままパーティを襲う。咄嗟にフォンが間に入り冷気を防ごうとするが、物理以外の防御は得意とする所ではないのか、若干程度の軽減しかできない。

凍傷になるほどのものではないが、凍えは確実に体の動きを鈍らせる。恐らくそうして自由を奪い、獲物を捕食するのがこの魔物の主な行動なのだろう。

「皆さん！今治します！」

冷気を出しきったせいか、動きが鈍くなった隙を見てソニンが治療をするべく走り出す。

しかしそれを狙ったかのように最後に残っていたオオテントウが彼女を狙って襲いかかる。

体当たりを受け、地面を転がる。リリックが駆け寄り彼女の体を起こす。一撃とはいえ、メディックの彼女にとっては見過ごせないダメージだ。

あれほど快勝の一途を辿っていたはずなのに、最後の油断によって引き起こされたピンチに全員歯がゆい思いを感じざるを得なかった。

フォンはこれ以上は被害を増やすだけだと判断し、脇腹を押えながら立ち上がるサクに走れるかと、威嚇用の弾丸はあるかとリズ

に目線で確認する。

巨大花とオオテントウはこちらの動きを窺っているのか動く様子はない。

下の階までの道順を頭の中で整理し、ジリジリと後退し、しびれを切らして襲いかかってくる瞬間に走り出す。

当然の如く追撃を始める。そして逃走を続けていくうちに、他の魔物……あげくは先ほどの羽を生やしたFOEもが背後から迫ってくる。

迫りくる恐怖は一瞬の油断がどのような事態を招くのか……という教訓を深々と体に刻んでいくのだった。

……無事、街へと生きて辿り着いた一行だったが、その姿は悲惨の一言に尽きた。

別行動をしていたリンとはいえば、見事に仕事を成功させたらしく対照的に光り輝いていた。

その成功は酒場の主人も大満足するようなものだったらしく、珍しく夕食を御馳走してくれた。

主人の珍しい行動は今日の悲惨な結果を浮き彫りにしているようで、気分は落ち込むばかりだった。

「残さず食べような……。後一個になっても誰かに油断とかするなよ……」

今日の教訓と食事とが変に混ざり合った言葉をフォンが漏らす。例え後一匹といっても、相手は樹海の魔物、何をしてくるかわからない。油断大敵と言う言葉を身に刻んで次の階層に挑むといい。

五階：百獣の王の吼え声

今君達の目の前には一匹の獣がいる。

ベオウルフの聖騎士と一緒にいたクロガネという黒い獣だ。

だがクロガネはその黒い毛を鮮血で赤く染めている。恐らくはもう、助からないだろう。

今すぐに倒れてもおかしくない傷だというのに、クロガネは毅然と立ち真つ直ぐと西を見ていた。

「う、ひつく……」

樹海の小道にソニンの泣き声が響く。

メイックとして目の前にある命がもう消えてしまう運命にある事がわかっていても、最後まで治療したい。しかしこれからその怪我の原因と仲間が対峙するとわかっている以上、ここで力を使うわけにはいかない。

その葛藤が、あふれる感情が涙と言う形で現われているのだろう。

ふとクロガネが視線をこちらに向けた。たった今君達の事に気づいたのだろう。

そして何かを訴えるかのように一枚の地図を差し出した。恐らくはベオウルフで使っていた地図……、それは進んだ先にある広間で途切れていた。

その地図を受け取ったのと同時に、クロガネは高く、高く声を上げた。

どこまでも響きそうなその声は、大切な何かを失った哀しみに溢れていた。

ベオウルフと呼ばれたギルドの顛末、運命……。君達はそれを深く感じ取る。

同時に途切れた地図の先に百獣の王キマイラがいると言う事を。

危険を感じたのなら君達はその場から引き返してもいい。
だがそれを振り払い、先に進むと言うのなら……。

その勇気を百獣の王に示し、ベオウルフという勇者が、それにつき従う騎士がいたギルドに捧げるがいい！

両者の激突はお互いの存在を確認した瞬間に始まった。

「グオオオオ！！」

赤い光が広場を包む。キマイラの吐く灼熱の炎『劫火』が、草を黒く散らしながら一直線に向かってくる。

フォンは突進の勢いそのままに盾を突きだす。

「うおおおお！！」

キマイラに負けぬ叫びを上げると同時に盾が赤熱したかのように染まる。

キマイラの炎はその赤に吸い込まれるように小さくなっていく。完全には消し切れず草と同じように髪を黒く散らされていくが、それ位では彼らの突進は弱まることなどなかった。

炎を中を走りきった後、フォンの背中から影が立ち上った。

天高く飛びあがり、刀で樹海の僅かな光を反射させながらキマイラに迫る。

上空の脅威を排除しようと尻尾が伸びる。キマイラの尻尾は蛇そのもの。毒を滴らせた牙がサクを襲う。

一直線に向かっていく蛇は突然その方向を変えた。一発の銃弾がその進路を阻んだからだ。

サクはまるでそうなることを最初から知っていたかのように真っ直ぐに刀を振り下ろす。

蛇の守りを失い、咄嗟に翼で顔を覆い防御する。

恐るべき硬さを誇る翼に刀は阻まれ、鈍い金属音を鳴らす。

「はあああ！！！！」

翼に止められた刀に更なる力が宿る。いつの間にか広場にはリリックの歌声に覆われており、翼の防御に肉薄、ついには突破し額に傷を負わせる。

鋭い痛みで顔を歪ませ、体を仰け反らす。それを隙と見て構えを変えフォンが斬りかかる。

サクほどに、とはいかないもののキマイラの傷を一つ増やす事に成功する。

しかし浅い。キマイラを仰け反らすまでに至らず、フォンが戻るよりも早くその剛腕が迫る。

これまでのどの魔物より強烈な打撃は大きくフォンを吹き飛ばす。それに終わらずもう片方の腕がサクへと迫り二人の体が広場に転がる。

ソニンが駆ける。薬でフォンを治療するように目でリリックに指示し、自らはサクの元へ。

ソニンの医術は薬を用いるより効果が高い。盾で守らずとも鎧がダメージを防ぐフォンよりサクの傷は深いはずだからだ。

だがキマイラはそれを許さず、巨大な口に赤いエネルギーを含ませる。

さきほど見た劫火が再びパーティに放たれようとしていた。瞬間、空気を切り裂くような青い弾丸がキマイラに着弾する。

リズのアイスショットだ。氷の魔力を含んだ弾丸は着弾した場所からみるみるキマイラを凍らせていく。

キマイラは口内に溜めたエネルギーを自分に向けて吹きつける。炎は見る間に氷を溶かせ、しかしその下の毛は少しの焦げもない。

氷はそこそこ有効だが炎は無駄、そう判断したリズはカバンの中の赤い銃弾を全て捨てる。

一発一発タダではないが、弾の選定に一瞬でも手間取れば何がおこるかわからない。その為の処置だ。

キマイラが氷を溶かしきる頃、ソニン、リリック両名による治

療は終え、再び元の陣形を取り戻すことができた。

フォンもサクも万全というわけにはいかなかったのか、若干苦しそうにしているものの握る手の力は揺らいでいない。

再びリリックの歌声が響きはじめたのを合図に、二度目の突撃が始まる。

放たれた劫火を真紅の盾で防ぎつつ距離を縮めていく。

「こつちだ！キマイラ！」

大声をあげキマイラの気を引く。剛腕がフォンへと伸びるが流石のキマイラでも完全に守りに入っている盾を前にしては有効打を与える事は出来ない。

その間にサクが一撃一撃傷を増やしていき、退避する隙をリスの弾丸が稼ぐ。

着実にダメージを重ねていき、こちらの被害はソニン一人程度にまで抑えられる。

このまま押し切れるかと思いついた時、突然キマイラは大きく羽ばたき後退する。

翼が起こす風圧に目を塞がれ、距離が大きく離れる。

「ガアアア！！」

すさまじい咆哮が翼の風圧のように広場を暴れまわり耳を襲う。

咆哮が収まった時、樹海の音がすべて消えていた。すべての生物が、植物までもが竦み上がってしまったかのような。

ただその静寂は長くは続かず、木々がざわめきはじめる赤い魔物が何匹も飛び出してきた。

四階で何度か見た体に不釣り合いな翼を持った赤いFOEが数匹、キマイラを守るようにパーティの前に立ちふさがった。

一匹だけなら恐るるに足りない魔物だったが、キマイラと対峙している時では状況が違う。一對五でなんとか拮抗を保っていたというのにそれが崩れてしまう。

しかしそれだけでは無かった。その赤く小さい体から奇怪なオーラを放ち、キマイラを包み込む。

途端にキマイラから受ける威圧が数段増し、そこにいるだけで空気を震わせている。

「あいつら……キマイラを強化するのか」

冷汗が頬をつたる。形勢は一気に不利へと傾き、見えていた勝機ははるか彼方まで消え去ってしまった。

「来る!!!」

キマイラの脚に力がこもり土を抉っていく。離れていた距離がたった一度の飛びかかりでゼロになっていく。

「ぐ、う」

正面からそれを盾で受けたフォンは、地面に自らの足の跡がメートルほど伸びた所で踏みとどまりキマイラと拮抗する。

長くは持たない、そう実感するもここで抑えなければパーティが瓦解してしまう。

再び一対五の状況に戻るまでは自分一人でこの怪物を抑えるしかないのだ。

フォンとキマイラの横を他のメンバーが通り過ぎて行く。

皆がキマイラが呼び寄せたシモベ達を倒して戻ってくるのが先か、自分が倒れるのが先か。

「来い!!!キマイラ!!!」

キマイラを押し返し、真っ直ぐに剣を突きだしフォンは決死の覚悟でキマイラへと挑む。

それに応えるかのようにキマイラは劫火を放つ。

対応は変わらない。真紅に燃える盾で炎を払う。煙が目を襲うが瞬きをする時間もなく次の攻撃がフォンを襲う。

左右の剛腕から繰り出される連続攻撃。ただでさえ強烈だといふのに、シモベによる強化で一段と重さが増している。一撃一撃を盾で受けていてもダメージは着実にフォンを蝕んでいく。

防戦一方だ。キマイラの攻撃は攻撃に移るための体制すら崩し、強制的に守りに回らされる。その守りも今や腕の感覚が失われつつあり、もしかしたら盾自体の限界が来てしまうかもしれない。

「がつー！」

それは予想以上に早く訪れた。一際強烈なキマイラの一撃をもらい、後方へ大きく飛ばされる。その一撃は盾の耐久力を超え、壊れてしまう。

防ぐ手段を失ったのを好機と見たのが再び劫火を放つべく巨大な口を灼熱の赤に染めていく。

この至近距離で守る手段もない。南無三、そう心によぎったフォンの手が何かに触れた。

それが何かを直感的に判断し、藁をも掴む想いでキマイラの口内目掛けて投げつけた。

それはキマイラの口の中に入るや否や爆発し、すさまじい衝撃を起こす。

その正体はリズが不要と捨てたフレイムショットの弾丸。劫火のエネルギーで引火し、爆発を起こしたのだ。火炎自体のダメージは通らずとも爆発の衝撃までは、ましてや口内で起こってはキマイラといえひとたまりもないだろう。

現にキマイラは口を大きく広げたまま気絶したかのように動かない。

役立たずとなった盾を放り捨て、両手で強く剣を握り真っ直ぐに口内目掛けて突きだす。

しかし寸でのところで動きを取り戻したキマイラは自らの口内に向けられた剣を鋭い牙で挟み、噛み砕く！

「なっ……」

全力で突進した勢いが災いして体勢が崩れる。

地面に倒れ込もうとするフォンの体をキマイラの剛腕が上空へと叩き上げる。

「がはっ」

打ち上げられたフォンの体は地面に叩きつけられ、深刻なダメージを負う。決死の意味が何とか意識を繋ぎとめたものの、体は鉛のように重い。

だがキマイラの攻撃はそれで終わらない。蛇の尾が地面に倒れ込んでいるフォンの首めがけて伸びてくる。

横に転がるにも重くなつた体はどうにも動かない。

「風のごとく疾れ！二番、韋駄天の舞曲！！」

駆け抜けるような疾走感を持つたリズムがフォンの体を包む。

鉄のようだった体は羽のように軽くなり、蛇の尾を紙一重の差で躲す。

二度、三度と繰り出される蛇の尾をがむしやらに転がって躲していく。軽くなつたとはいえ重い傷を負つた体は動かすたびに悲鳴をあげるが、気合で抑え込む。

幾度となく繰り出された追撃はキマイラを襲う氷の弾丸と刀の斬撃により終わりを迎える。

「フォンさん！無事ですか！？」

ソニンが駆け寄り治療を施す。普段使っている医術では到底治しきれず、ソニンは一度深呼吸し、一気に力を開放する。

まばゆい光がフォンを包み、見る間に傷を癒していく。

しかしその代償にソニンは明らかに衰弱した表情になり、苦しげな笑みでフォンを見る。

その表情にフォンは胸が痛くなるのを感じた。今の自分は剣を失い、パラディンの命とも言える盾も失った。彼女の奮闘に応えられないものを持っていない。

（そんな事はない）

はつと顔をあげる。

どこからか声が聞こえたような気がした。ソニンではない。彼女は苦しげに呻いているし、何よりあれは男の……。

「くっ」

灼熱の炎がサク達を襲う。

防ぐ手段が無く、出来るだけ被害を負わないよう躲すが火傷の数は増えていく一方だった。

リリックは歌声に乗せる魔力を切らし、弓で応戦しているが効果はあまり期待できそうにない。

アイスショットを撃ち尽くしたりズも、通常弾をいくつもキマイラへと撃ちこんでいるが、一体何発撃ち込めばキマイラは止まるのか……見当をつける事も出来ない。

サクが持ち前の速さで躲しながら攻撃を加えているが、避けきれない劫火によって徐々に削られていく。

「しまっ……」

ついには足に負った火傷で体勢を崩し、殴り飛ばされる。

残されたのはすでに魔力の尽きたリズとリリックのみ。

かばうようにリズが前へと出るが、対抗できる手段はない。

後はその腕で二人まとめて飛ばされるだけだ。

「させ、るかぁー!!」

鋭い突きがキマイラの腕に深々と突き刺さる。

結っていた髪は解け、額を血で濡らしながらの渾身の一撃はキマイラの片腕を封じる。

だがそこで力を使い果たしたサクは、刀から手を放し地面へと倒れ伏してしまう。

状況は少し前に戻る。違うのはキマイラの攻撃が劫火へと変わり、その餌食にサクが加えられたという事。

放たれる灼熱の炎。防ぐ事も避ける事もできず、ただ目を瞑り恐怖に耐えている。

キマイラは仕留めきつたと確信したのか、残りの獲物を探している。

「これで、終わりだ!!」

煙が揺らいだ。劫火が立ち上らせた大量の黒煙から、一つの人影が、フォンが飛びだし完全に不意をつかれたキマイラの額に剣を突き刺した。

彼が持つ剣と、盾。キマイラにも彼らにも見覚えのあるものだった。

ベオウルフのギルド印が刻まれた、既に役目を終えたはずの武器。

再び目を覚ました盾に攻撃を防がれ、剣に額を貫かれ、キマイラは崩れ落ち、その動きを止めた。

「そうか……ベオウルフは間に合わなかったか……」

キマイラを討伐した君達は大公宮へと報告に訪れていた。

とはいえあれから三日ほど経っている。体力、精神共に使い果たした状態から回復するまでにそれだけの日数を要したのだった。

大臣は君達の報告を聞くと、喜びの声を出したがベオウルフの事もありませんに声を落とした。

「持って帰れたのは、これだけです」

キマイラを討伐し、君達は何より先にクロガネに報告に行った。

クロガネは礼を言うように君達に向かって吠え、自らの首輪をそっと差し出し、眠りについた。

亡骸を、広場で見つけた彼の元へと運び、戻ってきた。

「でも最後のいい所は、もってかれちゃいましたよ」

最後の最後に君達を守った盾と剣は、本来の持ち主の元へと返してきた。

おかげでフォンは今でも手ぶらであるが、買いなおせば済む話である。

「して、リアーリス殿はこれからどうするのじゃ？」

「もちろん、上へ行きます」

迷宮はまだ終わらない。

その果てを見るまでは君達の冒険は決して終わる事は無いのだ。

五階EX：とあるカスメの病毒呪言

キマイラ討伐の功績を認められ、リアーリスに専用の住居が貸し与えられる事となった。

十人以上を住まわせる事ができる広いスペースに台所や風呂にトイレも完備されている。同じ条件の物件と比べたら値段も割安でお得要素が盛りだくさんである。

しかしながら現在リアーリスのメンバーは六名。その好条件を持って余し気味で、収入のほとんどを家賃にとられてしまうのが現状だった。

ならばどうするのか。新しいメンバーを迎え入れればいい。幸い名も売れてきた事もあり、勧誘には手間取らなかった。

そして目出度く新たな仲間となった二名を紹介したいと思う。

「あ、これ美味しいヨ」

リックがテーブルに出された様々な料理をついばむように口に運んで行く。

他のメンバーも口にするたびに顔をほころばせている。

その様子を満足そうに見ている一人の青年がいた。

金色の髪に使い古したような衣服を纏い、奇怪な形のグローブを手にはめている。

今は上にエプロンを着用しており、そのミスマッチさがどこか笑いを誘う。

彼の名はクラंक。リアーリスの新メンバーであるアルケミスだ。

「いや、本当に助かった。部屋を借りるようになったというのに誰も料理ができないなんて……。外で済ませてたら金がいくらあつ

てもたりないし」

「ごちらとて名高きリアーリスのため、この力を振るえるとは術師冥利に尽きる」

主に振るってもらうのは料理の力なのだけでも。

「しかし珍しいな。アルケミストってのは職業柄合理主義ばかりでこういう料理なんてしないものと思っていたが」

「何、してる事は術式の起動とさして変わらぬ」

その言葉に全員が「えっ」と顔を強張らせる。

料理している最中を見たりはしなかったが、もしや実験器具等で作ってたりなんて事が……。

「正しき原料、正しき方法。そして溢れんばかりの愛！それさえあれば術式も料理も応えてくれる」

「術式にも……愛なんですね」

実験器具フラグはどうやら回避されたようだが、妙なメンバーを引き入れてしまった事には変わりはないようだった。

自称愛の伝導率100%（意味不明）のアルケミストが一人、クランク。リアーリスに加入す。

「美味しいご飯の代償って事なのかな……」

自炊手段という貴重な財源節約の術を手に入れたリアーリスであったが、もう一人新しくリアーリスに籍を置く者が増える事となる。

その者については事の始まりから順を追って紹介していくとしよう。

始まりはキマイラを討伐してから半月ほどたった大公宮での出来事だった。

「キマイラが復活した!？」

大公宮からの呼び出しを受け馳せ参じたリアリスであったが、その要件を聞き驚きを現わさざるを得なかった。

激戦の果てに何とか討伐を果たした百獣の王キマイラ。それが再び樹海に出現したという。

「そうじゃ……報告によれば今は大人しいようじゃ。子供なのかもしれん。じゃが放っておけば再び以前の惨劇を繰り返す事になるやもしれん。そこでじゃ、リアリス殿に再び討伐を依頼したいのじやが……」

君達はうつむくようにして考える。

確かにキマイラは放っておけない問題ではあるが、例えば子供だとしても安請負をする事はできない。現に一つ、キマイラによってギルドが無くなっているのだから。

「……そうじゃ、主達が倒したキマイラを調べてわかった事があるのじゃが……」

大臣は公国の資料を持ち出し、君達に一つの事実を与える。

それを信じて動くかどうかは君達の自由だ。

はじめまして、皆さん。私の名前はキリと申します。

職業は……カースメーカーです。本当はメディックになりたかったけど、どうやら私にはそちらの才能が全く無かったようです。なのにカースメーカーの才能は人一倍あったようです。きつと家系が関係しているです。でもなってしまうたからには仕様が無いので

す。この力を人の役に立たせるために一念発起してハイ・ラガート公国までやってきたのですが、すごい賑わいにのまれてしまいました。未だどこのギルドにも所属できていません。

「……私は、誰に自己紹介してるのですか」

冒険者達が集まる酒場の中で座りながら今日何回目かもわからない溜息を吐く。

闇に融け込みそうなロープを身に纏い、色素の薄い灰色の長い髪は一房の三つ編みによってまとめられている。

水色の双眸に数日前まで溢れていた希望の光が今は沈みきっている。

格好はもとより、存在感そのものが闇と同化しており誰も彼女を気にする者はいない。

いつからこうしていたんだろう、いつまでこうしているんだろうと悩む事にも飽き、グラスに移る自分をぼうつと見つめていた。

誰かを助けたくてメディックを目指して挫折してカースメーカーになり、能力はあるのに自分の弱さのせいでまた挫折する。

情けなさ……それが彼女を未だここに留めている理由だった。

また一つ、溜息を零す彼女の隣に誰か座った。

男の人だった。でも気にする事じゃない。例え誰も彼女の事を気にしなくても、隣に誰かが座るなんて事一日に数回はある事だ。

でも、その男は彼女に向けてこう言った。

「君の力を借りたいんだ」

「これ……何です？」

渡されたのは幸運を呼ぶとされているネックレス。

が、三つ。

「あの、これ全部つけなければ駄目です？」

頷かれます。おかしいです。ありえないです。

防具は基本的に三つです。それ以上は邪魔になってしまつから
です。

アクセサリはその中でも特殊で、一つ装備するためには三つの
中のどれかを外さなければ効果をなさないのです。

それが三つです。

つまりどういう事になるかという事ですと、同じネックレスを
三つ首から下げてるうえに、ローブの下は何も着ていない状態にな
ると言う事なのです!!

カースメーカーという職業上、呪言を唱える時には手足に拘束
具をつけて自分を戒める必要があるですが、そしたら私ただの変態
さんになってしまつです!!

「君の力が必要なんだ」

男の人はまたあの言葉を繰り返します。彼の名前はフォンさんと
いうらしく、リアーリスというギルドのメンバーらしいです。

それを聞いた時には少し驚いたのです。リアーリスの名前は私
も聞いたことがあつたのです。

そんなギルドから直接勧誘されるなんて感激です。でも、それ
とこれとは別問題なのです。

「納得の行く理由を教えてくださいのです」

それがギリギリの譲歩です。納得できたら……我慢するです。

するとフォンさんは話し始めます。まず最初にキマイラが再び
現れた事。キマイラを倒したって噂は本当だったですか。

次にそれを放っておけないという事。確かに放っておけないで
す。

最後にキマイラの弱点が毒だという事。だから私の力が必要で、
その力を補助するためのネックレスだという事。

「って私も一緒に討伐しに行くのですか!？」

頷かれます。おかしいです。ありえないです。

キマイラといえは恐ろしい怪物です。有名なギルドが一つ無く
なつたとも聞きます。

それを弱点だからといって、私みたいな素人と一緒に討伐しに
いくなんて。

「出来ないかな」

その言葉に少しカチンとして、頭が少し冷静になったです。

私は何を悩んでいたのです。今の状況こそ、私が望んでいたも
のではないですか。

「やるです。やらせてくださいです」

私の力で誰かの役に立てる瞬間を、ずっと望んできたのではない
ですか。

「我、汝を病毒の疫に侵さん！」

毒々しい色をした霧がキマイラを包み込む。

カースメーカーの技術の中で基本である病毒の呪言。キマイラを
体内から蝕み、その体力を奪う……はずだったのだが。

「グオオオ！！」

「うわっ、ととと……」

強烈な咆哮で呪言の霧が振り払われる。

弱点……とはいうものの、相手は百獣の王。そう安々とかかっ
てはくれなかった。

サク、フォン、リンの三人で前線を保ち、キリが毒に侵す。そ
う取り決めたが、思うようにいかずに苦戦を強いられる。

ネットワークスにより成功率に幾分か補正がかかっている以上、
後は数を撃つ、そして本人の技量次第でどうにかなる所にいる。

両手足に拘束具をつけ、その内に負を溜め、それを呪言にのせ
て敵を討つ。

しかし焦りや不安は負のうちには入らない。それどころか溜め

こんだ負を散らしてしまう。

キリは、今まで感じた事のないほどに動揺していたのだ。役に立ちたいという、やっと役に立てるといふ思いに隠れていた自分が失敗すれば自分以外が傷つくという事実は今更気づいたのだ。

「侵さん!!」

再び霧がキマイラを包み込む。

だが結果は同じ。咆哮によって散らされてしまう。

それだけに終わらず、キマイラがキリにむかって猛然と飛びかかってくる。

「きゃあっ!!」

手足を拘束しているので回避行動がとれず、その場に腰を落とすてしまう。

やられる、そう思った瞬間に一つの影が間に入って防ぐ。

「フォン……さん」

ぎりっ、ぎりっ、とキマイラと拮抗しながらフォンはゆっくりとキリを諭す。

「……っ。焦る事は、無い。俺達は絶対君を守るし、君は俺達を絶対守ってくれる。俺はそう信じてる。だから君もそう信じて欲しい」
守る……その言葉が、とても重く感じた。

そして思い出した。自分は誰かの役に立ちたいのではない。誰かを、守りたかったのだと。

彼女は守りたいと思えばえる存在の事をどう表現するか知っている。

「仲……間」

「そうだ。俺達はもう仲間だ。だから……ブツ」
フォンが満足そうにキリの方を向き、吹いた。

何に……とキリは疑問に思った瞬間に気がついた。

腰をついたせいでローブがめくれ、その下が見えてしまっていたのだ。

ついでに言うならば彼女が今装備しているのはネックレスが三つ、のみ。

「きゃ、あああああ!!」

しかし手足が使えるなければロープを戻すこともできない。

ソニンが駆け寄り、ロープを元に戻す。

「あ、あ……っ」

キリは既に恥ずかしさでパニック状態に陥っていた。

せめてもの自己防衛か、先ほどまで何回も唱えた言葉を再び口にする。

「我、汝を病毒の疫におか、おかおかおか侵さん！」

病毒の霧が一気に立ち込める。

「っつて、ちょ、うわっ」

標的はキマイラではなく……フォン。

いち早くそれを察知したフォンは慌てて横に飛び回避する。

毒の霧はそのままキマイラへと襲いかかり……。

「グ、グゴオオオ」

その巨体を蝕んでいく。

「あ、効いた」

リンが呆気にとられながら呟いく。

「い、今だ……!!」

サクがはっとして号令を出す。

動き出したサクにリンが続ぎ、体勢を取り戻したフォンも加わり総攻撃が始まった。

毒に侵されたキマイラは明らかに動きが鈍っており、三人による怒涛の攻撃の前に為す術もなく倒れた。

「や、やったです……」

初実戦の相手がキマイラという、壮絶なデビュー戦を勝利で飾ったキリはやり遂げた充実感に満たされていった……。

「それで貴方は彼女を辱めておいてのうのと生きて帰ってきたわけ？」

フォンさんがリズさんの前に正座をして説教をくらってるです。

罪状は私のは、ははは裸を見たことです。思っただけで恥ずかしいです、フォンさんにはしっかりと折檻を受けて欲しいですが、残念な事にフォンさんにはリズさんをたしなめる秘策をもっているのです。

「そ、そうだ。これ、お土産なんだけど……」

「フン、そんなもので取り繕えると思っ……」

リズさんにドサツとかなりの重みをもった革袋が渡されるです。

中身は実に30000enという大金です。私も受け取った時は腰が抜けて……また見られてしまうかと思うくらいに驚いたです。30000enというのがどれくらいの大金というですと、クエストでこれと同額の報酬がもらえるものと、命を二つほど賭けないといけません。

その出所はキマイラの素材です。それは普通の素材とは違うらしいです。

「どうやら毒にかかっている状態でのみとれる翼らしくてな、交易所に持っていったら物凄く驚かれて、気前よくくれたんだよ」

ひまわりちゃんのうるたえぶりはすごかったです。おとーさーん！おとーさーんって叫びながら奥に走って行って、戻って来た時には大興奮した顔してたです。

「ほー……」

リズさんは既に革袋（の中のお金）しか見えてないようです。残念です。

「ああ、そうだ。忘れてた」

フォンさんに、皆が私のほうを向いて……。

「ようこそ！リアーリスに！」

両手を広げて私を迎え入れてくれたです。

その時、私は決めたです。大切な仲間を、私の力でずっと、ずっと守っていくです！

「もう一度キマイラでないものか……」

ぼそっと呟いたリスさんの言葉に、決心がちょっと揺らいだです……。

後日談。

「フオ、フオオオオオ！！」

リリックが狂喜の叫び声を上げた。

その手にはこの前交易所に売ったキマイラの素材で作られた弓が握られていた。

「こ、これ欲しい、欲しいヨー！！」

弓を使わない人にはわからないが、どうやらかなりすごいものであるらしい。

「い、いくら！？これ、いくら！？」

震える手で値札を見る。

2310000e.n。

まあ、300000e.nの素材を使ったら、そんなよね。

六階・見えざるバリアと出会った小道

「何なんだあのカボチャは!!」

酒場の一角でサクはグラスに注がれた飲み物を一気に飲み干し、テーブルに叩きつけるように置く。

他の客が驚いて注目を浴びるのも構わず、二杯目も浴びるように飲んでいる。

同席している他のメンバーもそれを咎める様子はない。それどころか皆、どこかしらに怪我を負っておりどうやら樹海で何かあったようである。

彼らが足を踏み入れたのは第一階層『古跡ノ樹海』を越えた先にある第二階層『常緋ノ樹林』だ。樹海、という言葉をそのまま表現していたかのような緑あふれる第一階層とは違い、全ての木々が紅く染め上げられ秋の容相をしていた。

心なしか気温も低く感じられ迷宮の中は季節すら問題としない不可思議さを目の当たりにした。

その新しい迷宮の中、リアーリスは十分な注意のもと念入りにマッピングを行っていたのだが、その途中突然FOEの襲撃を受けたのだ。

完全に気配はなく、誰一人として気がつかぬまま戦闘状態へと入ったFOEはカボチャの姿をしていた。

トリックオアトリートと言いたげに刻まれた顔は時として皆を和ませるが、場所が迷宮の中となればこれ以上ないほどの不気味さを放っている。

もちろん彼らはそれを落ち着いて迎撃する。フォンが守り、サクが攻め、リズ、ソニン、リリックの三人が援護をする。いつものパターンであった。

しかしそのパターンは初撃から覆される事となる。サクの刀が全く通じないのである。

防御が硬い、というレベルではない。まるで刀が本体まで届いていない……まるでバリアでも張られているかのような感触だったのだ。

それはリズの弾丸、さらにはリリックの弓も同じ事だった。カボチャはキマイラすら屈したリアーリスの攻撃を虫の体当たり程度にしか感じていないかのように悠々と攻撃を開始した。

一方的な形勢に撤退を決め、ほうほうの体で街へと逃げ帰って来たのだ。

「それは……きっと耐性が強いのだと思うです」

心配して様子を見にきたキリが、事情を聴いた後そう口を開いた。
「耐性が……」

耐性とは敵の耐久力……硬いとかそういうものとは別のいわゆる得意不得意を表わすものだ。

例えば草の魔物のほとんどは火が弱点で……あのキマイラは火に強い耐性をもっていた。

「そうになると……あのカボチャは物理的な物に耐性をもっているのか？あそこまで極端なのは初めて見るな……」

「すみません……。私が変化の呪言を扱えれば耐性を打ち破れるですが、病毒の呪言と違って変化は難しいですから……まだうまく扱えないです……」

「気にするなつて。しかし……気配が無い以上、次の階に登るまで何度か襲われるな……。対策が無いまま進むのは危険……か」

出会ったすぐに逃げる事になるのだから、毎回簡単に逃げられるわけではない。倒すまでいなくても、少なくともひるませる程度の事は出来る事に越した事は無い。

「物理がダメなら属性攻撃……属性、ならば」

リズが何かを閃いたように顔を上げる。

「明日の編成は私に任せてくれないか」

翌日の探索メンバーはいつもと一風変わったものとなっていた。

リズ考案の対カボチャ用の編成だ。

前衛にサクとリン。後衛にリズとソニン、そしてクランクが配置されている。

「サク、貴方は確か雷属性の剣技を扱えましたよね」

「それほど得意というわけではないが……。一応扱えるといえば扱える」

十分だ、とリズは頷きリンの方へ向きなおす。

「リンも昨日説明した通りです。わかってますか？」

「すごいなあ。前の所も綺麗だったけど、ここはなんだか風流っているのかな！そういうのがあるよね！」

はあ、と溜息をつく。小さく信じてますよと呟き前を向く。

向かうは先日カボチャと遭遇した通路。

気配は無くとも目にはちゃんと見える。警戒してれば後手に回る事は無いだろう。

通路を進み、何体かの魔物を倒して到達した場所にカボチャはいた。

その姿は遠めでは紫色のモヤモヤに見え、行動パターンは鹿のそれと同じに見える。

しかしその存在感は極めて薄く、実際に目に見えているのに見失ってしまいそうだ。

「一気に攻める！しかし属性攻撃以外は厳禁だ！」

リズの号令の下、戦闘が開始された。

「はあっ！！」

先手はサク。青眼に構えた刀が気合とともに青白い雷に包まれ、まるでサク自身が横に走る雷のようにカボチャへと突進する。

相変わらず刀による突撃は手応えが無いものの、雷によるダメージ自体は若干ではあるが通っているようだ。

「ていやあー！」

しかしそれだけでは終わらなかった。

サクの攻撃に合わせリンがカボチャに一撃を与える。

その剣にはサクが放った雷が宿っており、再びカボチャに雷のダメージを加える。

チエイズと呼ばれるソードマンのスキルの一つだ。

味方の属性攻撃に合わせて自らも属性攻撃を行う。属性攻撃を主体に戦う場合かなり有用なスキルだ。

「まだだ!!!」

リズのアイスショットがカボチャに迫る。

蒼い軌跡が真っ直ぐに走り、その頭部を凍らせる。

「はい!!!」

そこに再びリンのチエイズで追撃する。流石姉妹といったところか、先ほどのサクの時よりも息の合ったタイミングの追撃にカボチャの額にヒビが入る。

もう一押し、そう判断したクランクが更なる追撃を行う。

「起動、炎の術式!!! 燃え盛れ愛の炎!!!」

「え!?!」

変な口上にリンは戸惑いつつも追撃の準備をする。

しかし……。

「む、どうやら炎は効かないようだ」

物理攻撃同様、見えないバリアのようなものに炎の術式はかき消されてしまう。

「むきゅっ!!!」

炎属性で追撃しようとしていたリンも、そのバリアに阻まれ、剣を弾かれる。

その隙を狙ったかのように、カボチャにささっていたキャンドルの炎が激しく燃え上がり、一行を襲う。

「おお、おわつと……!」

直撃こそ避けたものの、数か所を焦がしてしまう。

「ク、クランクさん!!!」

その中で一人だけ真つ先に退避し、無傷で済む克蘭ク。

「炎が効かないとは……。私の出番はもう……。無いようだ」
わざとらしくがつくりと地面に手をつく。

「炎属性のしか使えないんですか!!」

「炎は良い……。愛の炎……。料理は火力……。まさに私のためにある属性……」

ブツブツと呟きながら鞆を漁り、一枚の札を取り出す。

「仕方がない。これを使おう」

その札を掲げると、いくつもの氷塊が飛びだしカボチャへと向かっていく。

「て、ていやあ!!」

いつもと違う手段に戸惑いながらもしっかりとリンが追撃する。

「何ですか？それ」

「術式の起動符だ。これさえあれば術式の素養が無いものでも扱う事が出来る」

そういつて見せた鞆の中にはぎっしりと起動符がつまっていた。

「そんなのがあるなら私にも下さいよ!!」

手持無沙汰だったソニンが怒りの声をあげる。

「無事に討伐できたようだな」

街へ戻ったところをフォンが出迎える。

戻ってきた一行を見てフォンがそう思えるくらいにカボチャ狩りは順調に進んでいた。

次の階に進む際に障害になりそうなカボチャは恐らく全滅させ
たし、カボチャから採取したどの物かは全くわからない骨に、特
徴的なカボチャの頭。素材になりそうなものを大量に持ち帰ってい

た。

「とりあえず交易所に持ってか無いといい物が悪い物が判別はつかないがな」

戦利品を交易所に持ち込み、今日の探索は終了となった。

「ほあゝ……、力がみなぎるです……」

「これは…… 思わぬ戦利品かもしれないですね……」

後日、交易所に新しい装備が追加されていた。

カボチャから採取した骨。それを素材にしたミラージュロッドという杖だ。

軽く、攻撃力はあまり見込めないものの、そこには握った者にしかわからない力があつた。

「ふお、ふおおおおおですう……」

興奮を隠せないようである。

七階：痛みも恐怖も秤にのせて進んだ森

リアーリスも随分と有名になってきた。忙しい毎日の中にいたせいか、おかげかそれを実感する事はなかったのだが、今日その事実を実感させられる出来事があった。

大公宮より緊急の任ということで召集され、そこで聞かされた事は一部の冒険者にしか聞かされていないという公国の秘事であった。公国が迷宮探索を勧めている訳は表向きには空飛ぶ城の発見という事だが、その裏で真の目的があるのだという。それは公国を治める大公が重い病で伏せているらしいのだ。何人もの治療士や巫医がサジを投げるほどの。そんな状況に心を痛めていた公女が、公国に残された古い文献に治療法が書かれている事を見つけたらしいのだ。真実かどうかはわからないが、今はそれにすぎるしかない状況だ。

そして最近文献に載っていた治療法に使う材料の在りかが判明したのだ。幻獣サラマンドラが脱皮した際に残す羽毛。それが今回のリアーリスへの依頼だ。

サラマンドラの住処は八階だという。

君達はこの依頼を成功させるためにはまず七階を踏破せねばならない！

目の前の魔物達が次々と崩れ落ちていく。

魔物達に傷は無く、ただ眠っているだけのようだ。

「大活躍だな。キリ殿」

「私の出番が無くて退屈です。退屈なら退屈でそれが一番なんですけど」

クランクの背負われながら睡眠の呪言で魔物を眠らせていくキリ。

無力化された魔物はサクヤフォンによって片付けられていく。
「がんばりますです。でも、クランクさん……私重くないですか？」
呪言で敵を無力化しつつ行く事で被害を最小限にしながら探索を進めているが、そこにはちょっとした問題があった。

呪言を唱えるには手足の拘束が必須である。カースメーカーにとって拘束の付け外しは容易な事なのだが、呪言に頼り切りの場合は多少面倒になってくる。

そこでキリは常に拘束具をつけ、動きの制限されるキリをクランクが背負って運ぶという形になっている。

実質クランクが戦闘に参加できない状況となってしまうているが、それを含めても呪言の効力は高かった。

「ああ、むしろ戦闘に参加してない分軽いくらいだ。強いて言うならば背中にあたる感触が少々物足りぬぐうっ」

キリが体重を後ろにかけ、手枷の鎖でクランクの首を締めあげる。「失礼な事言わないで欲しいです！」

拘束を外して自分で歩きだすキリ。どうやらもう背中に乗りたくないようだ。

「クランクもめったな事を言うなよな。もっと寂しいヤツがあっ」「ほほう、それは誰の事かなあ？」

フォンの頬に鞆の一撃が繰り出された。

締められて咳きこんでいる男と、頬を押えながら倒れ込む男が倒れ込む樹海の風景というのはとても妙である。

「時にフォン殿……」

「……何だ」

そんな状況でひそひそと会話をすると妙さにも拍車がかかる。

「私の解析によるとリアーリスで特に立派なのは実はソニンどござっ
っ」

「がふあ」

「いい加減にしてくださいっ」

遠心力たっぷりの杖の一撃が二人を襲う。

「今回は俺関係ないよな……」

遺言を残しつつ男たちは樹海の土へと還っていった……。

「裏切り者……」

「二人ともっ、そんな目で見ないでください！普通ですよ普通！」

後にとあるアルケミストが一つの言葉を残した。

あれは、着痩せするタイプ……と。

「っ。ちよっと待った」

気を取り直して探索を再開し、暫く経った後に先頭に行くフォンが手で行く手を遮る。

奥の通路を指差し、注意を促す。その先には黒い何かがつこめいているような床が広がっていた。

「ダメージ床だな」

その上を歩けば体力を奪われるというダメージ床。そのまんまなネーミングではあるが、そのまんまの効果があるだけに無視はできない。

「どうするです？遠回りすれば避けて行けるようですけど」

ダメージを受ける覚悟の近道か、それを避けての遠回りか。遠回りすればその分魔物達と出会う事になるだろうが、近道を通ったとしてもそのリスクは少なからずある。

ダメージを受けながらの戦闘になる事を考えるとやはり遠回りしたほうが安全か。

「いや、待て。FOEがいる」

遠回りの道を塞ぐようにFOEが徘徊している。一度は遠回りが安全と判断したが、これで状況は五分五分となった。

ダメージ床の痛みを取るか、FOEの恐怖を取るか。

「くっ」

突如フォンがダメージ床へと一步踏み出し、その顔を歪ませる。

「フォンさん!?!」

「……ふう。それほど……大した事はないみたいだが……問題ナシと言えるのはせいぜい十歩程度か」

「どうやらどの程度のダメージを受けるか身をもって経験しに行つたようだ。」

「無茶しないでくださいとソニンに怒られながら治療を受けている。」

「……よし」

治療を終えたフォンが立ち上がり、真っ直ぐに次の部屋の扉を指差した。

「彼らはダメージを取る事を決めたようである。」

「全員が一步ダメージ床へと踏み入り、我慢できるかどうかを確かめし歩を進める。」

「一步進むたびに体中が痺れる感覚が走る。一回一回は大した事が無くとも積もれば随分と体力を持っていかれる。」

「こんなもの、大したことないだろう。急ぐぞ!」

「そんな中、サク一人が平気な顔をしながらダメージ床を走って行く。」

「これが気合の為せる技かと感心するも、ふと違和感に気付く。」

「サク殿、何やら見慣れぬ靴を履いているな」

「ん、とサクが振り返り自分の足元を見る。」

「これは、さつき箱の中に入ってたやつだが……何か?」

「ソニンが近づき、じつとその靴を調べる。」

「これ……斥候用の長靴ですよ。ダメージ床も安全に歩けるっていう……今とっても欲しい道具……」

「……。」

「何一人で楽しってるんだ……!」

「え、ええっ!?!」

じわじわとくる痛みは……時に体力を奪うと同時にストレスを置いて行く。

まさにそのストレスが爆発し、フォンが叫び声を上げた。

「サクさん……その靴を私に下さいです……。ああ、なんだか拘束していないのに呪言が漏れてきそうです」

「キリまで……」

靴を求めサクに迫っていく。その間もダメージは入っているというのに最早誰もそれを気にしていない。

「み、皆、落ち着いて、落ち着いて、ね？」

ジリジリと後に下がりながらなんとか宥めようとするもゾンビのようにせまってくる面々は止まらない。

床のダメージはそのまま恨みとなり、体力は奪われるが原動力は際限なく増えていく。

「あは、あはは……は？」

ふと、背中に何かの気配を感じる。

そして気づく。靴越しからでも僅に受けていた床のダメージが先ほどから無くなっていった事に。

恐る恐る振り返ると……。

「それで、ダメージ覚悟で近道を通った上にFOEとも遭遇した……と」

今日の報告を聞いたリズが深く溜息をつく。

体力を削られきった状態ではFOEとマトモに戦えるわけもなく、残っていた体力を全て逃走につき込み、なんとか難を逃れる事となった。

「これで八階までの道筋を把握できていなかったら……大事な一日

を無駄にするところだったぞ」

リズの小言も疲れきったメンバーの耳には届いていないようだ。

深く溜息をつき、窓の外に見える世界樹を眺めながら、

「こんな有様で、サラマンドラの羽毛など持ち帰れるのだろうか…」

正直な気持ちを吐き出していた。

八階：炎を纏いし騎士の棲家

大公宮には巨大な資料室があり、そこには迷宮に潜む魔物の生態や武器や防具の性能等、冒険者達にとって有益な情報が多くある。

膨大の一言に尽きるほどの量があるが、幻獣サラマンドラの実は未だに明らかになっていない。

魔物の情報は主にその魔物の体の一部、もしくは亡骸そのものを調べて得たものだ。

情報がないという事は、未だ誰も討伐する事ができずにいるという事。

君達がこれから相見えるのは未知の怪物。その事実をしかと胸に刻み、覚悟が決まったのならば目の前の扉を開けるがいい。

「……………」

八階に到達してすぐ、大臣から受け取ったサラマンドラが棲むという場所の地図に記された部屋。意を決して足を踏み入れた瞬間、先ほどまでと同じ場所なのかと疑うほどの違和感に襲われる。

「……………暑いな」

はつきりと感じられるのはその熱気。これまで進んできた二層は秋の空気。暑いか寒いかと問われれば寒いと答えるほどのものだったが、ここはまるで真夏のようだ。

そしてもう一つ。キマイラと対峙した時と似た……………それ以上の威圧感。

手に持っている地図が何人もの衛士が犠牲になった上で存在しているという事実。

そこに記されたサラマンドラ以外のFOEの存在。

この部屋での戦闘はそのまま死に直結する、そう語りかけてくるようだった。

額から垂れる汗が熱いものか、冷たいものかわからなくなっていく。

「……行くぞ」

それでも君達は行かなければならない。

先頭にフォン、最後尾にサクを置き、その間にキリ、ソニン、リズが入り周囲を警戒しつつ部屋の中を進んでいく。

幸か不幸か、辺りにFOE以外の魔物はいないようだ。恐らく……魔物すらこの部屋へと近づく事を恐れているのだろう。

静けさが逆に体を締め付ける。

回りのFOEの動きを見つつ、合図を送り奥の通路へと入る。

FOEの動きにも若干の違和感を感じる。こちらに気づいた素振りを見せるが、決して追いかけてきたりはしない。ごく狭い場所から出る気配が一切ない。

まるで……何かを恐れているかのように。

「……っ」

背筋に悪寒が走る。この部屋に入ってから感じる事全てがサラマンドラがどんな魔物なのかを現わしているように感じる。

通路の先、曲がり角から顔を出す。そこにヤツはいた。

トカゲを何倍にも醜悪にしたかのような体。舌をチロチロと出す姿は爬虫類を思い出させるが、舌とともに炎が噴きでている。僅かな炎だというのにこちらにまで熱気が伝わってくる。

「流石に……やばいな……」

盾を握る手に力を込める。ただいくら力を込めようとも、心を奮い立たせようともあの炎を真正面から受け止められる自信が沸いてこない。

「あ、あれ見てください！」

サラマンドラの背後。細い通路はあの魔物の巣だろうか。

そこにはサラマンドラの脱皮した皮が見えた。恐らくは目当て

の羽毛もあの場にあるのだろう。

「流石に強行は……ないな」

とはいっても暫く観察したが一向にその場を動く気配がない。

強行は問題外、討伐も無理。とすれば残す手は一つ。

地図を確認する。サラマンドラの向こう、今の場所と反対側の通路は少し戻り別の道を行けば辿りつけるようだ。

「俺が引きつける。その間に残りで目当ての物を探し、見つけたら逃げる。それでいいな」

誰もがYesともNoとも言わない。フォンが囷をこなすのは毎度の事であったが、一番の危険を任せてしまう事に変わりはない。かといって、ここで引き返すわけにもいかない。

ただ強く、信頼のまなざしがフォンへと集まるだけだった。

フォンを除くメンバーが奥の通路に到着する。

頷きでお互いを確認し、行動を開始する。

「はあっ！！」

落ちていた石ころをサラマンドラに向かって投げつける。

コッソ、と軽い音が鳴りサラマンドラの視線がフォンへと向かう。

サラマンドラに自分の姿を確認させつつ、一瞬の遅れも無く走りだす。

「っ！！」

走り出したタイミングは半分は完璧で、半分は最悪だった。

この部屋に生息するサラマンドラ以外の生物。真っ赤に光るFOEが通路を塞ぐように立っていた。

幸いこちらにはまだ気づいていない。少し時間が経てばその場を去るはずだ。

だがその僅かの時間にサラマンドラはフォンへと迫り、灼熱の、

死の炎を吐き出した。

「くそっ!!!」

迫りくる赤い光は木々を蹂躪しつつ襲いかかってくる。幸いは一瞬にして燃え尽きる木々が更なる大火を呼ばなかった事、不幸はそれだけの炎を受けねばならないという事。

こうなってしまうえば防ぎ切れるかどうかの自信なんてどうでもいい。全力で盾を構え炎を迎える。

一秒、二秒耐え背後のF.O.Eが去った気配を、実際に目で確認せず自分の感覚を信じて盾を捨て炎から逃れる。

すでに盾は原形を無くし、それどころか盾を構えていた腕までが火傷に侵されていた。

腕の痛みを歯を食いしばって耐え再び走り出す。先ほどサク達に向かっていた通路から入り、合流した後に今走ってきた通路から逃げる、そういう手筈だ。

サラマンドラはその体軀に似つかない素早さで迫ってくる。

既に盾を失い、防ぐ手段を……元より完全に防ぐ手段など無かったのだが次にあの炎を吐かれたら終わりだ。

「退却だ!!!」

無事羽毛を発見したサク達と合流し、退却の合図を出す。

「フォン!!!後ろだ!!!」

サクの叫びにフォンが振り返る。

そこには既にサラマンドラが悠然と立ちフォンに向かって一撃を繰り出そうとしていた。

「我、汝の力を祓わん!!!」

キリが素早く自らを拘束し、呪言を放つ。

呪言はサラマンドラの力を奪うも、勢いは未だ驚異の域を保っている。

フォンはその攻撃を剣で払うが、体は通路の奥へ飛ばされ剣は二つに折れてしまう。

そして何よりも最悪なのは、退路を断たれてしまった事。

ジリ、ジリと迫る。それに応じて後退を繰り返す。
そして一行が追いやられた狭い通路が、逃れようのない死の炎に包まれていった。

「っ、間に合ったあ！」

道無き道、本当に人が一人通れるほどの、それ以外は枝葉に囲まれた所から八名にも及ぶ人が転がり落ちてきた。

「いつ、たたたた……」

当然の如く枝による切り傷、滑り落ちた事による擦り傷を全身に負ったもののどうやら全員生きているようだ。

「お姉ちゃああん！」

無事を喜ぶ妹に、まだ現状を把握しきれていない姉。

体に直接負わなかったとはいえ、心に深く浴びせられたサラマンドラの炎は思考を焼き切ったままだ。

「生き、てる……ですう」

緊張が少しずつほぐれていく。呼吸は思い出したかのように荒くなり、生きてる事を主張するかのごとく汗が噴き出る。

そしてようやく自分達を助けた人が、自分達の仲間だったという事に気付く。

リリックにリン、そしてクランクの三人が。リアーリスのメンバーが八階に集合した事となる。

「た、助かった……。だが、どうしてここに……」

フンと鼻を鳴らすリリックが一枚の地図を取り出す。そこには八階層の詳しい構造が記されていた。

「皆が出ていった後に大公宮から届いたんだヨ。これ見てピーンと思ったのサ。この細い道に閉じ込められたらやばいって、そこで颯

爽とアタシ達が現れたらかつこいってネ」

「結局は抜け道の存在を知らせる事しかしなかったがな。向こう側からは通れても流石にこちら側からはどうやっても行けそうになかった」

通路が炎に包まれる瞬間、聞きなれた声が聞こえたのだ。絶対絶命、その極限状態の中で藁をも掴む思いで声のするほうに飛び、死地からの脱出を果たした。

「何にせよ……助かった、ありがとう」

完全に緊張は解け、和やかな空気が漂い始めた。

第二層に漂う秋の空気は爽やかで、痛いほどに高ぶった鼓動も次第に落ち着いて行く。

ただ……。

「なんか、焦げくさいよ？」

秋の空気に似合う、焚き火の臭いとは違う……。

ブス、ブスと本来燃えてはいけないものが燃えているひどく鼻に良くない臭いが漂う。

「フォン……後ろ……」

「へ？」

何が、と後ろを振り向けば……。

「うわちちちっ！！」

盛大に尻が火を噴いていた。

恐らくはサラマンドラの、間一髪で躲したと思っていた炎が崖に手をかけるように炎がついたのだらう。

飲み水をかけるが、残り火といえサラマンドラの炎。完全に消火するまでには至らなかった。

「仕方がない！我慢しろ、フォン！」

リズが止む無しとフォンに向かってフリーズショットを打つ。

「はっつ」

火は消えたものの、今度は氷漬けになる。

火傷の次は凍傷と様々な傷を体験する、さすがパラディンであ

る。

だが君達は無事にサラマンドラの羽毛を入手する事が出来た。胸を張って帰還するといいいい！

九階：未だ開き得ぬ採取の技術

幻獣サラマンドラの羽毛を持ち帰ったりリアーリスの活躍は止まらない。

八階を越え、既に九階をも踏破し、次に進むは区切りとなる十階となっていた。

まさに飛ぶ鳥を落とす勢いといっても過言ではない。しかし君達は十階という区切りを迎える前にある問題を解決しなければならぬ！

多少デジャヴを感じざるを得ないが、この問題は冒険者なら回避不可である。

リアーリスは他のギルドよりその問題に直面する要因が多いと言えなくもない。

だからこそ今回は、その要因そのものを取り除くため動き出す事となった。

「資金が無い！」

卓を囲んで食事中のメンバーに向かってリズが突然吠える。

その声に驚いて、最後のミートボールに手を伸ばしていたソニンの箸が止まり、その隙を見逃さずリリックが奪い去る。

「ああ、あああ……」

まるで世界の終りかのように箸を落とす、ヘナヘナと崩れ落ちる。

「明日からはミートボールが食べられなくなるかも知れないが」

視線が一気にリズへと集まる。そんなミートボールが好きなのかと溜息をつきながら一枚の紙を皆に見えるように広げた。

それにはリアーリスの財政状況が記されており、余裕という単語が使えるレベルには桁が二つほど足りない状況になっていた。

「い、いつのまにこんな状況に……」

具体的に言えば、明日のおかずが今日より三つ減るくらいだった。

「サラマンドラとの戦いで壊れたフォンの剣と盾に、他装備の修繕費に治療費。これが大部分ですが、必要経費なので何も言いません。私もそれくらいは出費するだろうと見積もっておりましたし。問題はこつちです」

ぴら、と一枚の薄い紙を取り出す。それは交易所での取引が記された領収書である。

「あ」

それをみて何かをリリックが何かを思い出したようだ。

「忘れてたネ。三人で樹海進まなきゃいけなかったから、大量に薬を購入したんだヨ」

「申告してくれないと困ります。が、多くは言いません。……おかげで今この命があるわけですからね。しかしそこで気づいたのです。いえ、今まで何故気付かなかったのでしょうか」

ぐつと拳を握り、何かを噛みしめるかのように顔を伏せ、かつと目を見開いた。

「この中に採取、伐採、採掘いずれかの技術を持っている者は手をあげなさい！」

……。

……。

……。

「え、いないの？」

予想外の沈黙に誰もが啞然とした表情をしていた。

「そう、このギルドは魔物から素材はとれても、自然から素材を取ることが一切できない。おかげで薬代や一部の武器防具を割高で購入しなければならなかった。軽く計算したら初めから定価で購入できていれば毎食のおかずが一品増えていても大丈夫という事実が判明した」

「なっ……」

驚愕の真実。自分達がこれまでどれだけの無駄遣いをしていたのかを直に感じ、愕然とする。

「しかし安心していい。もう既に手は打ってある。その手のエキスパートであるレンジャーを既にギルドへ勧誘し、OKをもらっている。明日には合流できるだろう。幸いにも先日踏破した九階は採取、伐採、採掘全てのポイントが存在している。よって明日は新しいメンバーであるレンジャーに編成をまかせて採取に専念してもらいたい！」

「……………」

明朝、フォンの目の前に奇妙な光景が広がっていた。

レンジャーが一人、二人……三人四人。

何だか頭痛がしてきそうな気がするが、一応確認を取る。

「確か……リズが勧誘したのは一人だけだった気がするんだが……」

「あ、それボクです」

茶色い髪に羽根のついた緑の帽子をした少女が手をあげる。

少女は一步前に出て帽子を取り、恭しく礼をした。

「ボク、ミルリアって言います。あの有名なリアーリスさんに誘ってもらえるなんてとても嬉しいです！」

真っ直ぐに憧れの視線を向けられると流石に照れてしまう。

が、気を取り直して最初の疑問を解決しようと言話を進めた。

「他の三人は……？」

「ボクの知り合いです。流石にレンジャーといえども一日にできる採取量は限られていますから。リズねえからがっちりって聞いたんで、手伝ってもらおうことにしたんです」

よろしく、と小さく礼をする他三名のレンジャー達。

「では、今日一日よろしくお願いします。レッド……」

「何故にレッド」

「何言ってるんですか。五人のレンジャー、ゴレンジャーのリーダーはレッドと相場が決まってるじゃないですか！」

「いや、俺パラディンだし」

「そして私はブルー！」

聞いてなかった。

「ピンク！」

隣の金髪の女性が声をあげる。

「グリーン！」

同じく金髪の男性がポーズを取りながら応える。

「ヴェリディア！」

色がかぶっている。

「……大丈夫なのか？」

不安は大きくなるばかりであった。

「前方、敵影無し。どうぞ」

「後方右に敵の気配。こちらには気づいていない、どうぞ」

「いや、無線とか無いから。肉声だから」

迷宮に入ってからずっとこの調子だ。戦隊モノみたいなノリをしておきながら、これまで一度も魔物と遭遇せず、戦闘した試しがなかった。

ただ、その一度も戦闘しない……という事がレンジャーの為せる技であり、その点に関しては感心しきりのフォンだった。

普段の探索もこうすれば楽かとも思ったが、いささかいざという時の戦力として不安を感じざるを得なかったので頭の中で却下する。

「着きました。採取ポイントです」

地図に記された第一の採取ポイントに到着する。

「では、ブルー以下は作業にかかります！」
ざっ、と散開し各自作業を始める。

一段落付き、ほっと息をつく。結構な距離があったが、本当に一度も魔物と遭遇する事は無かった。

フォンはレンジャー達の澱みない作業を見て、これなら五人全員レンジャーで、本当にゴレンジヤイにしても良かったのではと思う。

何故自分一人だけが、と思っている間にも鞆の中身は採取した素材で埋まっっていく。

「まだまだこんなものじゃないですよー！」

さらに採取の速度を上げてむしり取るように作業をする。

「あんまり奥に行くなよ」

「平気でえーっすよおー！」

「！！ああつと！！」

「うわああーっ」

突如ミルリアが大声を上げながら戻ってくる。

その後ろには緑色の巨大な魔物が追いかけてきている。

「だーっ、言わんこっちゃんない！」

こんな時のためか、と瞬時に悟ったフォンは前に出て魔物の攻撃を受け止める。

長い首をした恐竜のような魔物は、一度退き、こちらの様子を窺いながら力を溜めているようだ。

「受けたらやばいかもしれないな……。皆、ここは逃げ……。もう逃げてるー！！」

全力を込めた逃走。すでにレンジャー隊の四人は戦場からの離脱を済ませていた。

「ま、待て！俺も逃げる！」

フォンもその逃走隊の中に加わる事となる。

「散々な目に会った……」

採取、伐採、採掘全てのポイントでの作業を終わり帰還する事には魔物の攻撃を受け続けたフォンはくたくたになっていた。

逆にリズは大量に持ち帰った素材を見て意気揚々と交易所へと向かっていった。

「ではこれからよろしくお願いしまーっす!!」

一緒にいたはずのミルリアは全くの無傷のまま他のメンバーと会話を弾ませていた。

いつだつて貧乏くじを引くのは自分だと理解してはいるものやはり納得のいかないフォンであった。

十階・影尽く業火の王此処に君臨す

紅の樹海に緊張が走る。

サクの刀が、リズの銃口が一人の老人に向けられている。

それを返すようにその老人も、両の手に持った二つの銃口を二人に向けていた。

その周りをフォン、ソニン、リリックが囲み隙を窺うが、五対一という状況にも関わらず硬直状態が続いている。

何故このような状況になったのか、君達は理解していなかった。十階という区切り、ただでは踏破できまいと気を引き締めて探索を進めていた。

突然進路を阻むように現れた老人の襲撃を受けたのだった。

「リアーリスの噂は聞いておる」

老人は重々しく口を開く。

「ここまで来るとは少しは腕を上げたようだが、まだまだ我らには及ばぬな。世界樹の迷宮の探索は我に任せ大人しく引退でもすればどうだ？」

ギリツと刀を握る力が増す。

「冗談。いきなり現れて仕掛けて来たかと思えば……。引退したほうがいいのはそっちじゃないのか？」

サクの返答に老人は不気味な笑みを浮かべる。

「強く出たものだな。しかし過去に何人がその言葉を我が銃弾で折られた事か。又シらもその者たちと同じ道を辿る事を望むか！」

双つの銃口から弾が打ち出される。

当てるものではない、威嚇の弾丸はサクやリズだけでなく全員の注意を一身に受け、老人はその間に十分な距離をとっていた。

「我は魔弾のライシュツツ！又シら若造相手に遅れをとるほどもうろくはしておらんぞ！」

強い殺気に当てられ咄嗟に武器を構える。老人の意図がつかめな

い上に、立場的には同じ冒険者。争いを避け道に戻るか、老人の殺気に応じるかは君達の自由だ！

「はいはい、そこ！何やってんの！？冒険者同士で喧嘩したって何のメリットもないでしょ！」

突然後ろから少女の声が響いた。驚いて振り向いた先には長い黒髪のとくトルマグスがいた。

困ったような顔をしながら君達に近づいてくる。

気づけば先ほどまで殺気を放ち続けていた老人もいつのまにか彼女の側に立っていた。

「爺やがまた無茶言ったんでしょ？ゴメンネ、別に悪気があってやってるんじゃないの」

「悪気は無くても殺気はあったがな」

フォンが少女達と仲間達の間に入る。すでに殺気は感じないとはいつても油断はできない。何が来ても対処できるように盾を持つ手に力が入る。

「まあた爺やのせいでややこしいことになっちゃったじゃない。そう、ね、とりあえず自己紹介。あたし達はギルド、エスバット。聞いたことくらいあるんじゃない？」

エスバット

その名前には覚えがあった。現存するギルドでは一番奥に踏み込んでいるギルドとして。そしてベオウルフと並んで大臣からその名を聞いたことがあった。

「あたしは呪医者アーテリンデ。爺やと二人で樹海探索をしているのよ。で、何で君たちを止めたかというとな、ま、親切心？樹海の10階の奥にはね、ちょっと凶悪なヤツが住んでるの。今まで以上の化け物がね。だから、ここから先は大公宮で許可の出ている一流の冒険者以外進めないようにしてるって訳。それを無視して進む冒険者が後を絶たないからこうして門番みたいな事してるの」

少女の言葉は君達にとって信用できるものではなかったが、大公宮の名前を出した以上嘘ということは無さそうである。

どうやら君達は一度大公宮へと赴く必要があるようだ。

そうして、大公宮。

そこで聞いたのは紅の魔人という恐ろしい怪物の存在だった。

過去に何度か冒険者によって討伐された事がある魔物で、エスバットもかつてはその魔人を討ち果たした事があるという。

しかしその魔人は数日後には何事もなかったかのように蘇えるという。

第二層を越えるためには避けて通れぬ道。魔人はさながら上へと昇る冒険者をふるいにかけているようだ。

君達が大公宮で許可を得てきたのかをどう知ったのかはわからないが、エスバットの二人の姿は無く、さらに奥へと足を踏み入れる。

そして迷宮のふるいは、今まさに君達の目の前に存在していた。巨大な体躯に、サラマンドラを思い出させる熱気。ただそこにいるだけで君達の肌を焦がしそうな威圧は、冷や汗すら蒸発していくだろう。

だが恐れる事はない。君達は自らの武器を、自らの勇気で振り、目の前の脅威に立ち向かうといい！

炎を纏った剛腕がパーティの中心目掛けて振り下ろされる。正面から受けたフオンは足を地面に打ち込むかのように踏ん張り持ちこたえる。

リリックが歌い、後押しを受けたサクとリズが左右から攻め立てる。

「炎には氷。全く変わり映えしないわね」

凍てつく氷弾を放ったリズが、魔人の反応を見ながらそうつぶやく。
サクは氷の剣技は扱えないが、研ぎ澄まされた突きは容赦なく魔人の皮膚を切り裂いていった。

攻撃を受け止めたフォンに、加えたサクとリズ。その三人が直に味わった感触に相手の实力を感じ、若干の落ち着きが生まれた。
キマイラやサラマンドラと対峙してきて、もしやそれ以上かと不安だったが、それほどでもないようだ。

痛みに揺らぐ魔人を追撃せんと肉薄していくと……。
「ガアアアアー!!」

突然の咆哮、耳を引き裂き、脳を揺さぶるような声に動きを止められる。

「な、んだ……これは」

視界が揺らぐ。意識が何かにつ張られていくような感覚を必死にこらえる。

「耳が……」

平衡感覚を失わせる音にパーティが揺らぐ。確実にただの叫び声ではない。

「皆、大丈夫か!?!」

異常が無いか確認をとる。

「大丈夫だよ……」

「平気……です」

二人からの返答を受け取る。

だが、もう二つあるはずの返答は無い。

「はああああ……!!」

突然鳴り響く銃声と、鉄と鉄がぶつかり合う音。リズが放った弾丸は一直線にサクへと向かい、サクの刀は真っ直ぐリズに向かって振られる。

弾丸は避けられ、刀は銃身で受け止められる。

リズはもう一丁銃を取り出し、あの老人のように両手に一つずつ

つ銃を持ち接近したサクの次の攻撃を受ける前に銃撃を繰り返す。

「な……」

明らかに普通ではなかった。

リズとサク、お互いに正気を、敵と味方の区別を無くし争っている。

「混乱してます!!」

ソニンがそう判断し、治療を試みる。

しかし二人の闘いは苛烈を極め、近づくことができない。

一瞬で視界から消えるサクの足の運び。

装填から発射までをノータイムかと思わせる早さでこなすリズ。刀と銃弾の、まさしく撃ち合い。お互いが全力以上發揮し、且つそれが拮抗しており演武か何かと思えてしまうほどだった。

唐突に始まった二人の闘いはさらに激しさを増していく。

二つの銃口から同時に弾丸が発射される。しかし弾道はサクから大きくずれ、地面へと向かう。

が、サクは突然後退し、距離をとる。その一瞬後、ずれていたはずの弾道は先ほどまでサクが立っていた場所に向かって軌道を変えた。

ガンナーの技の中でも難しいとされる跳弾だ。今まで一度も見せていなかったそれを二丁拳銃で安々とやってのけていた。

計算された弾道は一度だけならず、場所を変えたサクの位置を初めから分かっていたかのように再び軌道が修正される。

本来の直線である軌道ですら、避ける事が困難だというのに、曲がる弾道はまるでサクを取り囲むように飛ぶ。

読めない弾道を避けるには大きく距離をとる他に無く、サクは大きく飛ぶ。

だが、その方向は後ろではなく前。先ほど離れた距離を一瞬で詰める勢いで駆け抜ける。

リズはそれを許さず再び弾丸を乱射する。

精度を無視した弾丸の雨。銃弾によって実現された面の攻撃は

サクの避ける場所を封じながら迫っていく。

しかしサクは足を止めなかった。

上段に構えた刀が一瞬にして炎に包まれ、それを振り下ろす。

巨大な爆炎、爆風は無数の銃弾を一度に無効化する。

障害は無くなった、とさらに速度を上げて迫る。一步踏み込む度に木の葉が舞い上がり、サクの周りにまるで嵐が起こっているかのようになっている。

あと数歩、その瞬間にリズはなぎ払うように地面を銃撃し、土煙が舞い上がる。

足元に向けた広範囲の銃撃はサクの足を止め、且つリズの姿をも隠していた。

煙の動き、音、気配。サクはすべての情報を総動員してリズの姿を探すも予測すら立てられずにいた。

恐らくリズもサクを見失っているのだろう。咄嗟の目くらましで自分を有利な状況に置く余裕が無かったのだ。

お互いにお互いを探しあう。

そして見つける。何かの気配を。

リズは膝をつけ両手で銃を握り、一発の巨大な氷弾を。

サクは腰を落とし、刀を鞘に納めて凍てつく居合を。

「チャージ、アイス!!!」

「抜刀、氷雪!!!」

急激に温度が下がっていく。

青白い光が部屋を包み、二つの巨大なエネルギーが激突した。

二層の主、紅の魔人に。

「終わり良ければすべて良し、とはこの事が……」

紅の魔人はサクとリズの攻撃を同時に受けて息絶えていた。

実際にはリズの跳弾、掃射の巻き添えを受け傷を負っていたよ

うだったが。

魔人を倒した二人は、魔人が倒れたと同時に混乱が解けたのか正気に戻りそのままぐったりと倒れこんでしまった。

混乱し、リミッターでも外れたのか使えない技まで使った体が悲鳴を上げたのだらう。肩を借りながらよろよろと歩いている。

「良くわからないが……無事ならいいよな……」

そうしてリアーリスの紅の魔人はよくわからないままに終了した。

「お嬢様、あやつらの実力、本物かもしれませぬ」

リアーリスがその場を去ったのを確認した後、戦いを影から見ていた二人組が姿を現した。

「そうね。魔人で躓いてもらえれば重畳。越えてもどの道三層で終わると思ってたけど、もしかしたら……」

アーテリンデは帽子を深く被りなおし憂いの表情をその下に隠した。

「万が一の時は……」

「そう、ね。万が一の時は……」

再び帽子を上げた時には憂いの表情は消え、代わりに不敵な笑みを浮かべていた……。

十階EX：緊縛少女と死にたがりの魔人

恥の多い名前をつけられてしまいました。

恥ずかしい。

生きている事が恥ずかしい。

あの日、あたしは、平仮名四文字になりました。

神様も、もう自分を助けては下さらないでしょう。

その出会いは偶然か、必然か。

一つは大公宮で。

一つは冒険者ギルドで。

加えて迷宮で、リアーリスの住居で。

複数の事柄が他の過程を、結果を許さないとやっているかのよう
うに一本の糸で繋がっていく。

大公宮

酒場を通してリアーリスに大公宮からの依頼が入っていた。

魔人を倒してからまだ三日と経っておらず、もう暫くは休養に
専念したいと思っていたところだが、大公宮からとなれば話は別で
ある。

フォンは一人、大公宮へと足を運び大臣の元へと向かっていた。
石造りの建物はいつ見ても荘厳で、カツ、カツという独特の足音は
体中に染みわたり気を引き締められる。

「おお、リアーリス殿。よく来てくださった」

すぐに大臣の元へと辿り着き、軽く礼をして話を進めた。

「先日の魔人討伐誠に御苦労じゃった……と、言いたいところなんじゃが」

大臣は語尾と表情を濁らせる。それに緊急の事態を察したフォンは全身に力が入るのを感じ、少し前へと詰め寄りながら事情を聴く。「……どうやら魔人が復活したようなのじゃ。これほどに早い復活は例を見ぬ事態じゃ」

「まさか、倒し損ねていた……？」

記憶を辿り、魔人と対峙した時の事を思い出す。

色々といレギュラーな事態が起きたが、確かに絶命を確認したはずだ。

「又シらを疑うわけでは無いんじゃが、どうにもその魔人がリアーリスを呼んでいるようなのじゃ」

「呼んでいる……？」

だとするとやはり自分たちが戦った魔人と、今樹海にいる魔人は同一の存在という事になるのだろうか。

「様子を見た衛士の報告によれば『アンナヤラレカタガアツテタマルカ』と叫びながら暴れまわっているようなのじゃ……」

ひくつ、と眉が動く。

完全に同じ魔人だ……とフォンは確信した。

「しかし困ったな……」

リアーリスは今、とある問題を抱えている。

魔人戦でのサクとリスの戦い。

混乱が原因かどうかはわからないが、普段使えない力を振ったせいで二人とも全身筋肉痛に襲われ戦える状況ではない。

リアーリスもそこそこ大きなギルドであるが、主力である二人が抜けた穴は大きい。

それに加え、この前のアレはほとんど魔人の自滅のようなものだ。そのせいで魔人がどんな攻撃をしてくる等を把握していない。

「そうじゃ、必要になるかどうかはこれを渡しておこう。公国が把握している魔人の生懸についてまとめた資料じゃ」

大臣が渡してきたのは何枚かの羊皮紙。

それを受け取ってパラパラとめくる。

そして目を引いたのはある一文。

『紅の魔人には、急所が存在する』

時間は少し遡り、場面は冒険者ギルドへと移る。

ギルドが登録、管理される冒険者ギルドは大公宮と並んでハイ・ラガートの大きな施設の一つだ。

そこにいるのはソニン。テーブルを挟んでギルド長と向き合っていた。

遊びに来たというわけではなく、依頼とまではいかないちょっとした相談を受けているのだ。

ギルド長はいつ顔を見せてもフルアーマーを着込んでおり、素顔を見たことはない。

ただ肩にかかる長い金の髪や声から察するに女性ではあるようだ。

「それで、相談……というの？」

ソニンは少し緊張しながら問う。酒場の店主ならともかく、大臣やギルド長……いわゆるお偉い様方と話すのはもっぱらフォンヤリスの役目だった。ぎこちなさを隠せていないソニンをギルド長は微笑みでほくそうとするも、兜に隠れていては意味がなかった。

「大したことでは無いのだが……。先日、冒険者登録手続きでちょっとしたトラブルが発生してな」

ギルド長の言う冒険者登録とは、簡単にいえば『私はこれから迷宮へ行きます』という意思表示みたいなものだ。基本的には来るものは拒まず……、新しいギルドを立ち上げた場合には一階でのテス

トがあるが迷宮に挑むために資格等は必要ない。

ただ無秩序に迷宮へと入られればトラブルの、ひいては命の危機にさらされる種になりかねない。

よってまず初めに冒険者としてこの国に登録するための手続きを踏まなければならない。

とはいっても名前を書くだけの簡単なもののだが、それが済まなければギルドを作ることすらもできないため、誰もが通る道なのである。

しかしながら自分の名前を書くだけの手続きでどうトラブルが起ころうというのだろうか。

「二人組、といっても公国への道中で出会い、目指すギルドが同じということまでここまで一緒に来たらしいのだが、どうやらそのギルドは一人だけしか入れるつもりが無かったようだな。それを知った二人組の片割は、登録は自分が二人分やっておくといい、もう一人の名前を適当な名で登録したらしい。結局そのギルドはマトモな名前の方を引き入れ、片方に残ったのは自分のものとされてしまった変な名前だけ……というわけだ」

何だか、ひどいようなひどくないような。本人にとっては大問題なのだろうが、聞くだけの側としてはひどく体の力を抜けさせる話だ。

「それって、変更できないんですか？」

「登録名の変更はギルドへ加入したら……という規則になっている。無暗に変更されては管理に困るからな。……しかし、いくら簡単な手続きとはいえ、他人の分もできるとは……さすがに少し厳しくしたほうがいいのかもされないな」

はあ、と溜息をつくギルド長。冒険者やギルドのシステムは迷宮が現れてから急ごしらえで作ったもので、それからはそれから迷宮の探索、冒険者の管理などで人手が足らずあちこち穴だらけの運用になってしまっているらしい。

「それで……私たちはどうすれば？」

「出来るのならばリアーリスにて引き取ってもらいたい所なのだ。彼女はダークハンターで、リアーリスにはまだいない人材だったと記憶している。だが、無理にとは言わない。ただ一度でいい。彼女とメンバーを引き合わせてギルドにとつて有用かどうかテストしてもらいたい。君達の眼鏡に適わぬと判断した時はまた私の所に連れてきてくれればいい」

ソニンは一瞬、と首を捻りながら考える。

やっぱりここはリズに来てもらうべき場面だった。新メンバーの勧誘や審査はもっぱらリズがしていた事なので、自分の一存で何かを決めてしまう気にはなれなかった。

「とりあえず、その人を交えて皆と話してみたいと思います」

「そうか。では彼女にはリアーリスの住居に向かうようにと連絡を入れておく。先に帰っておいてくれ」

はい、とソニンは頷き席を立った。

「おっと、これが彼女についての資料だ。一応目を通しておくとい
い」

資料といっても、たった一枚きりの紙だった。

そこに記されている公国での彼女の名前は……。

「ひひひひ……」

気の毒過ぎて少し涙が出てきたソニンだった。

そうして大公宮、冒険者ギルドの二か所で別々の情報を受けた二人が自分たちの住居で顔を合わせる。

ソニンはフォンに、フォンはソニンに聞いたことを伝えた。

そして、そこに運命のようなものを感じざるを得なかった。

すぐさま全身筋肉痛で悶えているリズを起こし（動かすだけで嫌な音がしたので少々気の毒ではあったが）、例の人物をどうするべきか協議し始めた。

「確かに都合は良いが、本人次第だな」
リズはそう結論する。

紅の魔人に存在する急所を突けるダークハンターの存在は再び現れた敵を制すにはもってこいの人材である。

ただそれだけの技量がある人物であるか、いきなり紅の魔人と対峙する覚悟はあるか。

そのあたりの事を本人に確認する必要がある。

「私の時は問答無用で連れてかれたのですが……」
傍らで話を聞いていたキリが悲しげな声を出していた。

「す、すいませーん！」

そこで外からよく通る声で呼びかけられる。

どうやら到着したようだ。ミルリアとリリックが迎えに行き、おずおずと部屋に入ってきた。

頭の左右でドリルのように巻かれた髪が揺れている。

その色はリリックよりも濃いピンク色。身につけているボンテージと相まって派手な印象を受ける人物だ。

「あた、わ、私はミネラ、ですつ。今日はっ、この度、はり、リア、リアリア……」

ただ、その印象とは逆に大分繊細な心の持ち主であるようだ。

「あー、まずリラックスしたほうがいいかな……。普段通りのしゃべり方でいいから……」

フォンが落ち着かせようと軽い調子で言葉をかける。

ミネラと名乗った少女はひーふーと深呼吸をした後、再び喋りはじめた。

「えー…、あたしの名前はミネラ。訳あって公国にはその名前で登録されていないんだけど、その件でどうやらリアーリスさんに迷惑かけちゃったみたいで……。まだこの国に来て日が浅いあたしでも名前を知っているようなギルドに、あたしは……。あたしは……」

調子よく喋っていたと思っていたら最後にはあわわあわわと目を回し始めた。

少し不安を感じながら、これからやってもらいたい事の説明を始めた。

初めて足を踏み入れた迷宮で、いきなりあんな巨大な魔物と対峙する事になるとは思ってみなかつた。

しかしあたしは怯むわけにはいかない。愛用の鞭を握る力を強めて、自分の意思から離れていきそうな鼓動を必死に制御下に置く。

最前列にはフォン……、呼び捨ては慣れなくて、言いにくかつたがそれでいいと言ってくれた。

少し後ろにリンとあたし。さらに後ろにソニンとミルリアがいた。

あたしの、一番重要な役目は魔人の急所を討つ事。さすがに万全の敵相手に狙えるほど甘くは無いからそれまでは皆……皆と一緒に戦うことになる。

魔人の拳がフォンに振られる。目をつぶりたくなるような一撃だったけど、フォンは一瞬たりとも目をそらさずにその攻撃を盾で受け止める。

あたしは盾に止められた腕をすかさず鞭で縛り上げる。

魔人の抵抗はすさまじくて封じるまでには至らなかつた。流石にそんなに甘くは無かつた。

だけど無駄じゃない。一瞬だけど作る事のできた際に、ミルリアとソニンが靴から取り出した札を掲げる。

瞬時に氷の術式が起動し、魔人に襲いかかつた。

だけどそれは本命じゃない。リンのアイスチエイスが魔人の体に十字の傷をつける。

魔人がのけぞる。大きなダメージを負わせたようだけどまだ足りない。

あとひと押し、そう思った時魔人は大きく口を開けた。

何かが来る、そう直感したあたしは咄嗟に魔人の頭を鞭で縛り上げる。

ギリ、ギリと確かな手ごたえを感じる。どうやら今度は封じる事に成功したみたいだ。

敵の動きが止まった瞬間を逃す手はないと、リンは大きく振りかぶった袈裟切りを、ミルリアは限界まで引き絞った弓から発射させた矢をそれぞれ命中させる。

魔人の体が大きく揺らいだ。いける、そう感じたあたしは一度鞭を手元まで戻し限界まで振り絞った鞭で魔人の体全体を縛り上げる。

根元まで縛り上げるために使われた鞭はすでにあたしの手から離れている。

その代わりに握った短剣を魔人の肩口からゆっくりと刺し入れる。

そこが、魔人の、急所。

「ほんつつつとおおおおにありがとう!!」

無事魔人を討伐し、リアーリスへ正式に加入する事ができた。

まっさきにやったのはもちろん公国へ登録した名前の変更だ。

「礼を言うのはこっちさ。こうしていい人材を引き入れる事ができたんだから」

「ボク、ちよつと感動したよ。こう、肩口からぶすーって。仕事人、みたいな!」

リアーリスの人達はあたしを温かく歓迎してくれた。

世界樹に憧れ、迷宮に憧れ、冒険者に憧れ、ギルドに憧れ。

あたしは、辿り着いた気がした。何に、なんてわからない。

「これからお世話になります」

本当に全てのモノに感謝したい気分だ。

あたしを裏切った相棒にも、あの最低最悪適当の名前にも。

いつか迷宮で出会うかもしれない。

そうしたらこう言ってみよう。

あたしは、リアーリスの一員だ……ってね。

それにしても魔人が最後に発した言葉、多分あたしにしか聞こえてなかったと思うけど、『ソウ、コウイウタオサレカタナラモンダイナインダ！』って何だったんだ一体。

十一階：着込む事叶わぬ凍て付く森

キマイラを越え、紅の魔人を制し、リアーリスは遂に第三階層『六花氷樹海』に到達した。

数あるギルドでも第三階層まで到達できたのはごく一握り。リアーリスの名は飛躍的に広がっていくことだろう。

踏み入るだけでそれほどの、迷宮も半ばまで来たかと思わざるを得ないそこは、一面銀一色に包まれた雪の世界だった。

不可解な雪だ。迷宮はあくまで室内。見上げればそこに次の階の床になるであろう天井が見える。雪が降るために必要な空がないのだ。

現にこれまで迷宮内で雨に降られた事は無い。

だが不可解さはこの迷宮にとって当たり前前の事に等しく、例えば日が差しているわけでもないのに昼は明るく、夜は暗くなる事か。そんな迷宮の神秘とも、恐怖とも言えぬものを感じながら一行は歩を進めていく。

足を踏み出すたびにさく、さくと静かで心地の良い音が鳴る。空気も澄んでおり音が良く響く事もありまるで心が洗われていくようである。

しかし君達はその音に聞き惚れているわけにはいかない。

一瞬の油断が、白い雪を真っ赤に染め上げる事に繋がるであろう。

より一層気を引き締め探索を進めるといい！

「寒い！帰る！」

不用心な叫び声が響く。何度も言うが、空気が済んでいるおかげか、せいか声の響きは普段の何倍も良い。今の声を何匹の動物が、何十の魔物が聞いているかわからないのだ。

「寒いヨ！もう帰るネ！」

だというのに叫びは終わらない。サクに続きリリックが、六花氷

樹海の厳しい寒さに悲鳴を上げている。

「いい加減静かにしてくれ。このあたりの魔物がどの程度の強さか把握しきれないのに囲まれたらどうするんだ」

第二層の時もそうだった。一層とでは強さにおいてさほど差は無かったとはいえ、直接的な強さとは違う、冒険者を惑わす変化がそこにはある。

「そうは言っても……」

きつく口を結び寒さに耐える。しかし数秒と経たずにがたがたと体が震えだす。

ここが山だったのなら雪崩を引き起こしそうな震えに、段々可哀想になってくる。

「フレイムショット」

呆れかえったりズが、二人に向かって炎の弾丸を放つ。

雪に着弾し、一瞬大きな炎を生み出すが、すぐに消え去ってしまふ。

「あああ……」

消えていく炎を名残惜しそうに見ながら、ワンモアツワンモアツとせがむ。

それを鼻で笑いながら銃をしまふ。

「あのー……」

おずおずと手を上げるキリ。

「二人とも、もつと着込めばいいと思うのですが……」

キリのもつともな意見を聞き、ふと疑問が浮かび問う。

「そういうキリこそ、寒くはないのか？ そのうすっぺらいローブしか着ていないんだろ？」

「べ、別にいつもネックレスで完全武装してるわけではないです！」

幸運をもたらすというネックレスは、呪言を扱うカーズメーカーにとつて重要なパラメータである。呪いと幸運とはなかなか結びつきにくい事柄ではあるが、その効果はこれまでに何回も証明されてきた。

そのため、呪言がキーとなる戦闘を挑む度にキリは半裸ローブの憂き目にあっていた。

「今日の私は一味違うです！」

おもむろに両手でローブを開き、その中身をあらわにする。

「Eフレイムリーフ！E羽根の手甲！E氷の守り！」

そして現れたのは完全防寒とも呼べる装備の数々。しかし果たして氷の守りは寒さに対して有効なのだろうか。

「それだけではないです！火術の起動符を応用して作られたホカホカくん（x5）！この極寒の樹海でもまるで常夏の国のようです！私にぬかりは無いです！」

ひらひらと雪の上を舞い踊る。それだけでまわりに暖かさが伝わっていくかのようにキリの顔は血色がよかった。

「ほう、そいつぁいいなあ」

ただ、それをもつてしても背中に走る寒気までは防げないようである。

「1個じゃ寒いですう……。さつきまでの反動で余計に寒いですう……」

無事ホカホカくんは全員の手渡る事となった。

「これは中々いいなあ」

「手を温めておけるのは大きいな。かじかんでいては銃の精度に不安があるしな」

ホカホカくんを手にした一行は樹海を歩く速度を上げていく。

襲い来る魔物はどれも見たことの無いものだったが、氷の樹海という事もあり炎が良く効く魔物が多い。リズのフレイムショットを中心にし、キリの睡眠の呪言で隙を埋めていく。

自分たちの力が樹海において盤石となってきた事を実感できるほどの戦いぶりであった。

公国に存在するギルドは玉石混交だが、自分たちはその玉に含まれるのだろうか。

そう思うのは傲慢な事かもしれないが、心が浮き立ってしまったのはどうにも止められない。

「待て、何かいる……」

心が風の無い海のように静まりかえる。意識の海に波紋を立てる存在がいないか、集中し、探る。

「上だ！」

見上げればそこには上空を飛ぶ黒い影があった。歩いては越えられない障害物の奥から唐突に現れた魔物は君達に向かって一直線に滑空してくる。

その姿は鳥のように見えたが、鋭く凶悪なフォームは恐竜のものを思い立たせる。

その翼は、まるで樹海の凍える空気を切り裂くかのよう。事実、体当たりを避けたにも関わらず、無数の切り傷を受けてしまう。

再び上空へと戻ろうとする黒影をリリックとリズが撃ち落とさんと撃鉄を下げ、弓を引き絞りそれぞれの弾を放つ。

しかし上空は黒影の自由。ひらり、ひらりと躲し、そのまま身を翻して再びこちらに向かって滑空する。

黒影が飛ぶ道は、さながら馬車道だ。当たるか、躲すかの選択肢しか与えられない道の上で、サクは真っ直ぐに刀を構え待ち構える。

二つの影が重なる瞬間、雪を爆ぜさせる踏込で神速の突きを繰り出した。

鋭く輝く刃の光はまるで三日月のよう。その光の影に飲まれるように雪上に墜落する黒影。

「ぐっ……」

しかしサクも無事とはいかなかった。

肩から流れる血は、黒影を地に伏せた代償としては安いようにも見えたが、キリが薬にて治療を始める。

「やったか……?」

フォンが倒れている黒影に近づいていく。

雪を染めていく血は生きている量とは思えないものだったが、油断をするわけにはいかない。

だがピクリともしない黒影に、心のどこかが死んでいると確信させフォンに盾を下げさせてしまう。

その瞬間、むくりと顔を上げた黒影の口から強烈な吹雪が吐き出される。

真正面から受けたフォンは吹雪の勢いそのままに雪上を転がされる。

それだけにとどまらず黒影はキリに向かい、突進を繰り返してきた。

キリは紙一重にそれを躲す。黒影が既に重傷を負っていないければ、危険な傷となっていただろう。

「あつ……」
しかし黒影との接触した際に、翼にホカホカくんがひっかかり奪われてしまう。

その衝撃でホカホカくんに亀裂が入り……、

爆発、炎上した。

「え?」

燃え散っていく黒影に向かって、残り四つのホカホカくんも投げ込まれていく。

立ち上る火柱は、雪の迷宮を赤く染め上げていく。

先ほどまで身につけていた物が起こした惨劇に、冷たい汗が滝のように流れ出した。

十二階抜け落ちなければ通り得ぬ氷の道

君達は幻獣サラマンドラの事を覚えているだろうか。

あの炎の化身に挑んだのは公国を治める大公が病で伏せっており、その秘薬の材料を得るためであった。

そしてまた一つ、秘薬の材料が判明した。

奇しくもその材料が存在するのは君達がこれから向かう十二階サラマンドラから生還した君達を信頼し、大公宮はリアーリスに依頼を出した。

「白銀の樹海に咲く、氷の花……か」

克蘭クが資料を手にそう呟いた。炎の錬金術師とはいえ、この六花氷樹海の寒さはこたえるのか身につけているマフラーがいつものより厚手の物になっている。

着込む事をよしとしていなかったサクヤリリックも、厚手のコートを羽織って身を縮ませている。寒さ自体が嫌いなものもあるが、敵に襲われた際に瞬時に反応できるか、という不安を募らせる雪にちよっとした憎しみを抱いているようでもある。

だが、いつ来てもここに雪が降っていた事は一度もない。しかしどれだけ踏みしめてもこの雪が絶える事は無かった。

寒さによるしんとした静けさも相まって不気味さの漂う六花氷樹海。ここで息絶えた者は一体何人に上ることだろうか。

翌日にはまっさらになっているこの地で、この雪に埋もれてしまった冒険者がどれだけいるのか。

緊張は寒さ以上に身を縮ませていた。

「待った」

先頭を歩いてきたフォンが、小道を抜けた先で歩くのを止める。

「何事かと前方を覗き見た一行は揃って光で目をくらませた。」

そこには一面の氷。目をくらました光はその氷が反射させたものだった。

「ここを通るんですか？」

ソニンが怖々と聞く。ここに来るまでもに何度か氷の道はあった。その際、一歩踏み出せば壁か雪の道にたどり着くまでは身動きが取れないほどに滑ってしまった。

その時のように到着点が目視できるのなら構わないのだが、あいにくと今回はどこに続いているのかを窺い知ることができなかった。

「他に道は無さそうだ。幸い、魔物をここを避けているのか気配もないし、ゆっくりいけば問題ないだろう」

皆に目配せで了解をとり、一歩ずつ踏み出していく。

「ぬうっ！」

しかし一人、克蘭クが思い切り足を滑らせて仰向けに倒れたまま高速で滑って行く。

「克蘭ク!？」

追いかけてようにも急げば彼の二の舞になる。遠ざかっていく克蘭クを見失いようにしながら、ゆっくりと滑って追いかける。

克蘭クは氷の道の先、雪の道に頭を突っ込んだ状態で止まっていた。

「だ、大丈夫か」

大変な事態なのだが、どうにも雪に頭を突き刺した克蘭クの姿が笑いを誘い、緊張感は皆無だ。

気を取り直し急いで雪から引き抜くも、反応が薄い。というよりも何かを耐えるように小刻みに震えていた。

「こんな氷……」

「克蘭ク……」

「こんな氷溶かし尽くしてくれるわああああー！ー！ー！ー！」

両腕から大量の炎を生み出してあたりにまき散らせていく。

「どうやら彼の許されない何かに踏み入られてしまったようで、見境なく炎は氷を、雪を蹂躪していく。」

「最初からこうしとけば良かったんだZEE!!! 火炎の術式だ!!!」

ボチャン。

「で、湖に落ちて風邪をひいたクラリんの代わりにボクですか」

時刻はすでに夕刻。雪の次は氷のように冷たい水からクランクを引き上げて、連れ帰り再びこの場所に戻ってくるまでにそれだけの時間を要してしまった。

クランクが湖に作った穴はその間になくなり、痕跡すら残っていなかった。

一行は再び氷の上を慎重に進み始める。決して滑らぬよう、ゆっくりと。

奥に通じていそうな通路は度々目にするが、氷の上では直線にしか動けないため、何度かの遠回りを経て、ようやくたどり着く。

すでに迷宮は暗くなりはじめしており、探索に使える時間はそう残されてはなさそうだ。

出来る限りの事をと、周辺を探索する。

しかし短時間とはいえミルリアのお蔭で効率的な探索ができているのにも関わらず、それらしい物を発見する事ができない。

「おかしいな……。本当にこの階にあるのか？」

存在する事すら疑いたくなってくるほどの時間が経っていた。

「やっぱり、あの先なのかな……」

あの先、というのは探索中に見つけた細い道。しかしそこにはFOEが、よりにもよって赤いもやもやのFOEが道を塞いでいたのだ。その場からじつと動かずについて、引き寄せる音を奏でる鈴にも

反応を示さない。

かといって、倒して進むのは危険が大きすぎる。

「でも、探してない所といたらあの先ぐらいですよ」

一か八か挑んでみるか、手に負えないようだったら退却すれば等、どうすべきかを思案していた所に人影が現れる。

「……っ!？」

驚き、振り返る。そこには二層で君達の前に立ちはだかったエスバットの、アーテリンデと名乗った少女が立っていた。

「やめておいたほうがいいわよ。そう簡単にいく相手じゃないわ」

忠告のような言葉に合わせて、争う気は無いという意味表示かその手に武器は握られていない。

「何しに来た……」

相手にその気がないといっても油断はできない。エスバットは公国でも指折りのギルドだが、リアーリスにとつては何を考えてるかわからなく、いい印象を持ってはいない。

「何しに来たとはご挨拶ね。今日は少し聞きたい事があるだけ。ま、聞くだけ無駄かもしれない……。けど、一応聞いておくわ。迷宮の探索……。ここで諦めて、帰ってくれない?」

アーテリンデの言葉を、君達は一瞬理解できなかった。

しかし、その言葉の意味を理解していく毎に怒りが湧き出してくるのを止める事ができなかった。

「そんな事ができるわけないだろ!」

フォンが武器を構えて前に出る。他のメンバーも次々と自らの武器を持ち、臨戦態勢をとる。

それほどまでに今の質問はたった今迷宮の中にいる冒険者にしてはならないものだ。

冒険者として当然の反応を見て、アーテリンデは眉を下げ、寂しげな表情で笑う。

「……そうよね。訳もわからず冒険を捨てる冒険者なんていないわよね」

アーテリンデは天を仰ぎ見て、言葉を繋いでいく。

「一つ、教えてあげる。公国に伝わる迷宮の先にある空飛ぶ城。この街に来る冒険者はそこにロマンなり名誉なりを求めて来ているんでしようけど、空飛ぶ城の話には続きがあるのよ。噂くらいなら聞いた事あるんじゃない？空飛ぶ城には天の支配者とその眷属が住み、地上で死した魂を集めているといわれているってね。けどね、それは噂じゃないの。ここから先は、人の力が及ばぬ恐ろしいモノがいる……、それをよく覚えておくのね。それでもなお先に進みたいなら止めやしないわ。……今はね」

「今は……？」

アーテリンデは真つ直ぐと君達を見る。寂しそうな表情はそのまま、そこに何かの決意の色を浮かばせて。

「あたしにとっても、あなた達にとっても、とつても不幸な事が起こるわ」

アーテリンデはそれだけ告げると樹海の奥に消えていく。

彼女の抽象的な忠告は、今まで樹海で感じてきたものより何倍も強い不気味さを漂わせていた。

立ち去っていった場所から目が離せず、時がとまったかのように立ち尽くす一行。

気がつけば既に夜となっており、あたりは暗闇に包まれていた。

「……あ、見て！」

ソニンが指を指した方向は先ほどまでFOEが道を塞いでいた場所。

頑としてその場を動かなかったFOEが、今は一定地域を周回していた。

「夜行性、だったのか？」

新しいFOEの習性を知り、いつもなら喜びを感じる所だが、先ほどのアーテリンデのせいで何か感じ入る余裕はなかった。

それは、その通路の先で目当ての氷の花を見つけた時も同じだった……。

十三階：惑いし心断ち切るは剣の意思

一行の足取りは重いものだった。

周りに細心の注意を払い、どんな些細な事も見逃さずに調べていく。

逆に無駄な体力を消耗しているかに思えるほどの行動は、先日のアーテリンデとの一件が原因となっている。

それでもなお先に進みたいなら止めやしないわ。……今はね、つまりは既に一三階へと歩を進めたりアールリス一行は彼女の、エスバットのターゲットとされている可能性があるのだ。

冒険者が冒険者を襲う、そんな事はいえなだらうなんて楽観視はできない。

ライシュツツというエスバットのガンナー。彼と初めて対峙した時の殺気は冗談とかそういう物ではなかった。

それに加え、酒場で不穏な情報が流れていた。

第三階層にて、恐ろしい魔物が現れた……と。

それ自体は対して驚くべきではない、迷宮では日常といっても過言ではない出来事である。

ただ、その魔物にやられたと思われる冒険者の遺体には銃創が残っていたという。

アーテリンデの言葉に、三層に潜むという魔物、そして冒険者の遺体に残された銃創。

一行を不安にさせるには十分すぎるほどだった。

「ふう……、少し休憩しよう」

周辺の安全を確認し、一息つく事にした。

いつもの何倍も消費し、極寒の中というのに緊張のせいで皆汗だくになっている。

だというのに踏破できたのはほんの少し。今までの階の具合からすると、まだ半分も越えてないだらうという所だった。

ソニンが風邪をひかぬようにと皆の汗を拭いて回りながら不安の一言を放つ。

「本当にエスバットは私たちと争うつもりなんですか……」

ソニンにとっては考えられない事だった。今まで戦ってきたのは魔物達。しかしエスバットは同じ冒険者、同じ人間なのである。

争うことになれば、そしてエスバットが本気ならば命の奪い合いとなってしまうかもしれない。

人を治すメディックにとって、想像するも恐ろしい事なのだった。

ソニンに不安そうな顔をされながら汗を拭かれていたミネラは、くすぐったそうな顔を引き締める。

「この階じゃないかもしれない。でも、次の階層に到達するまでには必ず……」と置いていいと思う。あたしとしても戦争でもないのに人と殺り合うのはゴメンだね」

ミネラの言葉にキリはぎよつとしてミネラの方を見る。

「ミネラさんは、戦争の……経験があるのですか？」

「いんや、幸いにもあたしが戦力になる前に終わってたよ。でもま、そこで身に付けた力がこんな所で役に立つとは思わなかったけどね」
軽々というミネラの言葉に驚いたのはキリだけではなかった。

フォンもソニンも戦争のない平和な国で育って来た。他人事でしかなかった戦争という単語が急に身近な物に感じられてしまう。

ただサクは、ミネラの言葉に共感を示すように腕を組む。

「私の剣も所詮は殺しの道具だ。そう教えられてきたし、事実……」
サクはそこで言葉を切り、何かを耐えるように表情を歪める。

どう言葉をかけるべきかわからない。今まで知らなかったサクの別の顔を見ているようだった。

「何、結局剣は己を磨く道具にしたほうが心地が良いと気づいて、ここににいるわけだ」

表情を和らげるサクに、知るべきサクの顔はこちらだと一瞬にして悟る。

フォンは拳を握りしめ、絞り出すように自らの思いのたけを語る。「俺は……ただ憧れていた。物語に出てくる英雄に、騎士に。何かを守る人間になりたかったんだろうな。それでこんな所まで来るとは、本当に思っていなかったよ」

この迷宮へと足を踏み入れた理由はそれぞれだ。誰もが違う理由で、皆がこの地に立っている。

「私の家は、昔は悪い事をしてきたようです。当時では正義であっても、その歴史だけを聞いたら誰もが悪い事だと思ってしまう事です。カースメーカーは元よりそういう職ですし、私も世襲に習ってカースメーカーになりました。……というより他の事への才能はからつきしだったのもあるですが……。だからこそ、この力で誰かの役に立てたら、助ける事ができたら嬉しいと思っただけです」

優しさを持ってない時代に作られた歴史を、優しさを持てる時代に背負わされたキリがそれに執着するのも無理のない話だった。

「何だか皆さん、自分で何か思うところがあつてここにいるみたいですね……。私はメディックだから……。それだけってことはないですけど、父も母もメディックでしたし、誰かを治して生きていくように育てられましたし……」

ソニンらしい言葉に自然と笑みがこぼれる。

ただ自分たちがここにいる理由を確認しあつても、心の中の不安は拭えなかった。逆にこれ以上先に行く事は、エスバットと戦う事は、その理由に反してしまふのではとさらに不安をおおる事になつてしまった。

「でも、それだけじゃない」

その雰囲気を読み取るかのように力強く言う。

「俺たちが先に進むことで助かる人もいる」

現に先日持ち帰った氷の花で、秘薬の完成に一步近づける事が出来た。

秘薬だけでなく、一般に出回るような薬も、迷宮から持ち帰った素材でいくつも増えた。

「エスバットだって好きで足止めをしているわけではないかもしれない」

普通に考えて冒険者が冒険者を妨害してメリットがあるとは思えない。ましてやエスバットは公国に認められるほどのギルドだ。少なくとも同じ扱いを受けていたベオウルフは……決して人道に反するような事をするギルドでは無かった。

何かやむにやまれぬ理由があるのなら、それを取り除くための力になりたい……そう思うのは甘い考えだろうか。

でも、らしい。そんな甘い考えに従って動くのはとても自分達らしさを感じられた。

皆がうなづく。たとえここにいる理由がそれぞれ違うとしても、ここから先へ進む理由は全員同じであった。

「それにきつと一番の理由は……」

空を、その先にあるといわれている城を見るかのように上を見る。

迷宮の外と中はまるで別世界だ。あらゆる危険に、襲い来る魔物。命を落とすかもしれない状況で、小道を抜けた先の息を呑むほどの光景に見とれたり、見た事もない動植物。

満たされる事のない好奇心が、あらゆる人間を惹きつける。

そう、冒険者が迷宮を進む理由なんて最初から一つしかない。

そこに、迷宮があるからだ。

「だあっはっはっはっは！！てめえら今さらそんな事に気付いたのかよー！！」

迷宮を進む事への迷いを断ち切って、意気揚々と街へと戻った。

その気分のまま酒場へ行き、湧き立つ興奮のままに店主と今日の話について話すと大声で笑い飛ばされてしまった。

そんな当たり前な事をと言う店主に、今までそれを誇らしげに語っていた自分達が妙に子供っぽく感じられ恥ずかしさを酒で紛わす。

「登山家は言った。何故山に登るのかと聞かれて、そこに山があるからと。船乗りは言った。何故海に出るのかと聞かれて、そこに海があるからと。冒険者は言った。何故迷宮に入るのかと聞かれて、そこに迷宮があるからと。んなもん常套句だろうが。ま、てめえらは生粋の冒険者ってわけじゃねえからな。ようやく一人前ってところか。はっはっは!!」

「随分と嬉しそうですね。そこまで嬉しがられると少し恥ずかしいです」

「そりゃあな!! てめえらが最初ここに来た時は頼りなさそうなヤツだなとか思ったが、今じゃ立派な冒険者だ。いい冒険者が入る酒場には人が集まるからな、儲かってしょうがねえや!!」

「ごちそうさまでした」

早々に席を立ち、君達は自分達の住居へと戻る事にした。

一四・十五階：氷姫の誘う死地の広場（前編）

十四階。それが彼らによる譲歩の限界であった。

自分達が何をすべきか、何をしたいかという迷いを断ち切った君達は、限界の線上にいる君達を恐るべき殺気の灯った視線を向ける老人を前にして一歩も引く事は無かった。

「久しぶりだな。リアーリスの者たちよ」

魔弾の銃士ライシュツツは強い殺気を放ちながらも、今ここで争う気は無いのか構えてはいなかった。

ただ君達の迷いのない瞳に足止めをした所で大人しく引き下がる事はないという意志を感じ取ったのか、今までのような回りくどい足止めをする事も無く単刀直入に告げる。

「お嬢様から警告は伝えられているはずだが、どうやら受け入れる気はないようだ。だが覚えておけ。このまま進めば一五階、氷と雪の広場がヌシらの墓場となることをな!!」

ライシュツツは強い語調のままそう告げ、樹海の奥へと消えようとす。

「待ってくれ!! あんた達も冒険者だろ!? 何故それが冒険者の邪魔なんてしているんだ!!」

フォンは大声を上げ去っていくライシュツツを制止する。

立ち止まるライシュツツは先ほどまでの殺気を失わせ、初めて聞かせる声で話す。

「冒険者か……。我らが冒険者であった頃などとうに昔の事」

それを聞き、君達は何かを感じ取った。

君達による甘い考え……。エスバットというギルドは何か止むに止まれぬ事情があるという事は決して間違っていないかったという事を。

ただそれと同時に、その行為には曲げられない信念のようなものが宿っていると。

「な、何か私達に出来る事は……っ」
それでもソニンは問う。それが君達の決めた、君達の最善だからだ。

ライシュッツは一瞬だけ何かを懐かしむような顔をするが、すぐに元の厳しい表情へと戻る。

「又シらに出来るのはこれ以上先に進まぬ事だけ。又シらに來られては我らが困るのだ。仮に我らを退け、先に進むような事があったとしても、いずれ又シらも我らと同じになるだろう」

謎めいた言葉を残してライシュッツは去っていく。

君達はもうそれ以上引き止められる言葉を持っておらず、ただ老人の背中を見つめるだけ。

まるで懇願するかのような様子に、踏み出す足にずしりと重りがつけられたように感じる。

だが君達は歩みを止める事は無い。

迷いは断ち切ったのだから。

そして 十五階。

辿りついた扉の奥からはこれまでと比べものにならないほどの殺気を感じる。

魔物以外の強い殺気というのはどうしてこうも不快ともいえぬ不安ともいえぬ感情で胸をかき乱すのだろうか。

フォンは盾を心を構え、

サクは握る手の感触を、

ミネラは鞭の動きを確認し、

キリははやる心と体を拘束し、

ソニンは皆の無事に全てを賭ける。

そして再び、自分達が先に進む理由を思い出しながら何倍にも重く感じられる扉を開いた。

扉が開いた振動で、ばさ、ばさどこからか雪が落ちる音がする。

そこは美しい柱が何本も並ぶ広場。本来ならば見蕩れるその光景も、中央に立つエスバットの二人によって全身を凍らすものとなっていた。

「とうとうここまで来てしまったか」

ライシュツツは鋭い視線を君達に向けながら、どこか憂いを含んだ声で告げた。

「警告はした。これ以上先に進むのならばここを又シらの墓場にするとな。覚悟はできているのだろうな」

ライシュツツは銃を構える。それに反応して、君達も己の武器を握りなおす。

ついに始まる、そう思った時、アーテリンデが間に入った。

「出来れば、貴方達とは戦いたくないの。本当に、本当にこれが最後。どうか引き返してくれないかしら」

アーテリンデの言葉に君達は迷いなく首を振る。

決意は済んでいる。この場から立ち去るつもりも、ここで倒れるつもりも、エスバットを潰すつもりも君達には一切なかった。

アーテリンデは君達の決意を感じ、諦めたように溜息を一つついて再び語りだした。

「すごいわね。今時そんな目が出る人、いるなんて思わなかったわ。……そうね。その目に敬意を表して少し昔話をしてあげる」

ライシュツツはお嬢様、とアーテリンデを止める素振りを見せるがアーテリンデはそのまま続ける。

「……その昔、一人の巫医がこの迷宮に挑んだ。その巫医がいたパ―ティは皆腕が立ち、第一、第二階層ともに何の問題もなく越えた」君達はアーテリンデの告白を聞き逃すまいと耳を傾ける。

やむにやまれぬ事情、エスバットの行動の真意がそこに隠されているのは明らかだからだ。

「そして……、この氷と雪の樹海で彼女は命を落とした。仲間をか

ばってたった一人で……」

アーテリンデの声が次第に振え、何かを耐えるものになっていく。代わりにライシュツツがその先を続けた。

「それだけならば、樹海ではさほど珍しい事ではない。冒険者の末路というのは未だ道半ばで果てるか、諦めるかのどちらかしか無いのだからな。だが……それだけでは済まなかったのだ。天の支配者の話はお嬢様から聞いたと思うが、彼女はそれに魅入られてしまったのだ。彼女は永遠の命を与えられ、彼女は……人ではなくなったのだ」

「でも……、それでも、私達は彼女を守りたいの」

アーテリンデは槍を構えて君達を見る。悲壮な決意に後押しされた槍の穂先に君達は一瞬怯むが、すぐに持ち直し、君達は君達の決意で自らの武器を向ける。

アーテリンデは目を閉じ、最後の言葉を告げる。

「このまま進めば、貴方達は変わり果てた彼女と戦う事になってしまふ。でも、どんな姿になっても彼女はあたしにとって大切な……だから」

そして目を開き、すべてを捨てた覚悟の視線を君達に向ける。

「リアーリスの者たちよ！！ここで冒険を終えてもらおう！！」

雪が積もった地面をもともせず、一足飛びに君達へと肉薄していく。

「お前らの言う事はわかった」

アーテリンデの初撃を武器で弾き、フォンは言う。

「こんな事をしている原因も、決意も、覚悟もわかった」

一四階でのライシュツツの言葉。例えこの先へ進む事ができても、いずれ同じ事になると。

その意味も理解した。理解した上で、言う。

「そんな事をして、その人が喜ぶとでも思ってたのかよ！！」

月並みだ。本当に月並みの偽善であるとわかっている。

元に戻す方法を探そうなんて言い出さなかったのはかるうじて

自制が効いた結果だった。

例え元に戻す方法があつたとしても、その先にあるのはただの肉でしかない。

「喜ばせようなどと思ってなどいない。これは我らの、我ら自身の望みだ」

ライシユツツの持つ二丁の拳銃から無数の銃弾が打ち出される。

正確無比に君達を狙う銃弾を、こちらも正確無比に振われた刀と鞭に叩き落とされる。

「そんなもの言い訳に過ぎないな」

「止めたほうがいいんじゃない？　そういう最後は誰かのせいにする自己満足は」

二人の意思は揺るがない。

恐らくは何人も冒険者をここで返り討ちにし、同じ事を言った冒険者もいたかもしれない。

それら全てを跳ね除けて来たエスバットの意思是、もはや鋼のそれである。

「自己愛は大いに結構ですが、過ぎたるそれはただの悪意でしかありません」

キリの放つ力抜いの呪言が二人を侵していく。

「否定するつもりはありません。お二人は決して悪ではないと思えますから」

ソニンは鞆から取り出した小瓶を叩き割る。

小瓶から漏れ出した衝撃を和らげる霧が君達を包んでいく。

「言ってくれるわね。でも、もう引き返せないのよ」

五対二という状況で、君達は殺さずに制するという事はそう難しい事ではないと考えていた。

だが甘い。君達は五人で迷宮を歩いていたのと同時に、彼らは二人で同じ場所を歩いていたのだ。

しかも冒険者を一人たりとも先に進ませぬため、恐らくは君達の何倍も長い時間……もしかしたら街へ戻らず常に迷宮の中にいる

のかもしれない。

それをやってのける二人を前にして、五対二という状況は決して有利でも何でもない。

サクの刀に、ミネラの鞭。二つの攻撃に晒されながらアーテリンドは難なく捌いていく。

フォンはライシュツツの放つ無数の属性弾に晒されて防御に徹するしかなくなっている。

キリは二人を病毒や睡眠に侵そうと呪言を放つも、魔物達と同じようにはいかずうまくいかない。

ソニンは膠着する状況に手出しができず、せめて誰かが傷ついた時すぐに動けるよう待機している。

「くっ……」

五対二でも五分という誤算は、それすらも誤算であった。

三属性を規則性なく打ち出すライシュツツに、フォンは既に対応しきれなくなっていた。

銃撃による衝撃は盾で防げるし、ソニンの使った霧によっても軽減されている。

ただ炎、氷、雷の属性は防ぐに難く徐々に体力を奪っていく。

「病毒の疫に侵さん!!」

転機は突然訪れる。キリの何度目かの呪言により、ライシュツツの体が病毒に侵される。

それに怯むライシュツツではなかったが、毒のダメージに耐えようとしたその一瞬、フォンは懐に入り込み剣ではなく盾を持つ手による裏拳で攻撃する。

剣以上の、盾による破壊のダメージはライシュツツを大きく吹き飛ばす。

「爺や!？」

それに動揺したアーテリンドもライシュツツと同じ道を辿った。

鞘にしまわれた刀による薙ぎ払いが脇腹へと入り、意識が飛びそうになるのを必死に堪え後ろへ下がる。

追撃はしない。むしろ下がりがりたかったのは君達の方であり、一度退き、ソニンの治療を受ける。

「流石ね。驕るつもりは無いけど、あたし達に一撃いれられる冒険者なんてそうそういないわよ」

エスバット側も治療を試みているが、アーテリンデが巫医とはいえ、専門家であるメディックほどではなくダメージは大分残っているようだ。

だが地力の差か、アーテリンデもライシュツツもすぐに立ち上がり武器を構える。

その構えにダメージは見てとれず、こちらの渾身の一撃は二人にとって耐えられるレベルのものでしかないようだ。

「でも、その実力はこの場合ちょっと不幸かもしれないわね。全員無事に帰してあげようと頑張るつもりだったけど、そうもいかないみたいね」

余裕に満ちていたアーテリンデの顔は、薄っぺらい仮面のようなものになる。

その変化に君達は戦慄を覚え、流れ出る不安や恐怖を必死に抑え込んだ。

十五階：氷姫の誘う死地の広場（後編）

「爺や」

アーテリンデは何か指示を出す。それを受けたライシュッツは一発の弾丸を君達に見せつけるようにした後、装填し、君達の足元へと、発射した。

明らかに誰にも当たらない場所。雪の上という跳弾も狙えない場所へと銃弾は一直線に飛んでいく。

「どこを狙って……」

ただの威嚇かと思い、銃弾より撃った本人、そしてアーテリンデへと注意を向けていたが、雪の上に着弾した銃弾が突然怪しい閃光を放ち君達を襲った。

「これは……。皆さん、気をつけ……」

その閃光の正体にいち早く気づいたキリが突然胸を押さえながらうずくまる。

その顔色は悪く、どうやら毒に侵されているようだ。

「キリッ!？」

それを見て、フォンがキリの守りに入ろうとするが彼もまた手足が麻痺し体の自由を奪われていた。

状態異常を撒き散らす異質の弾丸。ライシュッツが撃った物の正体だ。

サクとソニンは運よくか、何ら異常は受けなかったが、閃光の衝撃に体を怯ませていた。

「くっ……」

ミネラは片膝を付き、遠のいていく意識を必死に繋ぎとめようとするが、抗えずそのまま眠りに落ちていった。

だが、雪の上に体が崩れ落ちる事は……無かった。

「ごめんなさいね……。ま、運が悪かったと思ってちょうだい」

アーテリンデの槍が、倒れるミネラの体を深く……貫いていた。

消えかけていたミネラの意識が一瞬にして真っ赤に染まっ
ていく。

アーテリンデの槍には、巫術が施されていたのか眠りに落ちて
いたミネラに対して普段以上の鋭さをもっていた。

「う、あああああ！」「」

絶叫が部屋に響き渡る。

痛みに苦しむミネラと、怒りに支配されたサクの空気を切り裂
くような叫びがこだまする。

怒りのままアーテリンデへと迫るサク。

既にミネラから離れていたアーテリンデは、力任せに振られる
サクの刀を難なく防いでいく。

「仲間への想いが詰まったいい剣ね。でもそれじゃ、重いだけで仇
はとれないわよ」

刀を弾かれ、柄の横薙ぎを腹部に受け飛ばされる。

苦しげに喘ぐサクは、刀を放さないようにするだけで必死だ。

「さて、ここで最後のお願いをしましょう」

既にミネラの側にソニンが立ち、治療を始めている。

エスバットはそれを邪魔するつもりはないようで、話を続けた。
「その子は確実に致命傷。すぐに街に戻らなければ命の保証は無い
わ。二度と迷宮に入らないと約束してくれるなら見逃してあげる。」

出来ないのなら、全員ここから出すつもりは無い
それはもうお願いなどではなく、脅迫だった。

どんなものよりも強力な……。

「く……、そ……」

フォンは悔しげに唇を噛む。仲間をここまで傷つけられ、黙って
いるわけにはいかないという気持ちと、サクのように怒りに身を任
せて突撃しても彼では歯が立たないのは明らかだ。

それに加え、これ以上立ち向かえばエスバットは君達を絶対に
逃がさないだろう。

少なくともミネラは、死ぬ。

迷宮に入らないという約束は約束でしかないが、それを破り迷宮に入るといふ事は常にエスバットからの襲撃に備えなければならぬという事。

今回のように戦いが始まる事はないだろう。エスバットから奇襲を受ければ……結果は火を見るより明らかだ。

仲間の命か、迷宮の探索か……。どちらかを選ばなければいけない状況で、選ぶものなど決まっていた。

「わ、わかっ……」

「大丈夫です!!」

エスバットの願いを受けようとしたフォンの言葉を、ソニンが大声でかき消した。

「私がこの場で絶対何とかします!!だから、諦めないでください!!」

ソニンは持てる全ての力でミネラの治療に当たっている。

雪を染めつくすほどの出血は既に治まりかけ、顔色も段々と回復してきたように見える。

「……本当、すごいわね貴方達は」

アーテリンデも医者 of 端くれだ。その場で治せる傷かどうかの判断はつく。どの程度の傷ならばどうなるかという力の加減も。

その予想を上回るソニンの力に驚きを隠せないでいた。

「そうですね、フォンさん」

毒を抜き切ったキリがフォンの側に立ち、力強く言う。

「ここで退いたら、街にいる皆に合わす顔が無いです。ソニンさんを、仲間を信じて私達は私達の出来る事をするです」

フォンはソニンを、ミネラを見る。

ここで退かなければミネラの命が失われるかもしれない。

「ただ、信じよう。仲間の命を守るのがパラディンの使命であり、仲間の夢を守るのもまたパラディンの使命である、そうフォンは思う。」

「なかなか、折れないものね」

アーテリンデは困ったように言う。そして、
「いいわ。全員この場で眠りなさい!!」

自らに残っていた全ての甘さを捨て、再び槍を構えなおした。
フォンももう一度盾を構え、全てを受けきる、その覚悟を全身に
いきわたらせる。

「フォン」

立ちあがったサクが、フォンに近づきながら小さく声をかける。

「アーテリンデは私がやる。フォンとキリは私が行くまで絶対にラ
イシュツツを抑えきって」

その言葉に二人は驚く。

最初も、先ほどもサクの刀はアーテリンデに通用しなかった。

しかし今の言葉には絶対の自信のようなものが含まれていた。

「そして先に謝っておく。もはや甘い事はいつていられない。この
ギルドに人殺しの汚名を付ける事になるかもしれないが、何、向こ
うも殺す気で来ている。現に仲間を一人半死にされた。文句は言え
ないだろう」

ひやりとするサクの言葉。普段からはあまり想像のつかない声に
一瞬ゾツとし、サクの顔を見て、更に数瞬ゾツとしてしまう。

それは、十三階にて一瞬見せた、知らないサクの顔だった。

「……わかった」

頷きにくい言葉ではあったが、仕方が無い……と飲み込んだ。

サクの言う通り、エスバットはこちらを殺す気で武器を向けて
いる。

こちらも同等の気持ちでなければ歯が立たないのは道理だ。

何を守り、何を失うか……、その区別を今しなければならぬ。
「がんばってくださいです。私も全力でサポートするです」

キリの言葉を皮切りに、エスバットとリアーリス、両者の激突が
再開した。

サクが動き、雪を踏む足音が一つ。だが、たったそれだけでアー
テリンデまでの距離がゼロにまで縮まる。

一歩だけしか動いていないわけではない。その証拠に雪上にはサクの真新しい足跡が並んでいる。

その速さのまま刀を振るう。

アーテリンデはそれを受け止めるも、見えていたわけではなく死を避けたいと思う体が勝手に反応しただけのようだった。

いつもと全く違う太刀筋。

それを振るうサクの顔は、表情が消え、まるで幽鬼のようだ。

感情を消し、防御を度外視した上での攻撃。

一見ただの捨て身の攻撃に思えるが、今のサクの攻撃はまるでパラディンの盾のごとく厚みを伴っている。

攻撃は最大の防御を存分にあらわしていた。

しかしやはりアーテリンデはただの冒険者ではない。受けるに難しと感じるや否や、徹底した攻めに転じ縦横無尽に槍を繰る。

刀の盾に空いたほんの少しの隙間に槍を付きいれ、サクに傷を与えていく。

初めはそれを自分から受け入れるかのようにもらっていたが、いつの間にかサクは槍の穂先すら見ずに、”まるで最初からどこに攻撃がくるかわかっている”かのように、難なく避けていく。

「自分が死地に置かれるほど感覚が鋭くなっていく……。まさかまともに扱えるブシドーがいるとは……」

ここにきて実力は拮抗。だが釣り合っているわけではなく、お互いを削りあう消耗戦に突入する。

決着に至るまでそう長くは待たないだろう。

「フォンさん」

サクとアーテリンデの闘いが始まった頃、ライシュッツと睨みあうフォンにキリが後ろから声をかける。

「サクさんはああいつてましたですけど、私はそれを待つのは……」

ちよつと嫌です。だからサクさんが決着をつけてしまふ前に「
」によつによつとフォンに耳打ちする。

出来るのかと尋ねるフォンに、フォンさん次第ですと返すキリ。その答えはいささか卑怯に聞こえたが、やらなければなるまい。「話は決まったか」

余裕を見せるライシュツツに、軽く笑みを見せる。

ただの強がりだったが、その顔が引きつる事はない。

サクが捨て身で行くのなら、フォンも背水の覚悟で行くのみだ。「うおおおおっ」

盾を構えながら前進する。

サクの様に一瞬で距離を詰める事は出来ないが、銃を相手に距離を取つて戦うわけにはいかない。

キリはフォンに先ほどみたいに盾ではなく剣でライシュツツに一撃いれて欲しいと言つてきた。

何を思つての事は分からないが、それさえできればあの魔弾の銃士を抑える事ができる自信があるようだった。

しかしライシュツツはフォンの接近を許さない。

二つの銃口から交互に繰り出される弾丸は確実にフォンの足を止め、その間に縮められた距離を戻してしまう。

このままでは埒が明かないと、フォンは突如彼らしくない行動に出た。

「せええいやっ」

なんとパラディンの命とも呼べる盾をライシュツツ目掛けて一直線に投げ飛ばした。

あまりにも予想外な攻撃。そして銃弾では防げない重い盾の弾丸を前に、ライシュツツは大きな動作でそれを躲した。

フォンはその隙を逃すまいと剣を両手で握りなおし、突進する。だが今のフォンは盾を持っていない。流石にライシュツツもそれには気づいており、迎撃する。

盾を持たずして防げまいとライシュツツは思ったが、そこに更

なる予想外が加わった。

パラディンに盾を持たせると最強に堅いが、持たなくてもそれなりに堅い。

そして我慢強い。

致命傷になりそうなものだけパリングし、後は気合と根性で銃弾の雨の中を駆け抜けていく。

止めきれない、そう感じたライシュッツは再び身を躲そうと動き出す。

だが遅い。振り下ろされたフォンの剣はライシュッツを捕え、雪上に鮮血が一筋描かれた。

「後は任せたアアーっ!!」

そして最後の予想外は、フォンに残された剣すら投げ捨てたという事。

「任せましたですっ!!」

投げ出された剣は放物線を描き、キリの前に刺さる。

キリはその剣についているライシュッツの血液を左手の指でなぞり、右手の甲に紋様を描く。

その右手で胸に下げていた鈴を静かに鳴らし始める。

「ぐっ……」

変化はすぐに現れる。

ライシュッツは右手で握っていた銃を落とす。

キリの鈴の音が響くたびにライシュッツの右手に痺れるような痛みが走り、動かせる状態ではなくなっていく。

「できませんでした……ですう」

対象の血液と、カースメーカー特性の鈴の音で相手の神経を侵す封の呪言だ。

一度かかれば暫くその部位を無力化する事が可能になり、ライシュッツといえども片腕ではフォンを抑える事はできなかった。

蹲ったライシュッツの元に、盾を捨てたフォンが迫る。

アーテリンデは完全に防御に回らざるを得なくなっていた。

両者の傷の具合を見れば明らかにアーテリンデのほうが優勢に見えるにも関わらずだ。

その傷自体も二人が激突し始めた頃につけられたものであり、今ではアーテリンデの槍がサクをかする事もない。

そしてもう、アーテリンデは攻撃する事もままならない。

確実に避けられると知りながら繰り出す攻撃は自分から隙を見せるようなもの。

ただひたすらにサクの攻撃を受け続けるしか、アーテリンデには残されていなかった。

上段の構えから縦一文字に繰り出される斬撃を受け止める。

重い一撃に腕が痺れるのを感じながら、生存本能のままに体の向きを変える。

まさに紙一重の差。一直線に繰り出された突きに服を裂かれながらもなんとか躲し切る。

サクの猛攻は続く。

鞘に納められた刀が横薙ぎに振われ、アーテリンデの槍を弾き飛ばす。

鞘撃の勢いそのままに回転し、今度は刀を、神速の居合でアーテリンデの首目掛けて振われる。

神速の刀も、今のアーテリンデにはスローに見えていた事だろう。

逃れられない死を前にした時の超感覚。

無慈悲な神が、死を理解させるためだけに与えた時間がゆっくりと過ぎていく。

「……ぜえ、はあ。ま、間に合った」

が、サクの刀がアーテリンデの首を討つ事は無かった。

サクの腕に何重にも鞭が絡まり、その動きを封じていたのだ。

「おはようの、キスだぁー!!!」

そしてサクに振られる強烈なグーパンチ。

はっと、サクは表情を取り戻した。

「う……、ミネ、ラ？」

サクの腕を封じ、殴り飛ばしたのは意識を取り戻したミネラだった。

苦しそうに傷口を押さえてはいるものの、どうやら危険な状態は越えたようだ。

「まさか……これほどまで早く……」

驚くアーテリンデはソニンのほうを見る。

汗だくになり、顔色も悪くなったソニンはアーテリンデに向けて余裕のガッツポーズを取って見せた。

「爺や……っ」

アーテリンデはライシュツツの姿を探すが、すぐに気絶した老人の姿を見つけ、肩を落とす。

「これで、負けを認めてくれないか」

ライシュツツを抱えながら近づいてくるフォンは、頼むような声で問う。

アーテリンデは唇を一度深くかみしめた後、ふっと肩の力を抜き表情を和らげる。

「ここまでのされて、最後は敵に命まで助けられたとあっては……認めるしかないわよ」

その言葉に全員が安堵の表情を浮かばせる。

「もう止めはしないわ。この先に進むのは貴方達の自由よ。でも最後に、一つだけ約束して欲しいの。この先に進むという事は、彼女と戦う事になるわ……。もう、倒すなんて言わないけど、彼女の先に進む事ができたなら……。私達には見つけられなかった天空の城。そこに住む彼女を……。あんな姿にした天の支配者を倒して欲し

い

「アーテリンデはそう言っただけで頭を下げた。」

長い間ここを、仲間を守ってきたエスバットの最後の願い。

受けるのも断るのも君達の自由だが、君達にとっては選択肢は一つしかない。

深く頷く君達を見て、アーテリンデは何かを吹っ切った表情を見せる。

「あ、やば……」

突然どさりと倒れるミネラ。

「き、傷口開いた……」

「……ええええーっ!!」

「ソ、ソニンさん、ミネラさん、がばたん。」

「ソニンも倒れたーっ!!」

先ず君達が果たすべきミッションは、どうやら迷宮内からの脱出であるようだった。

十五階：凍える哀しみの果て

エスバットとの激闘を制し、倒れたミネラやソニンも無事連れ帰る事ができた。

それから数日して、ソニンが回復したのを機に君達は再度樹海へと向かおうとしていた。

「克蘭ク、ミネラの事任せたぞ」

「承知した。愛溢るる看護を約束しよう」

ミネラの傷はまだ完治していない。傷と共に失った体力が治りを阻害しているのだろう。

こればかりは安静にするしか治す術がない。

後は克蘭クの看護に期待するでしょう。彼の療養食は唯一の特効薬である。

だがベッドで眠るミネラの姿に、これから先の、更にも上へ進むことへの不安を感じざるを得なかった。

頭を振って不安を振り払い、いざ『彼女』のいる樹海へと進んでいく。

「このメンバーで行くのも久しぶりだね」

リリックが少し嬉しそうに笑う。

フォンにサク、そしてリスにリリックにソニン。

リアリスを立ち上げた初期メンバーである五人での樹海探索は思えばここ最近無かった事だ。

それだけリアリスというギルドが大きくなり、探索以外にもやる事が増えたという事なのだが。

「誰も彼も資金の管理が適当だから、私が付きっきりでかからなければ回らなかつたからな」

不満だ、と言いたげな言葉だったが、その顔は嬉しそうだ。

リアーリスの事を誰よりも知っているのがリスなだけに、自分達のギルドがどれほどのものになったのかという事を身にしみて感じているのだ。

「店主がこの国でリアーリスの名前を知らない奴は素人だと言っていたが、そこまで言われる流石に照れる……な」

サクは嬉しさよりも恥ずかしさが先に立ってしまったようだ。

ギルドが知られば当然のように所属するメンバー達も知られていく。

この国のどこを歩いても注目を浴びてはそうなるのも仕方のない事かもしれない。

「私達、強くなれているんでしょうか」

周りが知っているリアーリスは、様々な功績をあげた勇気のある、素晴らしいギルドだ。

ただ君達が知っているリアーリスは、それだけではない。

時には失敗して、傷ついてしまう事もある。どちらかといえばそちらの方が多い。

それを知っているからこそ、周りが見るリアーリスとの差異を感じてしまい、自分達はリアーリスにふさわしいんだろうか、等と言っわけのわからない不安を抱いてしまう事がある。

「強くなったかは……わからない。俺達はやれる事をやるだけさ。できない事は、できるようになればいい」

あまりにも漠然としすぎたフォンの言葉は、何故か心の不安を取り除いていく。

「アタシ達は雲みたいにふわふわーっしてるのがお似合いサ。難しい事はリスに全部任せるネ」

「勝手な事を……。まあ何、皆の心がそれで静まるというのなら悪くは無い」

結成からこれまでの、創設メンバーだからこそわかる変わった事と変わらない事。

君達にとってそれはどちらも大切で、守らなければならないものだ。

そう、これから挑む魔物がどのような怪物であったとしても、だ。

一面氷の広場に『それ』はいた。

遠目から見てもわかる禍々しい邪気。人が持つには黒すぎて、魔物が持つには純すぎるそれは、明らかに常軌を逸していた。

床を覆い尽くさんとするかのような触手の群れ。腕の様に伸びたドリルのようなもの。

そしてその巨体に取り込まれているのか、それが『体』なのか、中央には女性の上半身が。

「……あれが」

心が握りつぶされるような感覚に襲われる。

人外に落ちた仲間……。それを目の当たりにした時のエスバットの気持ちは流れ込んできているようだ。

もちろんそれは本人達の半分にも満たないものであったが、それでも痛いくらいに胸が軋む。

妖しく歪んだ女性の顔は、何を思っているものなのだろうか。

「皆、準備はいいか」

そう仲間と言うフォンは、自分の卑怯さに憤りを感じていた。

準備はいいかと聞いたのは、自分が心の準備をする時間が欲しかったからだ。

一人ずつ頷いていくのを見て、フォンはようやく目の前の『怪物』と対峙する覚悟を完了させた。

名をスキュレーと言う。それが『彼女』のものなのか『怪物』のものなのかはわからない。

「はあッ!!」

迫りくる触手をサクとフォンで迎撃していく。

リリックの歌に後押しされた二人の武器は難なく触手を切断していくが、その数は一向に減る気配を見せない。

キマイラの速さや魔人の力は持ち合わせてはいないものの、それを補って余りある耐久力は厄介と言う他に無かった。

スキュレーが持つ二つのドリルが大きく振り払われる。

鋭くも単純な軌道のそれはたやすく避けきる事が出来たものの、地面は粉碎され、大量の雪が飛び散った。

「とわっ……。こんなのに当たったらシャレにならないヨ……」

えぐれた地面を見て背中に寒気が走る。

直撃を貰えば死体を通り越して即肥料と化してしまうだろう。

避ける事は容易いとはいえ、確実という保証は無い。

「ならば……っ」

床に突き刺さったドリル目掛けて左からはサクの突きが、右からはフォンの盾が迫る。

お互いに決まれば腕の動きを封じられるモノ。あれ程の威力である。恐らくはスキュレーが持つ最大の攻撃に違いない。

それさえ封じられればこちらの勝率は跳ね上がる……。のだが。

二つの攻撃がドリルによって弾かれる。触手の部分とは比べモノにならないほどの硬度があり、封じるどころかダメージを与えられたかどうかも怪しい。

「これは……ミネラの回復も待ったほうが良かったかな……」

予想はしていたが、先の見えない苦戦に弱音がこぼれてしまう。

切れる触手は効果が薄く、効果が大きそうなドリルは切れず。

「ならば頭だ!!リリック、狙うぞ!!」

「了解だヨー！」

狙うのならば人のカタチが僅かに残っている場所。

化物ではなく人を狙うという抵抗感は既に捨ててある。

リズとリリック、二つの殺意がスキュレーに向かって放たれた。だがスキュレーの触手が突然津波の様に溢れかえり、それを防ぐ。

何重もの触手の壁は、放たれた無数の銃弾、矢を一つ残らず防ぎきった。

もちろん触手に与えたダメージはダメージのうちには入らない。しかしダメージよりも重要な情報をその攻防で掴んだ。

「狙う場所はそこか……っ」

触手に対してはダメージを負う事をなんら気にしなかったスキュレーが防御に回った。

つまりはそこへの、人のカタチへのダメージはスキュレーにとって無視できないモノであるという事。

真っ暗闇に放たれた小さな光ほど大きな希望は無い。

「サク、フォン！！ お前達はどうか触手の数を減らしてくれ！！」

リズの判断を拒む要素はどこにも無い。二人はスキュレーの懐間近まで接近し、触手を蹴散らしていく。

「はああああ ツ！！！」

サクの気合とともに刀に雷が宿る。

雷に弱いのか、刀から漏れる微弱な電流にも反応する触手達。

それを知ってか知らずか、これまで以上の深い踏込。雷を帯びた全身による鋭い突き。

サクが一直線に抜けた場所の触手に大穴が開いている。

触手をやられたというのに、スキュレーの顔が苦悶に歪む。

「リリック！！」

好機と見た二人の射手が再び攻撃を開始する。

防ぐ触手はその数を減らし、到底この数の弾を防ぎきる事はか

なわないだろう。

だが……。

「

!!!」

突然スキュレーが声ならぬ叫び声をあげた。

可聴域を超えた叫びは、激しい空気の揺れを発生させ自らを狙う凶弾を叩き落とした。

「なっ……」

リズの驚きをよそに叫び声は加速する。

二つのドリルが高速に回転し、声の波を荒く、不規則にしている。

「つつ……」

サクの腕が突如出血する。

何が、と考えるまでもなく原因に辿りつく。

激しさを極めた声の波は、もはや刃のそれと同じ。

見えない無数の剣が縦横無尽に襲いかかる。

「まずいつ!! 皆、退、」

事の重大さに気付き一旦退こうとするが、音速の刃は君達を瞬く間に蹂躪していく。

腕を、足を、顔を、腹を、胸を、首を、背中を。

スキュレーが叫び声を止めた時、あたりは倒れた木、崩れた壁に溢れまるで更地の様になってしまっていた。

その更地に倒れ伏す五つの人間。

息はあるものの、とても小さい。

スキュレーはその一つ、サクの元へと近づき、食らおうと触手を伸ばした。

「悲しい、声だネ……」

スキュレーの行動を弱々しい声で制止する。

リリックが傷の痛みを耐えながらゆっくりと立ち上がった。

「まるで泣いているみたいだったヨ……。そんな声じゃ……。傷より、心のほうが痛いヨ」

スキュレーがリリックのほうに向きを変える。

リリックの言葉を理解しているとは思えない。

ただスキュレーはその場で立ち止まり、リリックを見下ろしている。

「ソニン、ソニン大丈夫？」

リリックは側に倒れていたソニンに薬を飲み、頬を叩く。

ゆっくりと目を開けたソニンは今の状況を瞬時に理解し、ハッと目を開く。

「ねえ、皆をぱーっと回復させちゃう事とかって、できない？」

「……一度だけなら出来ると思います」

ソニンの言葉を聞いたリリックは笑顔を作り、力強く立ちあがった。

「アタシの歌に合わせて、お願い」

ソニンはリリックの表情にこの状況を打破する希望を見出し、はつきりと頷いた。

「アタシはバード。歌で、声で皆を幸せにするの。だから、悲しくさせる声を見過ごす事なんてちょっと出来ないネ」

リリックは片腕を上げ、静かに踊りはじめた。

舞台は大荒れ、衣裳も傷だらけで何ともみすばらしいステージだが、誰もを惹きつけ、沸かせる力を持っていた。

そしてリリックは歌い始める。

スキュレーの悲しきクライソウルを断ち切るために。

「蛮族の行進曲……！」

「皆っ、頑張つて……！」

内なる力を引き出すメロディと、傷を癒す優しき光が当たりを包む。

「……っ」

まず初めにフォンが起き、次いでリスもサクも目を覚ます。

そして体中に行き渡る生命力に、彼女達の想いに再び武器を取った。

「二人とも……ありがとう」

「お礼は閉幕後にお願いなー！そしてこれはサービスだよー！」
歌うリリックの雰囲気が変わっていく。

歌声に誘われてやってきたのは雷の意思。

それはフォンへと宿り、彼の体が青白い電撃を帯びる。

「大盤振る舞いだなっ！！」

雷を帯びた剣はスキュレーの触手を容易く切り裂くだけでなく、
電流が全身を駆け廻り本体にすら届いているようだ。

「やはりそれが弱点か。ならばっ」

サクが再び刃に雷を宿した突き、雷耀突きを放つ。

突き、雷共に凄まじい威力を誇るそれはスキュレーの体を容赦な
く削っていく。

「リズッ！！」

そして最後の一撃。

膝を落とし、両手で銃を構える姿は以前魔人との戦いで見せた
ものだ。

従来の属性弾をはるかに凌ぐ高火力。

放つ前から銃口からは電流が漏れ、手を伝い、リズの体に痛み
が走る。

それでも限界まで力を溜め、狙いを定め、全身全霊を込めて銃
弾を発射させた。

雷の奔流が、スキュレーを呑み込んでいく……。

「あ、あ」

触手の大半を失い、何分の一にも小さくなったスキュレーは、低
い呻き声を出しながら地面を這っていた。

あとはもう一撃、止めを刺すだけだ。

「アタシがやるヨ」

リリックが一步前に出て、スキュレーの頭部目掛けて弓を引き絞る。

スキュレーは自らに向けられた矢を見て、一瞬呻くのを止めた。その姿がどこか、安心して見えているように見え心が引き裂かれるような痛みに襲われる。

だがリリックが弓を引き絞る力を弱める事はなかった。

「もう、泣かなくていいんだヨ。悲しい声は、聞くのも出すのも嫌だもんネ」

静かに、一つの物語に終わりを告げた。

閑話：シスターハザード

第三階層を踏破したリアーリスは、暫く休息の中にいた。

エスバットに続き、スキュレーと強敵が続き疲労が溜まりつつあったので、それらを消化し、英気を養うためである。

だがそんなリアーリスに一つの危機が迫っていた。

ゆっくり、ととととと、気の抜けそうな足音を出しながら……着実に迫っていた。

「おはよう、ございます……です」

午後二時。おはようにはいささか遅すぎる時間にキリが寝室から這い出すように現れた。

随分とだらけているように見えるが、ここ数日のリアーリスはほとんど全員がこの有様だ。

英気のため、英気のためと毎晩酒場で騒いで朝日と共に寝て、昼過ぎに起きる。

このままではいつか働きたくないとか言い出し、ついには二丁の仲間入りを果たしてしまいそうである。

「あ、キリさん。おはようっす」

「おはようです。ミルリア」

既に起きていたミルリアと挨拶を交わして水を一杯飲む。

段々と覚醒し始めたキリの元に、リンが一枚の手紙を持ってやってくる。

「キリさん、手紙来てたよー」

キリはさして驚く事も無くその手紙を受け取る。

差出人の欄には両親の名前が記されていた。

以前出した手紙の返事だろうと思いい封を開ける。

内容は大体想像がついていたので、軽い気持ちで読み進めたが

……、
「ええええええええええ　　ッ！！！」

その予想を遥かに上回る内容に驚きの絶叫をあげる。

その声量は未だ情眼を貪っていた他のメンバー全てを叩き落とすほどだった。

「妹が来る？」

全員が揃った所で、キリが事情を話し始めた。

とはいえ大半が寝ぼけ眼で話の内容を理解しているとは思えなかったが。

「ええつとですね……。実は私、殆ど家出同然で公国まで来たですから……。居場所も落ち着いた事ですし、謝罪と近況を手紙に書いて送ったですが……。」

キリが恥ずかしそうに身をくねらせながらぼそぼそと話を続ける。

「どこをどう解釈したのか……。妹が、ミリって言うんですが、私がリアーリスに拉致監禁されると思いこんだようなん……。です。」

ぶふおつと含んでいた水が一斉に吐き出された。

寝ぼけ眼全員が含んでいただけに、あたりは大惨事になる。

「げほっ、げほっ……。拉致監禁で、一体どんな書き方をしたんだ……。」

「普通ですつ。勝手に出て行ってごめんなさいですとか、リアーリスという自分の居場所も見つけて楽しくやってるですとか……。でも……。自分で言うのもあれですし、それだけのせいにするのもあれなんです。妹は……。ミリはちょっとだけお姉ちゃんっ子で、思い込みも激しくて……。そもそも何も言わずに出て行った私が悪いで

すが……」

ちよつとじゃないだろうちよつとじゃ、と呆れた視線がキリに集まる。

「そうか……貴方も妹に苦勞しているのね」

リズだけがキリに対して深く同情の意を表した。

「……？」

リンはよくわかっていないようだった。

「悪い子では無いんです……」

「ま、実際に会えたらすぐ解決する事だ。迎えに行った方がいいかもしれないな」

「出発した時間から見て、今日の午前には着いていると思うですから、街を探せば……」

ふと、何か異音がしたような気がした。

「外が、騒がしいな」

二日酔いに頭を痛ませているクランクが外の喧騒に気がつく。

それは段々と大きくなり……。

「極悪ギルド、リアーリスに告ぐ！！ 速やかにお姉ちゃんを返すんだよ　！！」

大音量の声で叫ばれた少女の声が響き渡る。

「こ、この声は……」

キリが立ちあがり、外に向かって駆けだす。

全員がそれに続き、外へと辿り着いた先で見たものは……。

「現れたね！！人質を速やかに解放するんだよ　！！」

キリをそのまま縮小した感じの少女が、拡声器を持って叫んでいた。

「ちよ……、何だこれ……」

そして少女の周りには何人も人の群れが作られていて、何か良く分からない熱気に包まれ多種多様な野次を飛ばしていた。

「ど、どうなってるんだ……」

この何とも珍妙なデモ集団（？）は一体何なのか。

その原因は遡る事三時間前。一人の少女から、妹から始まった。

「絶対お姉ちゃんを助けるんだよ!!」

公国の入り口で、一人の少女が目的を口にしながら意気込んでいた。

誰が見ても子供と思う小柄な体躯に、長い灰色の髪を二房の三つ編みに纏めている少女の名前はミリ。

リアーリスに属するカーズメーカーであるキリの実妹である。

姉からの手紙をどう解釈したのか、拉致監禁されているものと思い込み単身公国まで乗り込んで来たのだが……。

「分かっているのはリアーリスって名前だけ……。まずは情報収集だよ」

そう言っただけ歩き出すが、もし今ミリがいる場所がリアーリスの良く行く地域ならば良かったものの、そこは彼らがほとんど立ち入った事のない場所だった。

そして更なる不幸は、ミリが最初に会った人物だ。

「とりあえず適当に……あ、その人!!ちよつと聞きたい事があるんだよっ」

ミリが声をかけたのはあるうことか偶然散歩に出ていたアーテリ

ンデであった。

三層で足止めをする必要が無くなったので、街にいる時間が増えたとはいえ、このタイミングで彼女達が鉢合わせするのは何の陰謀あつてのことだろうか。

「リアーリス？」

アーテリンデはぴくりと眉を震わせる。

アーテリンデとリアーリスとはほぼ解決したとはいえ、浅からぬ因縁がある。

彼女もよもやこんな所でその名を聞くとは思わなかっただろう。

「私のお姉ちゃんががそういう悪の組織に捕まつてるんです！！」

ミリの言葉を聞き、アーテリンデは即座に事情を察した。

ミリの容姿がキリにとても似ていた事。見ず知らずの人間にも突撃するかのようには話しかけてくる性格。

つまりはただの勘違い。そう理解しておいてアーテリンデは言う。

「そう、貴方もなの。私もリアーリスには大切な人を奪われて……」
ひどい話だ。

「や、やっぱり……。早くお姉ちゃんを助けないと……」

ミリの勘違いは加速していく。

アーテリンデはその様子を面白げに眺めた後、更に付け加えた。

「ここに行ってみなさい。そしてリアーリスについてもっとよくわかるわ」

紙にさらつと地図を描いて手渡す。

ミリはそれを受け取るとお礼を言つて駆けていった。

一人残ったアーテリンデは物憂げな表情をしながら一人呟いた。

「憂さ晴らし出来るのも……少しは心が前を向いてる証拠よね……」
彼女はまだ、心の整理が完了してはいないようだった。

「何イ！？リアーリスだと！？」

ミリはアーテリンデから渡された地図に記された場所……冒険者が集まる酒場にいた。

早速店主と思われる大柄の男にリアーリスについて尋ねた所、威嚇するような声を出され、ミリは少し後ずさってしまふ。

「リアーリスなあ、完全にノーマークだったぜ。気づいたら街中の注目かつさらいやがって。おかげであの野郎の店に客が集中してこちとら商売あがったりだぜ、全く」

どうやら店主はリアーリスについて良く思っていないようだった。それがわかったミリは表情を明るくし、自分の思いのたけを話す。

「営業妨害！！リアーリスはそんな悪事も働いてるといふ事実が判明したんだよ！！私のお姉ちゃんもリアーリスに捕まってるの！！」
店の中がざわつく。

不幸中の不幸な事に、この店に集まる冒険者達はリアーリスに対して否定的な感情を持っている者たちばかりだった。

「そうか、俺が彼女に振られたのもあいつらのせいかっ！！」

「給料減らされたのも……」

「元凶は……」

店内は段々とヒートアップしていき、よもや全く関係ないものまでリアーリスのせいにされていく。

やれ財布を落としただの、やれ足の小指をぶつけただの。

ミリは店内の興奮度におされるも、ぐっと堪え自分の目的を果たすために声を上げた。

「皆でリアーリスに一泡吹かせに行くんだよっ！！」

おおおーっと冷めぬ興奮そのままに数十の人間が塊となって移動を開始する。

目的地は、リアーリスの住まう場所。

「人質を速やかに解放するんだよ　　！！」

何とも頭の痛くなる風景がそこには広がっていた。

不思議な熱狂に包まれた群衆、その中心に立ち拡声器片手に叫んでいる少女がどうやら件の妹であると一瞬で理解する。

「これはまた……随分と」

集めたものだな、と感心する。

何を目的に集まってきているのかはさっぱり分からないが。

「どうする？」

「いや……どうするもなにも」

当然の帰結ではあるが、真昼間にこれだけの大人数が一か所に集まり、さらには拡声器で大声をあげていたら嫌でも目立つ。

それを長時間放っておかれるわけもなく、大公宮からやってきた衛士達が集まった人達を取り囲み、解散を促しはじめた。

初めからただの悪ノリで集まってきていただけあって、衛士に特に逆らわずに帰っていく。

時間にしておよそ三十分にも満たないうちに、少女による一世一代のデモ行動は終了を迎えた。

「あれ？え、あれえ？」

自分の周りにいた人らが次々と減っていく様子に戸惑いを隠せないミリ。

彼女もまた衛士に問い詰められようとしていた所にキリが割って入り、何とか衛士を説得する。

「お、お姉ちゃん！！」

何だかよくわかっていないがとりあえず姉が自由になったと感じたミリは喜びの声をあげるが……。

どこからともなくハリセンを取り出したキリは、大きく振りかぶってミリに鋭い一撃をみまう。

小気味良い乾いた音が響く。

「じ、じ、この……」

ハリセンを握った手を震わせながらキリは叫ぶ。
「この大馬鹿者——！！」

「なんだあ。私てつきりお姉ちゃんを無理やり働かせてるのかと思
つてただよ」

結末はあっさり。

結局事情を話した途端ころりと態度を変え、笑顔を振りまいて
いた。

「どうしてそう思うです……」

キリは自分の書いた文面をいくら思い出してもそういう風にとれ
る描写はしていないはずであった。

今回の事は、純粹にミリの姉を想う気持ちと少し曲がった素直
さが妙な化学反応を起こした結果……という事なのだろう。

「まあ……、これで分かったはずですよ。大人しく父様達の所に帰
ります」

「ほへ？暫く帰るつもりは無いんだよ。お姉ちゃん連れて帰るまで
帰ってくるなって父様に言われたし」

「え？」

キリは何か引掛かり、落ち着いて考えを整理する。

「ねえミリ。私が出した手紙、直に読んだです？」

「ううん。父様から内容を聞いたただだよ」

……。

……。

……。

「全部父様のせいですか——！！」

十六階：美しさに惑いし足を掬うは桃色の果実

お騒がせな妹による事件から数日後、リアーリスは再び迷宮の攻略へと乗り出していた。

案外あの事件は彼らの気持ち切り替える良い切っ掛けになったのかもしれない。歯止めがつかなくなりつつあった毎夜の宴会はその会場をその妹自身に占拠されてしまっていたのだった。

「私だつてタダで居させてもらおうなんて思つてないんだよ。ちゃんと自分の食費くらいは自分で稼げるもん」

と、言つて見つけて来た仕事が酒場の給仕であつた。

ただ……見るからに少女なミリを酒場の給仕として働かせるのはいささか問題があるのではないだろうか。

そう店主に尋ねて見たのだが、言葉尻を濁らせてごまかすばかりであつた。

「何だか危ない心配がするです……」

不安を募らせるキリは、万が一の際自らの身を守るようにと、空いた時間があればミリの指導をしている。

キリに比べたらまだまだ未熟の一言だが、キリの持つ才をミリも持つているようでこの分ならばそう遠くない未来、共に迷宮へと踏み入る事があるかもしれない。

何はともあれ、リアーリスは再び空を飛ぶ城を目指し歩き始めた。

第四層『桜ノ立橋』

命全てが雪の下に埋まっていた三層と打つて変わつて、桃色の花弁を咲かす樹木に囲まれた美しい光景が広がっていた。

その陽気は春真つ盛り。景観も合わさつて酒盛りを開いたらさ

ぞ盛り上がるだろう。

もちろん、ここが迷宮で、魔物に溢れた場所ではなかったらの話だが。

「私の国に咲いていた桜に良く似ているな……。それで桜ノ……。か」
サクは舞い散る花弁に故郷を想起されるのか物憂げな表情を浮かべていた。

「これほどに美しい花は今まで見た事がないな。まるで愛を視覚しているようだ」

クランクもその美しさに酔い、いつもの事ではあるがよくわからない自論を展開していた。

ただ目を奪われていたのは二人だけではない。

フォンも、ミルリアも、ソニンも目の前の桜吹雪には見蕩れる他なかった。

これまで幾度と無く目を奪われる景色に出会ってきた。ただ今回は見渡す限りの、どこをどう歩いても変わらず存在しているその景色に心は浮き立つばかりだ。

しかしそこは樹海の迷宮。突如美しさを切り裂くように巨大な蜂の群れが飛び出してきた。

魔物の奇襲を受けた時、美しい景色は獲物を捕食するための罠に成り変わる。

まんまとその罠にかかっていた君達は一瞬にして致命的な隙を相手に与えてしまう。

「ぐっ」
凶悪さをそのまま形にしたかのような針で数か所を刺されてしま

う。
毒を連想されるその攻撃に、顔を引きつらせる。

予想通り針に染み込んでいた毒は、サクとミルリアから体の自由を奪い去って行った。

膝を折る二人の側にソニンが駆け寄る。麻痺毒の治療は彼女に任せておけば問題は無い。

「クランクー！」

「了解した」

フォンの叫びと同時にクランクが術式の展開を始める。

その手に凶悪なまでの熱量が集束していき、近づくだけで奴ら、虫程度の羽ならば融かしつくしてしまいそうだ。

その熱量はそのまま恐怖として蜂共に伝わり、ターゲットを一斉にクランクへと集める。

だがそれをフォンは許さず、術式が完成するまでの時間クランクへと近づけるモノは一つたりとて無かった。

「術式開放、大爆炎！！」

放たれる煉獄の炎。群がる蜂を一片残さず灰塵と化していった。

「これでもう大丈夫だと思います」

戦闘が終わり、麻痺毒の治療を受けたサクとミルリアは腕を回し、思い通りに動かせるかを確認する。

「油断したな……。この程度の被害で済んだのは幸運だったかもしれない」

刀を軽く振り、最終確認を済ませながら安堵と、自らを戒める声を出す。

確かにその通りだ。今回は麻痺毒を受けていたのが二人だけだったから良かったものを、これが全員やられていたらどうなっていたかは容易に想像がつく。

「気を引き締めていこう。例えどれだけ綺麗だとしても、ここは樹海。今まで通り……。いや、今まで以上に一瞬の油断が命取りになる」
フォンの言葉に全員が頷く。立ちあがった時には既に声を潜め、気配を殺し、あらゆる感覚を鋭敏にした一流の冒険者の姿があった。
「……………！？」

そして気づく。恐らくはずっと感じていたはずの。気付こうとし

て、初めて気付く事ができた一つの視線。

「上か!？」

全員が一斉に上へと視線を向けた。

「全能為る又ウフは我らに如何なる行を定めるのか……」

人の声に、一瞬他の冒険者かと思うが違う。

声の主は翼を生やした亜人種……少なくともこの場にいる全員が見た事のない不思議な亜人種だった。

どうやらこちらを伺っているようだが、襲ってくる様子は見受けられない。

「父為るイシユ、母為るイシャよ。この土の民に、新たな生命の祝福を」

その亜人は、そう大声で叫ぶと翼を広げて飛び去っていく。

「何だったんだ……今のは」

「追いかけるか？」

「や、やめたほうがいいよ……」

確かに今の亜人の事は気になるが、まだ踏破しえぬ場所での深追いは足を掬われて終わるのがオチだ。

それでも好奇心を優先するのは君達の自由だ。だが、その代償とで天秤にかけ判断するのなら結論は一つだ。

「ここを安全に抜けるのが最優先事項だ。今は、放っておこう」
その言葉を否定する者は誰もいなかった。

一六階の探索は順調に完了していった。

途中、気紛れに後ろを振り返るFOEに惑わされつつも躲し、いつ何時襲われても奇襲とされないよう警戒で一種の壁を作りながら確実に歩みを進めていく。

現れる魔物達は幸いにもこれまでの延長のようなものであり、不意を突かれさえしなければ大きな問題はない。

迷宮に入りたての頃からは想像もつかないほど君達の動きは素晴らしい物となっていた。

「少し、休憩するか」

その判断一つとっても違いは歴然だ。

全員の疲労、周りの安全度、現在の時間。様々な要素から最高のタイミングでの休息を取る。

ささいなミスが重大な事故に繋がるこの迷宮で生きて来たからこそ身についた技術だ。

「それにしても、さっきのは何だったんだろう」

羽を生やした亜人。これまで迷宮で様々な生き物を見て来たが、人に出会ったのは始めてだ。

もちろん、同じ冒険者となら何度も出会ったが、恐らくあの亜人は迷宮に住んでいる……そう言った意味では初の人だ。

確かにこれだけ広大で、自然に溢れているのなら村や集落があってもおかしくは無い。

魔物の存在でその考えに至らなかつたし、事実作ろうと思っても無理に思える。

「もしかしたら空飛ぶ城について関係があるのかもしれない」

ここは既に一六階。それがこの迷宮のどこに位置しているのかは知らないが、かなり上まできているのは確かだ。

襲いかかる障害もこれからどんどん厳しくなっていくだろう。

あの亜人がその障害になるかどうかはわからないが、気に留めておくに越した事はないだろう。

「考えても仕方があるまい。それよりもほら、桃がなっていたぞ」
いつの間にか克蘭クが腕に桃色の果実を抱えていた。

「おー。すっごい甘そうー」

ミルリアが食い付き、克蘭クから一つ渡される。

確かに見た目だけで甘さを連想させるほどに調度良く熟したそれは魅力的な果実に見えた。

全員に一つずつ行き渡り、休憩中のデザートだと喜び口にした。

だが、君達は忘れてはいないだろうか。

先程、見た目の美しさに惑わされ痛い目を見た事を。

「ふぐつ」

「ぬ、うう」

「……………え」

「ぐふえ……………」

「オウフ……………」

十六階：美しさに惑いし足を掬うは桃色の果実（後書き）

9/27日開催の世界樹の迷宮オンラインイベント「幻想の樹海4」
に小説本を出します。

スペースは「世17」

サークル名は「みつくばつぐ」です！

こんな所で宣伝してもいいのだろうか。

気にしないでおこっ！

十七・十八階：穴と南瓜に散るは花か人の仔か

「何だ、もう次の階か」

桃色の罨のダメージから回復し、後日迷宮探索を再開したリアーリスだったが、若干拍子抜けしていた。

十七階に辿りついてまだほんの少ししか歩いていないのに、上へ行く階段を見つけたのだった。

どこか腑に落ちない感じはするものの、そこに階段があるのだから仕方が無い。まだまだ時間にも余裕がある。十八階も探索してしまおうと一行は階段を上っていく。

「それにしても、翼持つ者ねえ。公国の文献にまで記述があるなんて、こりゃ空飛ぶ城も現実味を帯びてくるってものだね」

ミネラが興奮した面持ちで話す。

十六階で見た翼を生やした亜人。その事を公国に報告すると、それに関する話を聞く事が出来た。

「我らに天への帰り道を開け……か。どういう意味なのだろうか」

その際に告げられた内容で最も重要な言葉。それを復唱しつつ、サクはその意味する所を考えていた。

「その翼持つ者というのと話をする機会があれば、答えは得られるはず。今は目の前の事に集中しなさい」

リズはいつもと変わらず厳しい表情で、銃を構えつつ忠告する。

「どんな罨があるかわかりませんがね」

ソニンも周りを警戒しながら言う。

四階層へと到着してから、大なり小なり怪我をする機会が増えて来た。

それを一番実感しているソニンは、未知への好奇心より恐怖や不安と言ったものの方が大きいようだ。

そうして、様々な思いを抱えつつリアーリスは十八階へと到達する。

「ここもすぐ次の道が見つかればいいんだけどな」

フォンがそんな期待を口にするが、そんな事は無いのだろう。

逆に十七階がすぐに終わってしまった事で、この階がどれほどのものなのか余計な不安に駆られてしまう。

「毎度の事だが、慎重に行くぞ」

細心の警戒を払って探索を進めていく。

景色にはもう惑わされる事は無く、現れる敵も問題無く対処していく。

道をゆつくりと進む真紅のFOEも部屋に隠れてやりすごし、そのルートから外れた所で一息ついていた。

「流石にあれとは戦いたくないな……」

リズは否応無しに流れる冷たい汗をぬぐう。

歩くルートを見極め、絶対に見つからない自信をもってしても安心する事ができない。

通常のFOEならば、その場での対処でどうにかなる場合も多いが、あの色をしたFOEは最初から倒すという目的をもって挑まないと歯が立たない。

「いずれ倒してやりたいと思う相手ではあるがな」

サクは刀をギリツと握りながら楽しそうに笑う。

「やるなら一人でやってくれよ……」

「何を言う。フォンの守りが無ければ私は思うように動けぬ。剣と盾は常に対になってなければならぬと思うが、私は剣にしかたないからな。お前は私の盾になってもらわねば困る」

「それは俺が盾にしなければならないってことかい……」

そう悪ぶれるフォンだが、真っ直ぐにそう言われて悪い気はしていなかった。

元より誰かの盾になれる事はパラディンとして本懐でもある。

「剣と盾は対にあるべきっ」

突然ミネラが声色を変えて喋りだした。

「私の盾になって下さいなんて……サクったらこんな所で大胆っ」

「「なっ」」

ミネラの曲解に、剣と盾両方が赤面し慌てふためく。

「わ、私は別にそんなつもりで言ったわけで……は、」

恥ずかしさからか、皆に背を向けて歩きだすサクの足が一際花卉が敷きつまつた場所に入った瞬間、ガクツとサクの体が崩れる。

「サク!？」

花卉に隠されていたのは落とし穴。咄嗟に飛び出したフォンが、サクの腕を掴むが花卉が潤滑剤の代わりを果たしたのか、二人とも穴の奥へと消えていった。

「……………」

落下の衝撃は幸いにも大した事が無かった。

どうやら積もった花卉がクツションの役割を果たしていたようだ。

落ちた原因に救われるのは皮肉な話だが。

「サク、大丈夫か？」

無我夢中だったのか記憶には無いが、どうやらサクの下敷きとなり守る事に成功していたようだ。

ただ、硬い鎧と柔らかい花卉の上では逆効果になってしまった可能性もあるかもしれない。

「ん……、痛っ」

目を覚ましたサクが足の痛みで顔を歪めた。

どうやら軽くひねったようだ。大した事はなさそうだが、走るのは無理そうに見える。

「悪い。庇ったのがどうやら逆効果だったみたいだ」

「いや……、もともとは私のミスだ。それに、守ってもらった事に

大して文句なんて言えるわけがないだろう」

強気に笑うサクを見て、フォンは安堵のため息をついた。

「二人ともー！無事かー！？」

上からリズの声が聞こえ見上げる。

天井は不気味な闇に包まれていて皆の姿は確認できないが、声は届くようだ。

「多少傷は負ったが無事だ」

「どうする？私達もそちらに降りようか？」

そうだな、と言いかけてふと違和感を感じ思いとどまる。

懐から地図を取り出し、十八階の落ちた地点から大体の位置を掴もうとするが、該当する十七階の地点は地図に記されていないかった。

「……閉じ込められたか？」

胸によぎる不安を散らしながらフォンは即座に判断を下す。

「いや、別行動にしよう。俺達が落ちた大体の場所はわかるな？そこはそっちでこちらに通じる抜け道が無いか探してみてください。こっちはこっちで道を探す」

「……わかった。抜け道は無くとも近づけは会話くらいはできるはずだ。そこで経過報告でいい？」

「ああ。お互い気を付けて行こう」

会話はそれで終了した。十八階にいる仲間達は既に行動を開始しているだろう。

「全く……貴方は……」

サクが呆れたといった風に呟く。

「今度こそ、悪いな。もし、抜け道が無くてここから出られないような事になったら……」

フォンはうーん、と唸りながら言葉を選ぶ。

「俺と一緒にここに住むか」

「馬鹿」

もう一度呆れたといった風に、しかし今度は笑みを浮かばせなが

ら眩いた。

「っ痛」

「無理するなよ。ほれ、乗っかれって」

サクに背を向けてしゃがみこむ。

若干抵抗を覚えながらも、素直にフォンの背中中に体を預けた。

「さあーて。出来るだけ地図に記されてる所に近づくように歩くか」

サクをおぶり、先へと進み始める。

「お、重くないか？」

恥ずかしそうに尋ねてくるサクのいつもと違う女の子らしい物言いに、軽く吹き出してしまふ。

「わ、笑うなっ」

「いや、悪い悪い。……ん、全然大丈夫だ。強いて言うなら背中に当たる感触が物足りなさ過ぎる事か」

「……後で覚えておけよ」

「ああ、覚えておくよ」

そんなやりとりをしながら少しずつ歩を進めていく。

会話はそれ以来めつきりと途絶えたが、空気は悪くなく、むしろ心地よさすら感じられた。

「敵と遭遇したら全力で逃げるからな。油断せずにしっかりつかまってるよ」

「わかってる」

肩にかかる重さが少し大きくなる。

その重さに、パラディンとして、男として力が沸いてくるような気がしていた。

だが、その時既に二人の後ろには恐怖が迫っていた。

「なあ、フォン」

「なんだ、サク」

「いつのまにか、後ろにカボチャらしきものが見えるんだが」

「奇遇だな。俺もそんな気がしていた」

確認のため、もう一度恐る恐る振り返る。

そこにいたのは、以前二階層で見かけた気配のないFOEに似た、カボチャが忽然と立っていた。

「掴まれ!!」

返事を待たずしてフォンは一気に走りだす。

全力を込めた逃走。一気にFOEと距離を取るが、どうやら完全にごちらを追尾しているようだ。

距離を離しても、同じ距離を詰められる。そして一分にも満たないイタチごっこの末、行き止まりへと誘い込まれてしまう。

「ちい……。やはりあの落とし穴は罠か！」

獲物を誘いこみ、閉鎖した空間の中でじつくりと料理されていく地獄の釜。

「……………どうする」

「どうするもこうするも……………」

カボチャはじりじりと迫ってくる。

恐らく気配の無い性質と一緒に物理に対する耐性も二階層にいたのと同じであろう。

何の準備もない今、向かった所で勝ち目はあるまい。

「……………フォン!!壁を見る!!」

サクの声に反応し、背後に視線を向ける。

そこには他の壁には無い特殊な紋様が記されていた。

「もしかしたら抜け道かもしれない!!」

「かもしれないって、そんな調べてる余裕は……………なくともやるしかないか」

カボチャに背を向け再び走り出す。

目指すは壁の紋様。追いつかれれば死、意味のない紋様だったら死、抜け道だとしても何かしらの手順が必要ならば死。

あまりの分の悪さに泣きたくなりそうだが、そんな悪い賭けを今までだって散々してきた。

そしてその全てを勝ってきた!!

すべてを紋様に賭け、掴むように手を伸ばす。

「うわあ！！びっくりした……」

そして仲間の声に勝ちを確信したのだった。

「フォン！サク！無事だったか」

上に残してきた仲間が目の前に揃っていた。

どうやら抜けた先をちょうど歩いていたらようだ。

「だあ、はあ……。なんとか生き延びた……」

一気に力が抜け、サクを地面に落してしまふ。

「ちょおあつ!?!」

その姿がどこか間抜けで、仲間たちから笑いが零れる。

「あ、悪い……。まあ、何だ。とりあえず街に戻ろう。……この事、何となく掴めた気がする。作戦を立てなおして出直そう」

その言葉に反対する者はおらず、帰る道を歩き始めた。

十七・十八階：穴と南瓜に散るは花か人の仔か（後書き）

9 / 26

ああ、いよいよ「幻想の樹海」が明日に迫っています。

今から結構緊張してるとか、実際に始まったらどうなる事やら。

とにかく・・・、幻想の樹海にてカースメーカー小説本を出す予定です。

タイトルは「とあるカスメの病毒呪言」こっちに掲載させてるのと同じタイトルです。

もちろん内容の大筋も同じです。が、イベント用に大分加筆修正……というより8割は別物になってます。

こちらを既に読んでいる方にも、読んでない方にも楽しめるようにと書いてみたので、イベントに参加する予定のある方は立ち寄って下さるととても嬉しいです。

十九階：天空に住まう鳥は石の奇跡

「じゃあこらああああっ!!」

都合五度。一八階から一七階へと落ちる穴を通り、カボチャに追われ、脱出し、また一八階へと戻り、落ち、追われ……。

そうしてやっとの思いで次の階へと登る階段へと辿り着いた瞬間に、勝利の雄叫びをあげた。

「中々スリリングな旅だった……」

落とし穴を使って次へと進む必要があると睨んだフォンは、男手として克蘭クを、そしてリン、リリック、ミルリアと身軽なメンバーを揃え挑んだのだが。

「克蘭ク役立たずだなー」

「うぬう」

リンの容赦のない一言が克蘭クを突き刺した。

何せ一番最初にへばってしてしまうものだから呆れて物が言えない。

「体力無いならそう言えばいいのに。ボクはまだ全然余裕だよ」

「そ、それは男としてのプライドがだな……」

「それ以上の物を今ここで失ったネ」

リリックの言葉を最後にバタンと倒れてしまう。

どうしたものか、と思索していると何者かの気配が、一つでは無く複数近づいてくる。

その一つが君達の前に降り立った。

「お前は……」

一六階で見かけた亜人、翼持つ者だ。

「土の民よ。ここから先は我らが大地。如何なる理由にて先に進まんとするか？」

高圧的に言葉を続ける。何か返さねば、と頭を巡らせある事を思い出す。

それは大公宮で聞いた翼持つ者と関係がありそうなあの言葉だ。

天空の城へと辿り着きたければ、翼持つ者の力を借りよ。必要な言葉は一つ。

「……汝らは全能為るヌウフの下、諸王の聖杯を使う資格がないよ
うだ」

黙っているのを何も言う事が無いと取った翼持つ者は、君達を突き放すように言う。

「待った!!」

すかさずそれを引き止め、大公宮で教えてもらった言葉を……言葉を……。

(……忘れた!!)

何も言わずに立つ君たちに翼持つ者は冷たく言い放つ。

「立ち去れ、土の民よ。汝には汝の道がある」

……どうやら、言葉を言わなければ先に進ませてもらえないようだ。

一度戻り、言葉を確認する必要がある。

「……太古の盟約に基づき上帝の言葉を告げる。我らに天への帰り道を開け!!」

再び一八階。クランクに代わり、ソニンをパーティに加え今度は忘れずにメモしてきた言葉を翼持つ者に伝えた。

明らかにまた来たのかよといった顔をしていた翼持つ者が、その表情を一変させる。

「古き盟約の言葉を持つ者は現れた!天より土に帰りし者が今また天へと戻るのか?」

その意味の分からない言葉を発しながら、翼持つ者は飛び去っていく。

見張るように隠れていた複数の気配もそれとともに消え去った。どうやら、その先に進む事を許されたようである。

「ふおっ！？なんだこりゃあ」

一九階へと到達した瞬間、今までと全く違う様子に驚きの声を上げる。

部屋を遮る壁が無く、下をのぞけばそこには雲が見える。

「ここが空飛ぶ城……？というわけじゃなさそうですね」

どうみても飛んでいるのは城じゃなくただの床である。

それにしても、これまでで結構上まで登ってきたと思っていたが、よもや空に到達しているとは思ってもよらなかった。

「これはもう本当に本当に空飛ぶ城は実在しそうだな。そもそもこの時点で空を飛んでいるようなものだ」

胸の内から溢れる好奇心は、更なる高みへと誘う。

気合十分に、一九階の攻略を進めようとするが……、
「どうやって、進むんだ？」

視界を一週ぐるっと見渡すだけで、今自分達が立っている場所がどのような所か把握できる狭さで、別の場所へと続く道を見つけれない。

「ここだけ黄色いですね」

不自然に飛び出た黄色い足場。

「ここに乗ればいいのか？」

だが、畏という可能性もある。

「まあ、乗ってみればいいんじゃないかな」

そしてここはもう一九階。一瞬の油断でどうなるかわかったものではない。

「ボクも乗るー！」

途中で落ちたり、向かった先は魔物の巣だったりと悪く予想すればきりが無く、そのどれもただの想像と笑っていられない。

「私が一番乗りっ」

ブーン。

「オイ」

おてんば娘三人衆が競って黄色い足場に飛び乗り、案の定動き出し三人を別の場所へと運んでいく。

「いつちやいましたね……」

「全く、あいつらは……」

幸いにも移動したブロックはこちらへと戻ってきたので、急いで三人を追いかける。

「……はあ」

案の定、その先には見事な石像が三体立っていた。

「ぶはーっ、びっくりした」

ソニンにより石化から回復した三人は、揃ってびっくりしたーと、笑いあう。

「で、何があったんだ……」

あまりの緊張感の無さに調子を狂わせつつ、事情を聞く。

「ついた矢先にFOEがいてさー、隠れようと思ったけど見つかったちゃって」

「しっこかったよねー。仕方なく戦おうと思ったんだけど」

「石にされちゃったヨ」

「ヨ、じゃねえって……。というより、まだ近くにFOEがいるってことか……?」

慌てて周りを見渡すが、それらしい影は見つからない。

「もうちよつと先に行けば見えるよー。でもすぐこっちに気付くから行かないほうがいいよ」

「お前たちじゃあるまいし……って、勝手に移動したあげく待機もしてなかったのか!」

はあ、と溜息をつかざるを得なかった。

未踏の地に行く時は、このメンバーでは駄目だと思い知った瞬間である。

「そうそう、ボク石化して思ったんだけど」

そう切り出すミルリアに、どこか重要そうな色を感じ耳を傾ける。「石化してる間に少しコリコリってやれば、お腹とかの余分なお肉がとれるんじゃないかな……」

そんなことはなかった。

「その手が……」

「労せずに……」

「革命的だネ……」

「医学界に激震が……」

「いやいやいやいや、ソニンまで何を」

「はっ……。そ、そうですね！石化中に削ったりなんかしたら、実際に削れるだけですよ！中身みえちゃいますよ！」

「それはちよつと痛そうだネ……」

「フォンはたまに思う。」

よくこのメンツで、今まで生きてこれたな……と。

その後の探索で、今までに類を見ないタイプの一九階についても色々と把握し始めてきた。

「どうやら、一方のみの移動床と、両方向に対応した物があるようだな」

どちらのタイプも人を感じしているのか、側によれば現れるが、一方のみの場合どちらか側にしか反応してくれないようだ。

「にしてもこう、変な移動ばかりされると、マッピングがしづらいなあ」

ミルリアが地図を片手にうなる。床に乗ってどれくらいの距離を動いたかは、目算でしかないのでマッピングが難しい。

「石化は危険だ！ ソニンで手が回りそうになかったらリリックはその補助に回ってくれ！」

「了解だヨ！」

石化にしてくる鳥のようなFOEに関しても、石化にさえ気を付ければ大して強いというほどでは無く、五人揃って叩けば問題は無かった。

しかし……。

「酔った……」

たび重なる移動床に、フォンがダウンしてしまった！

「情けないなー」

「あっはっはっ」

「修業が足りないネ」

散々言われるが、実際にダウンしているせいで何も言い返せない。

言葉と一緒に何か出てきそうな気がする。

「大丈夫ですか……？ 酔いは……、ちょっと治す方法が無いんです……。 すいません」

大丈夫、大丈夫と手だけで伝えようとする、がその動作だけでも結構辛そうだ。

「酔いを治す方法って言ったたら一つしかないよ」

リンがおもむろに床の切れ目を指さす。

「吐いちまえよ……、楽になるぜ……みたいな」

背に腹は代えられない……と、這いずりながら床の先まで進み……。

自主規制

「よし！ようやく階段へと辿り着いたぞ！」
無事、一九階を踏破したのであった。

その後暫く、一八階には××が降ってくる罠があるという噂が
まことしやかに流れたという。

二十階：聖も邪にまみれる果て無き歌声

リアーリスの前に現れた翼持つ者。彼の名はクアナンという。

その日、その時の出来事をクアナンはこう語る。

「我らは今まで何を畏れてきたのだろうか。目の前に忽然として存在する畏れは真の畏れなのだろうか。いや、我らは知ってしまったのだ。真の畏れとは目に見えぬものなのだ。予想外、正体不明、底が知れない。そういう類いの物が何よりも畏ろしい」
そうして彼は思い出す。

いにしへの飾りを携えて現れた、新たな畏れの事を。

「いにしへの飾りは持って来たのか？」

クアナンはリアーリスに向けそう告げる。

その質問をしたのは二度目だ。いにしへの飾りを持たぬリアーリスを一度追い返し、再び現れた彼らに再び同じ質問を繰り返す。

「ああ、これだろうか？」

フォンは剣の紋が入った飾りを手渡す。

飾りの事を尋ねに大公宮へと戻り、公女にそれまでの経緯を話すとおつさりとそれと思わしき物を授けてくれた。

恐らくそれは公国にとってかなり貴重なものであるはずである。それを迷いなく与えると言う事は、それ相応の期待をかけていると言う事。

フォンと共に立つサク、リズ、リリック、ソニンもその期待の重さを感じてか、クアナンから視線を外さない。

「盟約の言葉に続き、いにしへの飾りまでも、か。全能なるヌウフ

よ。彼らは確かに……、我らが待った者たちかもしれない！」

クアナーンは興奮した声を上げ、君達に名を尋ねる。

リアーリスと、力強い返答に「確かに覚えたぞ」と大きくうなづいた。

「これから私達はどうすればいい？」

そう尋ねる声は若干上ずっている。

ついに天空の城へと辿りつくかもしれないという興奮のせいだ。「我らは汝らに天の道を示すのが使命である。だが、覚悟はできているか？ 険しい天の道を歩く覚悟は」

迷いなく頷く。

今まで幾度となく険しい道のりを越えてきた。

今度だつて越えられるに違いない。

「天への道は、この先にある。だが天空の女王がそれを塞いでいる。突如現れた天空の女王、あの魔鳥に我らは多くの犠牲を出し、聖地さえも奪われた。女王さえ退ける事が出来れば、天はすぐそこだ。汝らが天へと辿り着く時、我らも聖地を取り返す事が出来る……期待しているぞ」

クアナーンはニヤリと笑う。

「天空の女王は、美しい声で惑わしてくる。歌声に十分注意して戦うことだな」

そうしてクアナーンは静かにリアーリスへと祈りを捧げた。

……が。

「惑わす歌声……ね。ククククク」

祈りのために閉じていた瞳を何事かと開けてみれば、先程と同一人物とは思えないほど濁ったオーラを放っていた。

「お、おい。どうしたんだ？」

戸惑うフォンを除く四名が、揃いもそろって不敵な笑いに不気味なオーラを出している。

「その女王つてのも運が悪かったネ……」

リリックは低く、唸るように声を出す。

「そんなものに惑わされたりはしないネ……」

ククククとどこまでも低く響く笑いを出す四人、そして一人はずんずんと奥へと進んでいった……。

「一体、何だと言うのだ？」

クアナーンも、何かと思いきっそりと後を追った。

そして……それは始まった。

「クアアアアツー！」

天空の女王がどこまでも響く美声で歌う。

聞いた者の神経を侵し、正気を失わせる声は……。

「……耐邪の鎮魂歌ッ」

リリックのさらに響く歌声に掻き消されていた。

「私達を惑わそうだななんて、随分と安く見られたものです」

「天空の女王……か。これではこの先の城もたかが知れている……」

「どうやら、私が動く必要もなさそうですね」

リアーリスは、未だに鹿の一件がトラウマ……いや、これはもう反転して何か黒い別の物になっているとしか思えない。

「一体、皆どうしたっていうんだ……」

鹿と並んで元凶たるフォンは、何も知らない。

さあ、料理の時間だ。

「女王うまいなー」

天へと続く道を目の前にして、リアーリス一行は食事をしていく。

内容は、平たく言ってしまうえば焼き鳥である。

「筋張ってる部分は固くて美味しくないかと思いましたが、長く生きてるせいでしょうかね、普通の鳥では考えられないくらい美味しいです」

「私もこれは料理しがいがあるというものだ。こんな至高の材料はまたいつ出会えるかわからないからな」

宴会はリアーリス全員が招集をかけられていた。

樹海で宴会など狂気の沙汰に思えるが、この辺りは女王の縄張りだったせいか他の魔物の気配が全くない。

「ミリにもお土産包んでおかないとです」

たっぷり脂がのっている皮が、パリッパリに焼かれ香辛料の香りが食欲を倍増させる。

「くえやー、のめやー」

「ボク達はまだ飲めないよー。でも美味しー」

「ノってきた所で私が一曲歌うネ！」

いいぞー、いいぞーと宴会は更にヒートアップしていく。

その宴会を、遠くでクアナンは震えながら見ていた。

「我らが永い時恐れ続けてきた天空の女王を……食らっている。我は……夢でも見ているのか？ いや……これで聖地が戻ってくるのだ。何も悲観する事はない。……無いはずなのだが」

そうして、クアナンの心に新たな畏れが住みついてしまった。

二十階：聖も邪にまみれる果て無き歌声（後書き）

東方崇敬祭で出す新刊の原稿が終わったので、世界樹更新再開です。
……何度も言うようですが、この小説は自分のプレイを元にして作られています。

ハルピユイア戦があまりに短いのは、そういう事だと思います。

二二階：其に在りて地を流れる古の床

そこは、ハイラガート公国に伝わる伝説の城。

そこは、数多の冒険者が夢見た迷宮の到達点。

そこは、あらゆる苦難を越えた勇者のみが立ち入る事を許される地。

「ついに、ついに辿りついたのか！」

見渡す限り金色の装飾された城に踏み入るリアリス。

今まで何人がここに辿りついたのか定かではないが、公式には自分達が初という事になる。

「胸が、熱くなるです……」

興奮は収まらない。山の頂上にたどり着いた時と同じように、無性に走りだしたり大声をあげたりしたくなる衝動に駆られるが、なんとか抑える。

「顔がにやけてますよ、サクさん」

「そういうソニンこそ」

どう我慢しても笑いが顔に現れてしまう。無理に我慢するせいで怪しいニヤケ顔になってしまうのも今は気にならない。

「どこを見ても金金金ばかり。壁でも削って持って帰ればそれだけで小遣いができそうだねえ」

ミネラも一見落ち付いているかのように見せかけて、先程から鞭をいじる手が止まっていけない。

だが、浮かれてばかりはいられない。

君達はまだ辿りついていないのだ。頂点の上にある、最終到達点へ。

景色ががらりと変わり、恐らく魔物達の性質も変わっている事だろう。

あふれる興奮をなんとか落ち付かせ、新たな歴史になるだろう

一步を踏み出し始めた。

『……随分と騒がしいな。天の御座、我が居城に訪れたるは何者か？』

一瞬にして興奮により暖まった体が冷える。

あたりを見回すが人の影も気配もない。

『此処は天の主。オーバーロードたる我が英知を込めて築いた場所。許可なく立ち入ることは許されぬ』

その声は君達の頭上から響いているようだ。

そして君達はハツとする。以前アーテリンデが言っていた天の支配者。この声がそうなのだろうか。

「俺達は地上に伝わるいにしへの盟約に基づき天へとやってきた者だ！」

とにかく不法侵入に思われては厄介だと、どこかずれた思考で応じる。

だがその言葉はあながち間違いではなかったようである。

『そうか、そうか。地の民はいにしへの間違いにようやく気付いたというのか。……いや、そうではあるまいな。汝らの目的は何だ』

目的と聞かれ一瞬考える。

自分達は何のためにここに来たのかと。

その理由は一人一人様々だが、一つその回答にふさわしい単語を思い出し口にする。

「ここに、聖杯はあるのか？」

そう、大公宮から君達に課せられたミッションである聖杯。

その言葉を口にした瞬間、頭上から感じる気配が若干変化した。『聖杯！それが汝らの目的か。諸王の聖杯は確かにここにある。』

だがこれは人を死の運命から救うための物だ、渡す事はできぬ。それでも求めるといふのなら……心してくるが良い。我が居城が汝らの終わりの場所となるであろう』

その言葉を最後に頭上の気配が消えた。

「一体何者なんだい……？ オーバーロードなんて名乗っていたけど」

その疑問に答えられる者はいない。

ただ一つ、オーバーロードの言葉の中に重要な情報が含まれていた。

「聖杯はやはり、公国が思っているような物らしいな」

ハイラガート公国の大公……その病を治すためには聖杯がいると言っていた。

オーバーロードは聖杯の事を人を死の運命から救う物だと言っていた。

表現に若干の違和感を感じるものの聖杯が手に入れば大公が助かるのは確かに思われる。

「よし、皆！ 気合を入れ直していくぞ！」

ウィーンウィーンウィーン

「と、気合を入れたはずなんだが」

ウィーンウィーンウィーン

「え、何？」

ウィーンウィーンウィーン

「いつまでこんな所で遊んでるんだ！」

ウィーンウィーンウィーン……

それは、乗れば勝手に運んでくれる動く床。

他のどの乗り物よりも不思議で楽しい乗り物にキリとソニンは夢中になっていた。

「ま、全くだ。二人とも子供だな」

「そうそう、こんな子供騙しに夢中になるなんて」

「お前たちもあからさまに乗りたそうな表情をするな」

隠してたつもりだろうがモロバレであった。

そしてタチが悪い事に、開き直って二人も動く床で遊び始める。

「……………」
大丈夫なのだろうか。

「そういえばキリ、ミリのほうはどうなんだ？」

「どう……………って、何がです？」

動く床に乗りつつ尋ねる。

今聞くべき事では無いのかもしれないが、何分この階は移動のほとんどが動く床なせいで暇だったのだ。

「もうこっちの生活には慣れたのか……………とか、本当に帰らなくてもいいのか……………とか。そういえば稽古もつけていただろ？ その調子とか」

「んー、心配ないですよ。あの子は色んな意味で順応性高いですから……………。お仕事にも慣れたみたいですし、稽古だって教えた事はすぐ覚えてくれるですから、教え甲斐があります」
妹の話をする時のキリは楽しそうだ。

二人の仲の良さが窺い知れる。

「そのうち、こっちも手伝ってもらえそうだな」

おつかい程度なら、と付け加えて軽く笑う。

キリからも笑いが返ってくるかと思っただが、意外にも何か考え込むような表情をする。

「もし、あの子がここに来たいって言いだしたら、フォンさんがOKを出してもらえますか？ もちろん、あの子の实力を見てですが」

「……………？ そりゃあ、先生であるキリの仕事じゃないのか？」

「私だと鼻屑目で見ちゃうかも知れないですから」

薄く笑うキリは、何か思う所があるらしい。

会話の途切れた二人の間に、動く床の音だけが響いていた。

二二階：禍々しき蛇は通るべき狭き道程

「道を塞いでいた魔竜を倒す」

二十一階を越え、二十二階をも踏破したりアリスだが、街に戻り一休みしている所でフォンがいきなり話をきりだした。

「魔竜……って、あの二十二階の道を塞いでいたFOEの事か？あれは夜行性で、夜には道を開けているから無理に挑む必要は無いと思うが」

いつもとは逆に戦いたがりのサクがその提案に疑問を持った。

避けられる戦いは避けるべきだと、他のメンバーもそう思っていた。

「確かにFOEは倒せば質の良い素材が手に入る事があるけど……正直あえて挑んで得られる見返りは少ないと思うのだけど」

リズの言葉にフォンは首を振る事で答えた。

「これは損得とか、そういうモノじゃない。あえて言うなら確認だ。俺達がどれだけの強さを持っているのかの」

フォンは固く拳を握りしめる。

心に巣くったほんの小さな不安を握りつぶすかのように。

それは二十二階を進んでいたリアリスに向けられた言葉。

二十一階でも聞いたその声、オーバーロードだ。

「土に堕ちた者たちよ。汝らは自然の摂理をどう考える？」

前回と同様に上から響くように聞こえるオーバーロードの声。

君達に問うような内容だが、最初から返答があるとは思っていないのかそのまま言葉を続ける。

「自然の摂理、それは死だ。生きる者みないずれ死す、それがこの世の抗えぬ事実だ。……だが、それに抗い、死から乗り越えら

れるとすればどうだ？ 我はその死から逃れる方を探り長きに渡り研究を続けてきた。汝らも、その為に役立ってもらおうとしよう。生命力あふれる者ほど、相応しき贄となる……」

それだけ言つとオーバードの声は聞こえなくなり、気配も無くなった。

迷宮の真つただ中であつた君達はその時は深く気に留めなかつたのだが……。

「スキュレー……」

ソニンがぼそりつつぶやいた言葉に皆が静まり返る。

オーバードの言葉の中にあつた『贄』という単語。

それに当てはまる……とある人物について心当たりがあつた。

「私達も……その候補に選ばれているという事ですか……」

アーテリンデの話ではスキュレーは迷宮の中で力尽きた後、オーバードにより……変えられたと言つた。

ならば迷宮内で力尽きなればいいという事だが、それは逆に考えれば……。

「向こうから仕掛けてくる、と言つ事が」

クランクの言葉に全員がごくりと息をのむ。

これまでも強大な魔物や恐ろしい罫等命を落とす要素はいくらでもあつた。

だがそれは迷宮に元からあるものであり、自分達がそこへ足を踏み入れただけに過ぎない。

今度の危険は、向こうからやってくる。

「そんな状況だからこそ、避けられる戦いは避けるべきなのかもしれない。しかし自分達の今がどんなものなのかを知るのも大切だと思ふんだ」

自分達の力量を正確に把握する事ができれば、生存率は格段に跳

ね上がる。

「その話、あたしは乗るよ。面白そうじゃん」

ミネラが軽くにやりと笑うと、皆軽く頷いてフォンの提案を受け入れた。

翌朝、迷宮の入り口前にリアーリスのメンバー十名が勢ぞろいしていた。

とはいえ十人で魔竜に挑むのではなく、二パーティに分かれてそれぞれ別の魔竜と戦う。

お互いに撃破後、あらかじめきめてある地点で合流し脱出するという流れになっている。

「サク、そっちはお前に任せた」

フォンと共に行動するのはミネラ、キリ、ミルリア、ソニン。

「ああ、任された。……フォンがいないのはいささか不安だが」

サクと共に行動するのはリン、リズ、リリック、クランク。

作戦や道具の確認を済ませ、迷宮へと入っていく。

二十二階

すでに二つのパーティは別れ魔竜のいる地点へとそれぞれ辿りついていた。

「俺達は守りに重点を置きつつ攻める！ キリは出来る限りヤツ

の能力を封じる！ ミネラは部位縛りを狙いつつダメージを稼いでくれ！ ソニンは回復に集中、ミルリアは牽制しつつソニンのサポートだ！ ソニンが間に合わないと判断したら惜しみなくアイテムを使ってくれ！」

フォンは的確に指示を飛ばす。

強力な魔物相手にどこまで持久戦が通じるのか、それを確認するための編成だ。

「昔の偉い人はこう言った……」

フォンは感慨深く言い放つ。

「私達はとにかく攻めだ！ リリックは歌で私達を支援し、それが完了した後は道具でサポートだ！ リンとリズに克蘭クは、ヤツが何か属性に弱ければそれに合わせた属性攻撃とチェインで、でなければ物理の攻撃を徹底的に浴びせる！ 攻めて攻めて攻めきるんだ！」

不慣れながらサクも指示を出す。

長い事フォンの側で指示を出す彼の姿を見てきたからか、どこか彼に似た指示の出し方だ。

「昔の偉い人はこう言った……」

サクは感慨深く言い放つ。

「死ななきゃ安い！！」

「やられる前にやれ！！」

ほぼ同時刻、二つのパーティによる魔竜との戦いが開始した。

「汝の禍々しき力を祓え!!」

キリの呪言が魔竜を包み込む。

魔竜から放たれていた強烈なプレッシャーが薄れていく。呪言に力を奪われ、思うように動けなくなっているようだ。

さすがの魔竜でも、その状態になってしまえば余裕をもって受け切れる……そうフオンは考えていた……のだが。

「グオオオオ!!」

魔竜が突然空気を裂くように咆哮する。

巨大な音の波に何事かと様子を見ると……。

「あ、あれえ？呪言が解けてるです……」

先程かけたはずの力祓いの呪言の効果が綺麗さっぱり無くなっていた。

推測するに今の咆哮は魔竜にとって力を溜める行為なのだろう。

「びつくりしたけど、隙だらけだよ!」

ミネラが魔竜のすぐ傍まで駆け抜け、飛び上がる。

空中で体をひねりながら魔竜の頭部の一つにめがけて鞭を繰り出す。

絡まった鞭は、ミネラの体が落下を始めるのと連動し魔竜を地面へと叩きつける。

「ちえ、流石にタフだね。縛れもしないし、ダメージも大した事ないね」

ミネラは軽やかにパーティの元へと戻る。

既に鞭は手元へと引き戻されている。

「だが全く効いていないというわけではなさそうだ。ミネラはそのまま隙を見て攻撃を続けてくれ。キリはもう一度力祓いを。咆哮で無効にされるならされるで、こちら側のチャンスになる。ミルリアもいけると感じたら迷わず矢を撃ってくれ」

「アイアイサー!」

ミルリアは弓の調子を確認しながら陽気に返事をする。

「さあ、もう一度いくぞ！」

魔竜めがけて雷の弾頭と、氷の術式が放たれる。

それに合わせてリンが追撃を浴びせるが、どうにもダメージが少ないように見える。

「わ、私の歌は失敗なんてしてないヨ？ あの敵さん、大分硬いみたいネ」

リリックの歌による支援を受けてのその効果に、クランクは眉を潜める。

「どうやら属性攻撃はあまり有効ではないようだな。あの風貌で炎が弱点という事もあるまい」

「見た目で判断するのはどうかと思うけど、確かにそんな気がするわね」

「ならばっ」

サクは刀を青眼に構え、魔竜目がけて真っ直ぐに突き抜ける。

鋭い突きは魔竜の硬い外皮をえぐる。

「……思っていたより手応えはないが、十分か」

刀を振り、付着した血を払う。

「狙いは決まった！ 後は攻めて攻めて攻めき……」

「グオオオオオオ！！」

れ、と言いきろうとした瞬間に、魔竜が地面を揺るがす咆哮をあげる。

途端、魔竜から放たれるプレッシャーが倍増し、とても危険なおおいが漂い始める。

「これ、受けられるのかなあ……」

守りに薄いこのパーティに、不安がよぎる。

フォンは魔竜の一撃を難なく受け止めていた。

再び放たれたキリの力被いの呪言によって弱体した魔竜の攻撃は、流石にそこいらにうろついている雑魚とは比較にならない威力ではあったが、問題になるほどではない。

「向こうは……大丈夫かな」

受けたダメージはわずかであるが、念のためにとソニンがフォンの治療にあたる。

その際、ぽつりと不安を漏らす。

「こっちはフォンさんにキリがいるから大した事ないけど……」

「そういえば……向こうには魔竜の力溜めを無効にする手段も無いしな……」

パーティ分けを少し極端にしすぎたかとも思ったが今さらどうする事もできない。

「何にせよ、信じるしかないな」

こちらのパーティは至って安定。

今回はミネラの鞭に加え、ミルリアが放つ二つの矢によって確実にダメージを重ねていく。

「せ、聖なる守護の舞曲……！」

リリックが支援歌を切り替える。

味方の防御を補助する歌声が皆を包んでいく。

「ついでにこれも使っておくか」

クランクが懐からビンを取り出し、床に叩きつけて割る。

中から衝撃から身を守る霧が溢れだし、歌と交わって皆に行き渡る。

「リン、やれる？」

「やれる、やれないじゃなくて、やるしかない……でしょ？ お姉

ちゃん」

その通りだ、とリンの肩を叩いてリズは下がる。

「ほら、サクさんも下がって。フォンさんと違って誰かの所にいった攻撃を庇えるほど器用じゃないんだから」

「わ、わかった」

そういつとサクも魔竜から距離をとる。

そして残ったリン一人が魔竜の前へと仁王立ちする。

「さあ来い！！ ここから後ろへは絶対に通さない！！」

リンの気合の叫びに応えるように魔竜が前進してくる。

咆哮によって高められた力が、リンに向かって放たれる。

「ぐっ、ううっっ」

リンの左手に添えられた盾に魔竜の力、それを受け止めようと食いしぼるリンの力が集中していく。

その力の集中に盾が耐えられず、ひびが入り、そこを起点に一気に崩れ落ちてしまう。

「っ……、かふあっ」

盾が受け切れなかった衝撃を体に受け、リンは壁まで飛ばされる。

「リン！！」

すかさずリズが駆け寄るが、そこには誇らしげにVサインを出すリンが腰かけていた。

リンのVサインが示すものは、魔竜が咆哮で溜めた力を使い切り攻撃を止めていた事。

耐えきった、そう安堵するがボヤボヤはしていられない。

「次同じのが来たら……ちょっときついかも……」

何とか動けるものの、傷は浅くない。

元々長期戦には向いてない編成、ならばやるべき事は一つ。

「次で決める！！ 全員、全力をぶつける！！」

転機はその瞬間に起きた。

それまでと同じく、ミネラやミルリアが魔竜へとダメージを重ね、魔竜の攻撃はフォンが防ぐ……その繰り返しと思われた瞬間、数多に分かれている魔竜の首がそれぞれパーティ目がけて一直線へと伸ばしてきた。

「なっ」

一瞬で全員まで届くその攻撃にフォンは反応しきれない。

「あたしはいい！ 後ろの皆を！」

襲い来る魔竜の頭を鞭でさばきながら言うミネラにすまないとだけ声をかけると、フォンは後衛三人の前に躍り出る。

「流石に全部は防ぎきれない！ 悪いが、耐えてくれ！」

「わかっ、つと、よっほっ……うわぁっ」

ミルリアはレンジャーの身軽さを持って出来うる限り躲し、被害を留めているが他の二人はそうもいかない。

「つきやぁ」

「うぎゅんっ」

医術に使う道具を持っているソニン、そして戦闘中は両手足を拘束しているキリは躲す事もできずに、フォンの守りから洩れた攻撃を受ける。

「ぐっあ……」

「ミネラ！？」

そして前線で耐えていたミネラが、懐に一撃を貰い崩れ落ちる。

すかさず魔竜が追撃を加えるが、ミルリアがミネラを担いで前線から離れ難を逃れる。

「わ、悪いね……」

意識はあるものの、どこかの骨でも折れたのか苦しそうに息を吐いている。

「ミルリア……すまないついでに、ソニンの所まで頼む……」

ミルリアは言われるままにソニンの傍までミネラを運ぶ。

「う……げほっ、けほっ」

魔竜の一撃を受けて苦しそうに呻くソニンの元へとやってきたミネラは……。

「苦しんでるところに悪いんだけど、超特急で治してくれないかい……？」

痛みに歪む顔には勝利を確信した笑みがあった。

「見えたんだ……。あいつの命は、次で終わりさ……っ」

持久戦組の方が思わぬピンチを迎えていた頃、短期決戦組はその本領を發揮していた。

「秘剣……ツバメ返しッ!!」

上段に構えたサクの刀が刹那の間に三度魔竜を斬りつける。

硬い外皮を誇る魔竜といえども、ブシドーの奥義とも言える技の前では紙も同然。

ずるりと魔竜の首の一つが大きく裂ける。

「てえい!!」

そこに一閃、リンの追撃が加わる。

風と見間違える速度で繰り出される斬撃は、その鋭さを何倍にも高めすでに裂け目が入っていた魔竜の首を完全に分断させる。

体の一部を丸々失った魔竜は、痛みに体を悶えさせていた。

「そんなに暴れていると、余計痛くなるわよ」

リズはにやりと笑いながら、銃を魔竜とは関係ない方へと向け発砲する。

だが、それは完全に計算されていたモノで、壁や瓦礫の破片などに跳ね返り、その度に魔竜へと弾道が修正され幾度となく傷を与えていく。

そして、魔竜が痛みで蹲ったその背後。

「これで、終わりだ」

クランクが魔竜の背に手を当て術式を解放する。

クランクの腕から発せられた膨大な量のエネルギーが限界まで圧縮され、それが臨界へと達した瞬間大爆発を引き起こす。

炎でもなければ、物理でもない。

ただ単純に熱量をぶつけるだけの単純明快、そして最大の威力を誇る核熱の術式が魔竜に直撃する。

「や……つたか？」

ものすごい量の土煙が舞い上がり、その中からクランクが意気揚々と現れる。

魔竜の方はどうなったかといえば……、大分原型をとどめていない。

「終わったか……って、クランク！！ 貴方そんな術があるのなら最初から使いなさい！！」

「い、いやあれは色々と燃費が悪くてな……」

「このパーティーで燃費とか考えてたらやってられないネ」

こうして短期決戦組はその実力を示し、フォンらよりもいち早く魔竜を撃破する事に成功する。

あと一歩遅かったら結果は違うモノになっていたかもしれないが、彼女らがそれを知る由は無い。

「皆！ 大丈夫か！？」

魔竜の猛攻はようやく終わりを迎えていた。

だがその爪跡は大きく、まともに動けそうなのはフォンとミルリアだけのようだ。

「こつちがこんなじゃ……向こうは……」

フォンはサク達の事を心配するが、生憎とその頃彼女らは戦闘を終え合流地点へと向かっている最中だ。

「……っ、フォン！」

ソニンから治療を受けているミネラが苦しそうに叫ぶ。

「あたしが動けるようになるまで何とか注意をひきつけておいてくれっ」

フォンはその頼みに大きく魔竜との距離を近づける事で応える。魔物の習性か、大きく動くものに気を取られるようで魔竜はフオンを追いかけ床を震えさせながら前進していく。

そして繰り出される魔竜の攻撃を、盾で受け、剣で弾き、時には最小限の被害で済むように自ら当たる。

じつと相手の攻撃を待ち構えて入ればもつとうまく防げるのだろうが、今は防ぐ事が目的ではなく、あくまで注意をひくこと。

「つぐ」

また一撃、盾で魔竜の攻撃を受け止めるとふと違和感を感じた。

違和感に誘われるまま視界を上へと上げれば……、

「ジ・エンドだ」

ミネラが魔竜の背中に立ち、腰に携えていた短剣を魔竜の首の付け根に深々と突き刺す。

魔竜の外皮はあれほどの硬さを誇っていたというのに、その部分だけは安々と刃の侵入を許し根元まで突き刺さった瞬間、ぴたりとその動きを止めた。

「た、倒したのか？」

ミネラは短剣を引き抜き魔竜の背中から飛び降りる。

親指をつきたててウィンクする姿にフォンはほっと胸をなでおろした。

「う……ん？」

「お、起きたか？」

既に二つのパーティは合流し迷宮を脱出する準備をしていた時、魔竜の一撃をもらって気を失っていたキリが目を覚ました。

「わ、私……気を失って……つま、魔竜は!？」

「大丈夫だ。こっちも向こうも無事に終わったよ」

キリは安心してほっと一息つくが、すぐにごっくりと肩を落とすた。

「私……お役にたてなくてすみませんです……」

「何言ってるんだよ。キリの力被いがあったからこそ、魔竜の猛攻を凌げたんだ」

フォンはキリをフォローするが、中々キリの表情は晴れない。

「ま、あの魔竜をこうして全員無事に越せたんだ。きっとこれから大丈夫さ」

それとは反対にフォンの表情は明るい。

当初の狙い通り、魔竜討伐を通して自分達の実力を把握して自信をつけた。

同時に相手には一撃でパーティの崩壊もありえる手段をもっているかもしれないという事を知り、それを慢心まで押し上げない。

いい状態だ、とフォンは思っていた。

きっとこれから先何があるかと乗り越えられると、確信していた。

そして君達は二三階に足を踏み入れ

あれと、対峙することになる。

二三階：黒き獣は命に因りて全てを滅す

「土に堕ちた者たちよ。汝らは不死に興味はないか？」

空を貫く世界樹の迷宮。その二十三階。

フォン、サク、ミネラ、キリ、ソニンの五人は、それぞれの武器を手に、意志を心に持ち、天より聞こえる声に耳を傾けていた。

だが握る手には汗が、構える心には揺らぎが彼らを不安定にしていた。

「人は古より死の影に脅え続けてきた。地位や名誉……そのすべてを得た者が最後に求める力、それが不死だ」

下の階での戦いで得たモノは、既に消えかけていた。

かろうじて残っているモノを総動員して、何とかその場に立っている。

「だが我は得た。諸王の聖杯という、死を乗り越える力を」
地響きがする。

一歩一歩、確実に、君たちの方へ。

あらゆる意志を削ぐ、圧倒的気配を放つ何かが。

「汝ら、心してくるがいい。汝らを阻むはかつて歴戦の冒険者であった者。聖杯の力により強靱な体、不死の力を得、魔獣と化したジヤガーノート！」

通路の奥、曲がり角からその一端を覗かせる。

燃えるような赤い毛。人ほどもありそうな巨大で凶悪な角。

「人の身のままの汝らがどこまで通じるか……。楽しみにしているぞ」

そうして天の声は消えていく。

その代わりに現れたのは、見上げるほどに巨大な獣……いや、化物。

外見だけであらゆる恐怖を体現しつくす一つの形が君達の前へと現れた。

「……っ、散れ！」

気圧される前にフォンが叫ぶ。

ジャガーノートは既にその巨体に似合わぬ素早さで君達との距離を詰め、迷宮を支える柱のような腕を振り下ろしていた。

陣形も何もかも一瞬で崩される。フォンの叫びを頭で認識するよりも早く体を反応させ、各々が距離を取った上に、巻き上がる粉塵で互いの姿を見失ってしまう。

「キリとソニンは一旦身を隠せ！ この煙じゃヤツだって見えていない！」

フォンが大声で指示を出す。

当然ジャガーノートはその声に反応し、フォンの姿を捕捉する。

「……もらったっ」

ジャガーノートの意識がフォンに向かった瞬間、煙に紛れてジャガーノートの後ろへと回ったサクとミネラが同時に巨体に向かって武器を振るう。

しかし刀と鞭、その両方が黒い外皮に弾かれる。

その感触は硬いとか、そういう類のものではなく……何度か遭遇した南瓜のFOEが持っていたものに匹敵するほどの耐性。

「冗談きついな……」

純粋な硬さによるものではないので、武器に損傷は見られないが手応え自体は鉄や鋼のそれだ。

属性攻撃ならば通るかもしれないが、ミネラはもとよりサクの属性剣技もベースは物理であるため、大きな効果が見込めるとは思えない。

「人選間違えたかね、これは」

ミネラはそうぼやくつつも、自分のするべきことを強く意識する。ヤツの頭か腕を縛る……。そうすれば暫くの間ではあるが、力を大きく削ぐ事ができる。

自然と鞭を握る手に力が入る。

「……っが」

ジャガーノートは二人の攻撃を全く意に介さず、フォンに向かって直進し頭突きを仕掛ける。

盾を前に構え、ジャガーノートの頭突きを正面から受け止めたフォンは一瞬にして壁まで引きずられ、ようやく止まる。

だがそれは、壁を使ってようやく力が拮抗しているわけではない。

それに加えて、ジャガーノートの頭部から伸びる一对の角が壁につきささった上での拮抗だ。

圧倒的な力、そして自分のすぐ左右に迫っている角。フォンは額にじわりと冷たい汗が流れているのを感じる。

「こ、の……つや、ろうおおおっ」

ミネラはあらん限りの声と力で、鞭を引く。

鞭の先はジャガーノートの後ろ脚へと伸びており、フォンへと突進し、重心が前へと向かっていたジャガーノートは体勢を崩す。

その隙を付き、フォンはジャガーノートの背中へと飛び乗る。

左右へと逃げるより、巨体を逆手にとって上へと逃げたほうが手を出しにくいと判断したのだが……。

「フォンッ！」

サクが大声で危機を伝えようとするが、時すでに遅し。

ジャガーノートの巨大な尾が自らの背を払うように振られる。

「か……っは、」

払われた衝撃、そして高速で壁に激突したダメージがフォンを深く侵食する。

「フォンさんっ」

物陰に潜んでいたソニンが飛び出す。

「ソ、ニン……」

「喋らないでくださいっ。すぐに治しますから……」

ソニンは治療を開始する。だがその行為はジャガーノートの気を強く引き、フォンは蚊の鳴くような声で逃げると告げるが、ソニンは不敵ににやりと笑う。

「大丈夫です。それよりも早く治る事に集中してください。そしてら……反撃開始です」

その瞬間、ジャガーノートの体が紫色の球体に包まれる。

「我、汝の驕りを打ち砕く者也」

我、汝の自由を制約に変える者也」

重々しい声が木霊する。

ようやく治まり始めた煙の中から、手足を拘束し瞳を閉じたキリが現れる。

「さあ、反撃開始ですっ！ 我、汝の在り方を曲げる者也。食らうですっ、変化の呪言！」

ジャガーノートを包んでいた球体がバラバラに砕け消失する。

見た目は何も変化していない。ただ、ジャガーノートの放つ気配は先ほどとは完全に逆転していた。

「はあああつ！！」

サクとミネラが再び同時に駆け出す。

先ほどはほんの僅かすら通さなかつた刀と鞭。

それが今度はジャガーノートの黒い装甲に深い裂傷を刻み、肉をえぐる。

「やらかつ」

あまりの手応えに、思わずミネラが驚く。

確実にダメージが入っている。腹の底まで響きそうなジャガーノートの叫びからもそれがわかる。

「これは……」

フォンはソニンの治療が進み、何とか真面に発声できるまで回復していた。

キリはフォンの元に近づき、汗を流しながらも満足気な表情をする。

「対象の耐性を変化させる呪言です。完成させるまで時間がかかってしまつて……すいませんです」

「いや……、最高の仕事だ！」

思い切り立ち上がり、ソニンはひゃつと声をあげる。

「っもう。危ないじゃないですか」

「……ソニンも、助かった」

「……はい。これが私の役目ですから」

三人で頷き合い、真っ直ぐにジャガーノートを見据える。

「キリ、疲れてるだろうが、まだ頼むぞ」

「はいですっ」

キリの返事を聞くや否や、ジャガーノートとの間合いを詰め、剣ではなく盾をふるう。

狙いはジャガーノートの体から伸びている角。

頭以外にあるものを角と呼ぶのかはさておき、凶悪な外見を誇るそれを潰しておくべきだ。

外皮とは違い、無機物に近い角は硬い。だが硬いゆえに脆い性質を持つている。

鋭い刃は通さなくとも、盾による破壊の一撃ならば変化の呪言で耐性を打ち消された今、叩き折る事は容易い。

ジャガーノートは体を削られていく痛みに動きを鈍らせている。

「立ち直られたら厄介だ！今のうちに攻めて攻めて攻め倒せ！」

そして刀と鞭は三度舞う。

一瞬三撃の刃の波に紛れて鞭がジャガーノートの頭に絡みつき、拘束する。

「っし、やったか？」

縛った手応えを感じる。

ジャガーノートは頭を縛られ、それを解こうと暴れるがそこはダークハンターとしての意地か、ミネラは決して放そうとはしない。

行ける、確実に戦況はこちらに向いてきている。君達は魔竜を打倒した時の感触を思い出し始め、再び意志が心の奥で燃え始める。

「はあああつー！」

サクはその熱い想いを鋭い突きに乗せ、ジャガーノートの体へと奥深く貫きいれる。

ジャガーノートの声は無い。だが、サクは突き刺さった刀からジャガーノートの力が失われていくのを感じていた。

巨体が床へと倒れ、地鳴りを起こすがそれはもう恐怖を感じるものではない。

サクは刀を、ミネラは鞭を手元に戻しほっと一息をつく……が。「駄目です!! まだ生きてます!!」

ソニンの叫びに、サクは驚き振り返る。

確実に仕留めたと思っていた。確信してしまうほどの手応えだった。

しかしそれは『普通』の魔物の感覚でしかなかった。目の前にいるのはどんな化物だったか。

ジャガーノートは前足を大きく振り上げ、大地を割かんとする勢いで床へと叩き付ける。

「きゃああっ」

激しい揺れに立っていられず床へと倒れこむ。

だが、それだけでは終わらない。床にとどまらず、柱、果ては天井までにヒビが入り崩れ落ち始める。

「……くそっ、このフロアごと壊す気か!？」

揺れが激しすぎて動けない上に、いずれは瓦礫が雨のように降りだすだろう。

「皆! 瓦礫に気を付ける!!」

何かの足しになるとは思えないが、精一杯叫ぶことしか許される行動が無い。

「気を付けるというですが……ひゃああっ」

キリとソニンの傍に巨大な瓦礫が落ち、二人の姿が見えなくなる。

「ソニンッ、キリッ!!」

ようやく揺れは治まりはじめ、何とか動けるまで持ち直す。

「待ってて! 今助けるから!」

サクとミネラは立ち上がり、二人を救出しようと歩き出す。

その瞬間、瓦礫の山を吹き飛ばしながらジャガーノートが二人

を巨大な頭で薙ぎ払う。

「力を被え!!」

間一髪、キリの力被いがジャガーノートを蝕み威力を減退させる。だが効果は薄い。瓦礫の下敷きにはならなかったものの、無茶な体勢で簡略して発動させた呪言は十全な効果を発揮できない上に……。

「クハツ、カハツ」

不完全な呪いは自らへと還る。術の反動にキリは血を吐き苦しむ。

「キリ!? 待ってて、すぐ治すから!!」

「私は……平気……、です。それよりも先に……二人を……」

ハツとして、ジャガーノートの攻撃を受けた二人を探す。

二人は崩れた瓦礫の上につつつ伏せの状態で倒れていた。

「ソ、ニン……。早く、サクを……」

ミネラが今にも途切れそうな声でソニンを呼ぶ。

「いけない……っ」

サクは明らかに虫の息だった。

大きな血溜まりが出来、今も広がりつつある。

反射的にソニンは飛び出す、ジャガーノートは当然のように狂気の矛先をソニンに向ける。

「調子にのってんじゃ……ねえ……っ」

その間にフォンが割って入る。

だが先ほどのキリと同じように無茶な体勢で受け止めてしまう。

それでもフォンは耐える。全身全霊をかけて、ジャガーノートの力に真っ向から力で立ち向かう。

今のフォンはまさに最後の砦に等しい。

ここを破られれば仲間の命が無いという事実、命を燃やしその熱量を力に変えるかのようにただ純粋な力のみで拮抗状態を作り上げた。

「……っ。サクさん……すぐに治します!!」

ソニンもフォンと同じく、自らの命を使う覚悟で力を使う。

そしてそれはまさにその通りであった。

サクの傷が急激に治っていくのに比例し、ソニンから生気が失われていく。

おそらくはサクを治療し終えたと同時に気を失ってしまうであろう。

「く……、そ……」

フォンにも限界が近づきつつあった。まだ心は萎えていない。力もまだ引き出せる。

だが装備はそうもいかない。ジャガーノートの巨大な角の先が盾にヒビを入れ、じわじわと食い込んでいく。

「ぐ……っ」

それが盾を構える腕にまで到達した瞬間、首を大きく振りフォンを遠くへ投げ飛ばした。

投げられたままにフォンは大きく弧を描いて床へ激突する。

巻き上がる粉塵の中から、立ち上がるフォンの姿は……無い。

同じくしてサクを治療し終えたソニンも床へと倒れこむ。

「ソニン……ありがとう」

ほどなくして目を覚ましたサクが立ち上がる。

サクとジャガーノート。その場で動ける者はそれだけしか残っていない。

おそらく、攻撃を与えられるチャンスは一度きり。サクにジャガーノートの暴力を防ぐ術はない。

(ならば……せめて、援護を……)

キリは呼吸を整え、今度は失敗しないよう意識を集中させる。

「 汝の身を蝕め……っ、」

ジャガーノートの体を呪言を包む。変化の呪言により打ち砕かれた耐性が、更に弱体していく。

これならば、一撃で……先ほどみたいに復活しないよう完全に。

サクは全ての力を込めて刀を握り、最高の技をぶつくと一歩踏み出した。

だが、それ以上先へは進むことができなかった。

「な、に……？」

ジャガーノートの様子がおかしい。

呪言はかかっている。変化に、力抜いに、軟身に。三つもだ。だというのに奴が放つプレッシャーがどんどん上がっていく。

最初の比ではない。

(どうして！？　なんで……！？　失敗したですか！？)

キリは焦る。

ジャガーノートの変化は彼女が放った呪言が原因である可能性が高いからだ。

「あ、あ……」

からん、とサクが刀を取り落す音が響く。

完全に折れたのだ。たった一人で、この化物の前に立つことに耐えられなくなった。

「グオオオオオオオオオアアアツ！！」

ジャガーノートが吠える。

それだけで空間が震え、瓦礫が落ちる。

そして……サクもまた床にへたり込んでしまう。

(私の……私のせい……です)

何もかもが悔しくて、もう何が悔しいのかもわからなくなる。

ジャガーノートが、動く。

その先にはきつと、何も残らないのだろう。

「うる……さいな……。寝れない、だろうが……」

だが、彼は立つ。

体中傷だらけ、片方の目はすでに開けられず閉じたまま。

頼みの盾は砕け散り、鎧も最早形を失くしている。

だがそんなものは関係ない。守るべき仲間がそこにいるのなら、立たなければならぬのだ。

厚い鎧と、大きな盾を装備しているからパラディンなのではないのだから。

「サク……皆を連れてここから逃げるんだ……」

「お前、何……を？」

その言葉の意味を理解するのに僅かばかりの時間を要し、すぐに首を横に振る。

「そんなこと……できるわけないだろ！」

サクの叫びに、フォンは何も答えない。

揺るがない……意志。彼は今、自らのすべきことを完全に把握し、既にそれ以外の選択は全て捨て去っていた。

（私は……私はッ）

サクは自分の無力さを呪う。

フォンが身を呈して仲間を守るのが役目なら、サクはその刀をもって全ての敵を切り伏せるのが役目ではなかったのか。

だというのに、既に刀は手の中にあらず、自らの心からも喪失していた。

「おい、デカブツ。てめえも元は冒険者だったというんなら、やるべきことはわかってんだろ。大事な仲間を守ろうとこうして立っているんだ。……付き合えよ」

その言葉に反応したのかどうかはわからない。ただゆっくりとジャガーノートはフォンの方へと向きを変え、傷だらけの、軽く腕を振るえばそれだけ倒れてしまいそうな存在に全力をぶつけんとしている。

「それでいい……。サク、この後どうするかは、お前が決めてくれ」
「っ」

サクは全身から溢れ出てしまいそうな想いを、言葉をぎゅっと中へと閉じ込めソニンを、ミネラを抱える。

そして

ジャガーノートの全力の突進が、フォンに向かって

痛みはない。

脳が処理できないほどの痛みは、痛みとして認識されないという
うがこれがそうなのだろうか。

ただ……何か暖かいものを感じる。

もうあの世にでもたどり着いたのか……？

「……違っっ」

目を開ける。

目の前には黒い巨体。

しかしフォンに向けていた巨大な角を携えた頭部はそこにはな
く……、フォン自身にも傷が無い。

「あ、あ、あああああああ ツツツ」

サクの絶叫が木霊する。

何が起きた、何が起きた!?

フォンは混乱する頭を抱えるように自分の頬に触れる。

そしてようやく、自らの体が真っ赤な鮮血を浴びている事に気
づく。

それはまだ上から垂れており、何が……と視線を上に向けると
。

「キ、リ……?」

ジャガーノートの角に腹部を貫通されている、キリの姿がそこに
あった。

「な、んで……」

なぜだ、なぜだなぜだなぜだ!?

完全にパニック状態に陥るフォンの脳裏に、不幸にも記憶から
抜け落ちていた一瞬前の出来事がフラッシュバックする。

迫るジャガーノート。

全てを受け入れていたフォン。

そしてその間へと割って入ってきた、キリ。

「つくが、あ、ご、ぐ……」

角に貫かれたまま、キリは大量に吐血する。

一体どれほどの血液が、人の体には流れているのかと不思議に思っほどの量を何度も、何度も。

だが……キリは、血を吐く苦しみに耐えながらも　笑っていた。

「惜しかったです、ね。私はまだ生きてる、です。だから、私の……、私達の、勝ち、で、す」

途切れ途切れに言葉を吐くキリは、息切れのような乾いた笑い声をあげながら呪言を唱え始める。

「私は、ずっと……、誰かを、助けて、行きたいと、生きたいと、おも、つて、いた、です……。誰からも、好かれる事の、なかった……、この力で……」

人を呪わば穴二つ。

相手を呪って呪って呪いつづけるカーズメーカーであるキリは、一つ心に決めていた事がある。

相手の墓は自分で掘ろう。

自分の墓も自分で掘ろう。

だけど、大切な人の墓は誰にも掘らせない。

決して、『二つ』よりも多くの墓を掘らせないために、この力を使おうと。

「我、汝と痛みを共にする者也

汝、我と苦しみを共にする者也」

呪言は自らを戒める拘束から得られる負で相手を呪う術。

だが、この呪言はもつと単純な物だ。

すなわち、自らの痛みを、負そのものを相手にぶつけるたった一つの呪言。

ペイントレード

「魔獣ジャガーノートまで退けるか」

再び天の声が響き渡り始める。

既にジャガーノートは跡形もなく崩れ落ちて消滅した。

残っているのは、四人と、一人だったもの。

「だが、その代償は大きかったようだな。 さあ貰い受けるぞ。
新たな贄をな」

キリの体が……細かい粒子となって飛んでいくかのように薄れていく。

「や、め……」

「やめろおおおおー……ッ!!」

サクがキリの元へ駆け寄り、その体を抱きかかえようとする。

しかし伸ばした手はキリを通り抜け、触れることができない。

「やめろ、やめろやめろ!! やめてくれ!!」

泣き叫びながら懇願する。

しかしキリの体は容赦なく薄れていき 消失する。

同時に、天の声は消え……静寂がその場を支配する。

一二四階：汝察せよ仲間の眼は常に其を見たり

ギルド「リアーリス」の住まうそこは、重い静けさに包まれていた。

空気をこするような泣き声だけが不揃いなリズムで響いている。

「ミリの様子は？」

部屋から出てきたリズにクランクが声をかける。

「二三階で起きた事……その全てを知った時からミリは部屋にこもって泣き続けていた。」

「今は寝てるわ。疲れたんでしようね」

交わされる言葉も水を吸って重くなっている。

誰もが下を向き、顔をあげようとしない。

高くそびえる迷宮の事など、誰も見てはいなかった。

あの死闘から帰ってきた四人のうち、ソニンとミネラはまだ意識が戻らず、フォンとサクも真面に食事をとろうとしない。

その場に居合わせなかった他のメンバーは、かける言葉を見つめる事ができずにいた。

リズとクランクとで大公宮へ報告したり、肩を寄せ合って泣くリズとミルリアをリリックが慰める……そんなことをしているうちに数日が経っていた。

傷は……思った以上に深い。

このまま治らないかもしれない……そうリズは思い始めていた時、一人の来客があった。

「へえ、いい場所に住んでるじゃない」

長い黒髪を携えたドクトルマグス……アーテリンデだ。

アーテリンデは出迎えを待つまでもなく奥へと進み、空いていた椅子に腰を下ろした。

「で、これからどうするの？」

そして誰が何かを言うよりも早く、そう切り出した。

「いきなり、何の用だ」

クランクが前に出て応対する。

アーテリンデは不敵な笑みを浮かべながら足を組みなおす。

「ちよつとだけ忠告に來ただけよ。……わかつてるわよね。私が、以前に今の貴方達と同じ状況にいたという事」

その言葉に全員がはつとなる。

アーテリンデも、迷宮で仲間を失い……。その仲間は……。

「貴方達に残つてる選択肢は三つ。進むか、止まるか、逃げるか。でもね、進む以外の選択肢を私は……。エスバットは許すつもりはないわよ。そうでしょう？」

エスバットは……。進むことも逃げる事も出来ずにその場に留まり続けた。

リアーリスはそれを押しつけて前に進んだのだ。同じ状況になった今、エスバットと同じ選択をする事も、全てを投げ出すことも出来はしない。

「それで、妹さんには話したの？ お姉さんが今どうなってるのかって」

「それは……」

話せる……。わけがなかった。

それ以上に話したくなかった。

オーバードに連れ去られ、何をされて、どうなるのかなんて想像するのも嫌だった。

これ以上先に進むとなった時、変わり果てた彼女と対峙するかもしれないという事を考えると更に君たちの体を重くしていく。

「まあ、私から話してあげてもいいけど。どうする？」

口調は軽いがアーテリンデは彼女なりに考えた上での提案だ。

同じ立場に居た事がある者だけにわかる苦悩がある。

それに……。これは彼女なりに礼のつもりでもあるのだ。立ち止っていた自分たちを動かしてくれた事への。

ただそれだけにリアーリスにはここで終わって欲しくないと思

っている。

「……簡単に答えられるわけないわよね。お茶でも出してくれれば暫くいるから、ゆっくり考えるといいわ」

アーテリンデの正面に立っていたクラルクは、彼女のそんな振る舞いに硬くなっていた表情を崩してお茶を汲みに行った。

少しばかりではあるが、場の空気が緩んだような気がした。

冷静に今後の事を考える余裕が生まれるくらいは……。

そうして……ゆっくりと時間が過ぎていく。

アーテリンデはクラルクの入れたお茶を一杯飲みほした後は、おかわりを要求するわけでもなくじつと椅子に座ったままでいた。

答えの出せない君達を責めるわけでも催促するわけでもなくただ座り続けていた。

「あ、あの〜」

そこへもう一人来客がやってくる。

交易所のひまわりちゃんだ。

「先ほどフォンさんが装備を買っていったんですけど、お釣り受け取らずに行っちゃって……。届けに来たんですが……」

リアーリスの事情を知っているひまわりちゃんはおずおずと中へ入ってくる。

「フォン……？ あれ、いない？」

言われて探すとフォンの姿がどこにも見えなかった。

「フォンなら……少し前に頭を冷やしてくるって出かけたが」

ゆらりとフォンと共にふさぎ込んでいたサクが顔を出す。

「サク……。大丈夫か？」

リズが心配そうに声をかけるが、それには答えずサクは自らの刀

に手を伸ばす。

何を、と思うリスだがふと嫌な予感が頭をよぎる。

「まさか……一人で迷宮へ？」

「おそろく……な」

「そんな、無茶だヨ！」

一気に部屋が騒然となる。

「皆はここにいてくれ！ 私が連れ帰ってくる！」

リスは銃を握りながらサクにも待っているよう言うが頑なにそれを拒む。

「私が行かないと……。あいつに……言ってやらなきゃならない事があるんだ」

あれ以来ずっと生気のない虚ろな瞳で下を向き続けていたサクにほんの少しだけ火が戻りつつあった。

それを見たリスは静かに頷くと、二人で部屋から飛び出していた。

二十四階。

幾多の魔物たちで溢れるその場所で、隠れもせず歩く一人の男の姿があった。

襲いかかる魔物を何の障害ともせず斬り捨てながら進む様子は、どちらが魔物なのかわからなくさせるほどだ。

「守れなかった……、守れなかった……」

そしてその口から漏れるのは絶えず湧き出る後悔の念。

彼は仲間の盾となるパラディンだ。本来、誰かが犠牲になるのなら、自分でなければいけないはずだったのだ。

だが、いくら悔やんでも起こってしまった事は変える事ができ

ない。

ならばせめて……、守れなかった者の責務としてやるしかない。守れなかった仲間を、自分の手でもう一度……。

どこにいるのかもわからない上に、そもそも既に『そう』なっているのかすら定かではないが、果たすまでは帰れない。

明らかに自暴自棄な行動。そんな物にはすぐに限界が見え始める。

何よりそこは二十四階。一人で進むには無理が過ぎている。

一匹ずつならまだしも二匹、三匹と数が増えるにつれ厳しさは増していく。

休む間もない連戦に体力は尽き、ついには敵を目の前にして腰を落としてしまう。

「はあっ、はあっ」

息が上がっているフォンににじりよる魔物達。

(ここで終わるなら……それでもいいか……)

自暴自棄の行動で行きつく先は……諦めた。

だらしなく降ろした腕、力無く握られていた剣が離されようとしていた。

「放すな!!」

突然の叫び声に驚いた体が偶然にも剣を握りなおさせる。

何だ、と思うフォンの横をサクが駆け抜け抜けた魔物を切り伏せていく。

「まったく……世話のかかる奴だ」

サクの動きをフォローするかのようにはリズの弾丸が放たれる。

魔物の数は一匹、二匹と姿を消していった。

「さて、と」

「うおっ、とっつっ!」

サクはあらかじめ片付いたのを確認すると、片手でフォンの掴みながら物陰まで引きずる。

魔物の目から隠れる場所まで引きずった後、鞘に納めた刀をフ

オンの喉元に突きつけた。

「何でこんな無茶をした……なんて理由は聞かずともわかっている。どうせ守れなかっただとか、俺がケリつけなきゃいけないんだとかそんな事だろう」

見下ろしながら言うサクに、フォンは顔を俯かせながら答える。

「……その通りだ。その通りだからこそ俺は……」

フォンは拳を震わせて、このまま仲間を振り切っても役目を果たすべきかと考えているとぼたりとその拳の上に水滴が落ちてくるのを感じた。

はつとして顔を上げると、そこには大粒の涙を零すサクの姿があった。

「守れなかったのは……私もだ……」

ガシャンと、刀が床に落ちる音が響く。

そのままフォンの両肩に手を置いてもたれかかり、涙声で話し始める。

「お前が盾でもって敵の攻撃を防いで仲間を守るように、私は刀でもって敵を倒して仲間を守るのが役目だ……。なのに私は、あの時その刀を手放した……。お前は盾を失くしても、自らを盾にして立ち上がったというのに……」

フォンと同じく、いやそれ以上にサクは後悔の念に押しつぶされていた。

恐らくフォンがこうして一人で行かなかったのなら、自分が行っていただろうとサクは思う。

「仕方のない人ね、二人とも」

リスは手に持った銃を肩に当てながら、呆れたような軽い笑みをこぼす。

「私達はギルドだ、仲間だ。そうでしょう？ なら、仲間を失った悲しみも、後悔も、責任も、全て仲間全員で受け止めるべきよ。そうでないという意味がないじゃない」

「そうだよ。それに仲間を守るの二人だけの役目なんかじゃない

んだよ」

そこに突然響く第三者の声。

驚いて振り返ると、そこには泣きはらした赤い目をしたミリと、全神経を集中して周りを警戒しているミルリアがいた。

「や、やっと会えた……。て、敵に見つかったら本当にどうしようかと……」

たった二人の迷宮行軍はかなりの神経を使ったようで、ミルリアは床にへたり込む。

そしてミリはサクとフォン、二人の傍に膝をついて話し始める。「最初は思っただよ。どうしてお姉ちゃんの事守ってくれなかったんだって。でも、お姉ちゃんは守られるために迷宮に挑んでたわけじゃないんだよ。仲間を守りたかったから頑張ってる……。そして役目を果たしたんだよ」

ミリの瞳には何か一言喋るたびに涙が蓄えられていく。

だがそれを押し込んで一言一言力強く出していく。

「二人はお姉ちゃんを守れなかったわけじゃないんだよ。皆が皆、仲間を守ろうとして……。その結果なんだよ。だから、リズさんの言うとおり何かを背負わなきゃならないなら、皆で背負わなきゃいけないと思っただよ。もちろん、私も」

そこまで言うミリは二人に向けて頭を下げながら大声で言う。

「だから、私も一緒にこの迷宮のてっぺんまで行かせてください！

お願いします！」

少女の必死の頼みを聞き、フォンはいつぞやのキリの言葉を思い出していた。

もし、あの子がここに来たいと言い出したら、フォンさんがOKを出してもらえますか？

もしかしたら……。あの時点で、キリは何か予感めいた物を感じていたのかもしれない。

「いや、だが……」

返答に渋る。

連れて行くという事がどういう結果をもたらすのかを考えると
そうならざるを得ない。

「お姉ちゃんの事は知っています。アーテリンデさんから聞きま
した」

「あー、うん……。二人が出てった後に無理矢理部屋に入ってさ……」

ミルリアが気まずそうに答えると、フォンは深いため息をついて
真っ直ぐにミリを見据える。

「どういう事になるのか、わかってるんだな」

「……はい」

こんな小さい子にここまで覚悟をさせてしまつとは、本当にふ
がいなさを感じるばかりだった。

逆を言うのなら、ミリにここまで言わせておいて自分達が覚悟
を決めないわけにはいかない。

「わかった……。なら、テストだ。この二十四階を一通り回ってミ
リの実力を見る。返答はそれからいいな」

「は、はいっ」

軽くそう言い放つフォンと、喜び勇むミリ。

だがそんな軽い問題ではない。

「お前、そんな疲れた体でどうしようと言つんだ。それに……。二十
四階に、何が潜んでるかもわからないんだぞ。もしかしたら……」

サクは不安を口にするが、フォンはそれを軽く笑い飛ばす。

「何、俺の至らない部分は皆が守ってくれるさ。それに……。今まで
の事を考えると真打は二十五階に違いない」

その無責任さと根拠のない言い分に、皆の肩の力が抜けていく。

ようやく君達は、君達を取り戻したようである。

「畏れよ、我を！」

ミリの呪言が二十四階に木霊する。

キリが一度も見せなかつた呪言は即ちミリ自身の手力であると言
える。

恐怖に足を竦ませる魔物達を他の四人でもって一匹ずつ仕留めて
いく。

「やったんだよ！」

敵が全滅したのを確認し、ミリが勝どきの声をあげる。

フォン達はほつと胸をなでおろすと同時にある一つの感覚を抱
いていた。

例え使う呪言は違えど、共に肩を並べて戦う感覚……それがキ
リと全く同じものであるという事。

キリの意思はしつかりとミリに託されていた……その確信を得
るのに長い時間が必要としなかつた。

その後の歩みも順調の一言に尽きた。

上へと繋がる階段を発見するまでに大した時間は要さなかつた。

「この上に……」

オーバードと、恐らく……キリがいる。

固唾を飲み、その先を見上げていると流石に恐ろしさを感じて
しまう。

それをぐつと飲み込んでフォンはミリの方に顔を向ける。

「今日は戻ろう。……ミリ、次も頼むぞ」

「了解なんだよ！」

ビシッと敬礼をするミリに君達は笑いを隠さずに表わした。

「というか、合流したんならすぐに戻ってきてヨ！ 心配したヨ！」
帰ってきて早々、リリックにダメ出しを受ける。

他のメンバーもやれやれといった表情でフォンらを出迎えた。

「ソニンも、ミネラも目が覚めたのか」

「はい、もうすっかり良くなりました」

「寝すぎて逆に体が痛いけどね」

腕を回して関節を鳴らすミネラは詳しい説明を聞こうじゃないかと視線で訴えてくる。

それに気づいたフォンは、ミネラを前に出して宣言する。

「これから共に迷宮へ挑む仲間を紹介する」

「皆さん、これからもこれからよろしくお願いします！」

歓声があがり、すっかりそこは明るさを取り戻していた。

クランクは腕によりをかけるかと言いつつ買い物に出かけ、普段は予算に厳しいリズも何も言わない。

「ご馳走だーと、喜ぶリリックにリン。」

他の皆も精一杯に浮かれてはしゃいでいる。

それは、今日が最後だとも思っているからだ。もし次があると
するならば、それは全ての決着がつけられた後だろう。

世界樹の迷宮二十五階。

全ての終わりがそこで待っている。

二五階：永劫の王座に座したる暁の上帝

世界樹の迷宮、二十五階。

そこへ、一つのギルドが足を踏み入れていた。

その数十組。リアーリス、初めて最後の総出陣だ。

「こんな大人数、効率が悪いにも程があるわね」

迷宮探索には不似合いな行軍にリズが冗談気味に毒づく。

迷宮は広大……と、一口で表せ無いほどの広さを誇っているが、

一つ一つの通路はそれほど広くはない。

そんなところを大人数で闊歩して囲まれてもしたら大事だ。故に

通常ならば最高でも五人のパーティで迷宮を進む。

「何、すぐにちようどよくなるだろう」

クランクが右手に力を集中させ、手のひらで炎を揺らめかせる。

「その時は打ち合わせ通りに、な」

フォンも剣と盾をしっかりと装着する。

強敵と戦う度に壊れ、何かと頼りなさを見せる武具達だが今回は

かりはそんな事がないように願う。

「あいさー！」

「ほいさー！」

リンとミルリアが元気よく返事をする。

こんな場所でもここまで緊張感が無いんだ、と思いつつもある意味それは貴重だ。

肩肘を張っていてもしょうが無いのだ。

泣いても笑ってもこれが最後。すべての決着がここで着く。

「アー、アー……。ウン、今日は調子がいいから、一晩中でも歌ってられるネ！」

リリックもリリックで服の装飾がいつも以上にきらびやかな物になっている。

彼女なりの気合の入れ方なのだろう。それにかかった費用にも誰

も文句は言つまい。

「メデイカに、ネクタルに……ちよつと奮発してアムリタも。あはは……、これは何もせずに帰ったら暫くご飯抜きかな」

パンパンにつまった鞆を持ち上げながらソニンは苦笑いを浮かべる。

備えあれば憂いなしとはよく言うが、備えた結果の憂いはどうなのだろう。

「なあに。オーバーロードをぶつ飛ばして、戦利品持ち帰れば余裕の黒字さ」

ミネラは鞭を肩にかけながら口を大きく開けて笑う。

二人とも、ジャガーノートとの戦いで受けた傷も癒え、本調子でこの日を迎えていた。

「今日こそ、私は私の役目を果たす」

サクは鏡面のように磨かれた刀に自らの瞳を映して、一人誓いを立てる。

その鏡面に最後の一人が映し出され、サクが振り向き、他の皆もそれに追従する。

揺れるグレーの三つ編みが、再び迷宮へと挑む。

「お姉ちゃん……。私、がんばるんだよ……」

ぎり……と強く拳を握って、大きく深呼吸をする。

ギルド『リアーリス』

全ての決着を付けるため、最後の迷宮探索を開始する。

「来るよ！ あの角から2体！」

ミルリアがその鋭敏な感覚を持って、敵の接近を素早く感知する。本来ならば一匹たりとも遭遇せずに済むレンジャーの技術も、この人数ではうまく働かない。

2体の魔物に大してリン、サク、ミネラの3人に加えて、リズと

克蘭クの援護が入る。

一撃足りとも相手に攻撃させる隙を与えず撃破し、止まることなく廊下を走る。

「フォンさん……私、重くない……かな？」

手足を拘束したままでは走れないミリをフォンがおぶって廊下を駆け抜ける。

「全然大丈夫だ……、いやお世辞とかじゃなくて本当にな？」

「そう言われると不安になるんだよ……」

実際の所、本当にミリは軽かった。

もとより年相応に小柄で、僅かに感じる重みは拘束具の重さだけ。

「……以前にも似たような事があったな」

克蘭クがぼそりと口にしたのは、まだキリがリアーリスに来て間もない頃の事だ。

克蘭クの背に乗ったキリが、樹海の魔物を相手に呪言をかけて回る。

「……ミリ、今度も頼むよ」

「……はい？」

感慨深げにそう投げかけるフォンだが、ミリは何のことか理解できない。

首を傾げてるうちに、再びミルリアが魔物の接近を告げる。

「なんだか良く分からないけど……、任されたからにはやるんだよ！ 『畏れよ、我を』！」

襲い来る魔物の集団が、その動きを凍らせる。

強制的に植え付けられた恐怖に縛られ動くことが出来ないのだ。

ただその中でも呪言が効かなかった者、恐怖を押し殺して襲い来る魔物がいた。

「残念、そこは立ち入り禁止だよ！」

ミネラが事前にそれを待ち構え、予め張り巡らしていた鞭が魔物達の動きを縛り上げる。

動きが止まった所で剣に持ち替え、一体ずつ急所を貫いていく。

崩れ落ちる魔物を尻目に、更に奥へと駆け抜けようとするがここまで来るとフロア全体に自分達の存在が知れ渡っているのか、次から次へと魔物が湧き出してくる。

「少しスピードアップだヨ！ 『韋駄天の舞曲』！」

リリックは走りながら器用に踊り、歌い、味方をサポートする。

歌う姿さながらの走るようなメロディは、常に追い風を受けるような感覚で味方を包んでいく。

「よし！ 一気に駆け抜けるぞ！」

襲い来る魔物達を全て躲し、追い抜き、ただひたすらに先へと進む。

広間を抜け、角を曲がり、奥へ、奥へ。

いつしか追いかけてくる魔物たちもどんどん仲間を引き連れ数を増やしていく。

「……そろそろだな。リン！」

「……ッ！」

リズの呼び声に反応して、リンが通路の真ん中に立ちはだかる。

狭い通路だ、魔物達は一斉にはやってこれない。

そしてリンの後ろにはリズ、リリック、クランク、ミルリア……

その4人が、がっちり固めていた。

「前は私一人かあ……。お姉ちゃんも、少しは手伝ってよ？」

「リンの頑丈さは私が一番良く知っている。心配するな」

トン、と指先でリンの背中を押す。

不満そうな表情を浮かべるものの、すぐに切り替え真っ直ぐとやってくる魔物たちを見据える。

「んじゃ、そういう事でここは私達にまかせろヨ」

「ここから先の魔物に関しては責任は持てん。それは、自分達でなんとかしてもらおう」

「ボク達も、ここが落ち着いたらすぐ向かいますから」

視線は魔物達に向けながら、フォンらを見送る。

そこで交わされるのは、信頼と約束。

「皆さん！ 絶対皆一緒に帰るんだよ！」

「そつちこそ……、頼んだわよ」

リン達がわざわざここで魔物達を一手に引き受けるのは、この先にある戦いには邪魔が入って欲しくないからだ。

多くのギルドが目指した迷宮の頂点。リアーリスもまた、その中の一つではあるが、そこにかける想いは他に類を見ない物だ。

その想いはただ一つ。

仲間を、救いたい。それだけだった。

そうして、君たちは真つ赤な扉の前へと辿り着いた。

魔物の気配は無い。どうやら、リン達の元へうまく集まっているようだ。

だが、扉の向こうから魔物の群れとは比較にならない程のプレッシャーを感じていた。

「……っ！ 開くぞ！」

床をこする音が大きく響き、赤い扉がゆっくりと左右に開いていく。

恐らく、その先に……。唾を飲み、覚悟を改める。

果たして、自分達は仲間を、仲間と認識できるのだろうか。

スキュレーのように人外へと作り替えられていながらも、仲間と認め、その上で刃を向けられるのか。

武器を握る手に力を込め、扉の先を見続ける。

そして、完全に開ききった扉から現れたのは……。

「お、お姉ちゃん……」

黒いローブに、一房のグレーの三つ編み。寸分違わぬ姿の、キリがいた。

「皆さん、来るのが遅いです」

キリはにこりと微笑んで君達を出迎える。

その笑顔に全員が凍りついていた。

「な、なんで……？」

ソニンは、顔を青くして狼狽える。

完全にキリの姿は覚悟の範囲外だった。

いや、そうではない。覚悟が、足りなかったのだ。

仲間と認めた上で、刃を向けられるのかじゃない。

君達は姿が変わっていれば少しは気持ちに誤魔化せると甘えていただけに過ぎなかったのだ。

キリはゆっくりと君達の側に歩いてくる。

必死に気持ちを奮い立たせてそれを阻もうとするが、体は少しも動かない。

もしかしたら……なんてどこまでも甘い考えが泥のようにこびり付き、落とすことができない。

ついにキリは、ミリの目の前までやってきた。そしてそっと右手を差し出すと、優しくミリの頭を撫でる。

「よく頑張ったですね。ミリならきつと、皆の力になれるって思ってたです」

くしくし、くしくしと綺麗に優しく撫でられ、次第にミリの表情は笑顔と涙で崩れていく。

「お、お姉、え、」

耐えきれず姉に抱きつこうと飛び出した瞬間、はらりと布が裂ける音……、そして金属同士がぶつかり合う甲高い音が鳴り響いた。

「な、に……？」

それは、一瞬の出来事だった。

横合いから飛び出してきたアーテリンデが、キリの首元に向け一

直線に槍を向けていた。

それと同時に、いつの間にかキリは緋緋色の剣を握り、迷いなくミリへ振り払っていた。

「全く……邪魔しないでホシイです。これでも、痛いんですよ」
ぎよろりと機械のような目をアーテリンデに向ける。

「え、え……？」

ミリは放心状態になり、床に座り込んでしまう。

フォンらもミリに駆け寄るところか、一言だっただけ話せないでいる。
「どうやら、私たちの時より随分と悪趣味になったようね」

槍を引き戻すアーテリンデの側にライシュツツも現れる。

アーテリンデの持つ槍は、確かにキリの首元を捉えたというのに、少しも汚れてはいなかった。

「どうして、こんな所に……」

サクがようやく声を搾り出す。

もっと他に考えなければいけない事実があるというのに、今はそんな目の前の疑問しか口に出来ない。

「借りを作りに来たのよ」

アーテリンデはにやりと笑う。

「私たちはまだ貴方達の事を完全に許したわけじゃないわ。何がどうあれ、貴方達が私の仲間を倒したのは事実だもの」

アーテリンデの言葉の間に、ライシュツツがキリに向けて発砲する。

真っ直ぐに伸びる銃弾は、キリの頬へと当たり、再び金属音を鳴り響かせる。

めくれた肌の下から出てきたのは、黒光りする鉄。

「だから私たちも貴方の仲間を倒すわ。それで、お互い恨みっこ有りよ」

アーテリンデのその言い草に呆気にとられる。

だが、それから復帰した時、あれだけ心を覆っていた動揺は消え去っていた。

「すまない……。……任せた」

「はいはい任されました。ほらほら、早く妹さん連れて大ボス叩いてきなさい」

フオンはミリの元に駆け寄り、そっと抱き起こす。

「大丈夫か？」

声をかけるが、僅かに頷くだけで反応が薄い。

仕方の無い事だが、この場に置いて行っても色々と危険が多い。

それはこのままオーバーロードの所へ連れて行っても同じことだが、側で守れる分安心だろうとミりを抱えて走り出す。

それに続いてサク、ミネラ、ソニンもアーテリンデに頭を下げつつ走り出す。

「せっかくの再会をヨクモ、邪魔してくれましたね」

フオンらの姿が見えなくなって、キリは剥がれ始めた顔をアーテリンデに向ける。

「生憎だけど、その声聞きたくないし、喋らせたくないの。……爺や、初めから全力でいくわよ」

「承知しました。お嬢様」

エスバットとキリ……。いや緋緋色の剣を構えた魔物とが対峙し、両者の激突が始まった。

バタン、と赤い扉がフオンらとアーテリンデらの間に壁を作る。

中は広く、君達が今まで見たことも無い装置に溢れ、不思議な音を鳴らしている。

「遂に辿り着いたか」

上空より響いてきたあの声が、間近から発せられた。

声のする方へ視線を向ければ、そこには一目では何かのオブジェ

クトか何かかと見間違えてしまいそうな存在がいた。

だが、それは間違いなくオーバーロードである。

「……ッ」

今にも床に倒れそうだったミリが、足腰を奮い立たせてながらオーバーロードを睨む。

「随分悪趣味な事をしてくれたねえ」

ミリだけじゃなく、ミネラや、普段目を釣り上げた事すら無さそうなソニンまでオーバーロードを深く睨みつけていた。

「悪趣味……、か。我としては我なりの礼のつもりだったのだが、思うようには行かなかったようだな」

「ふざけるな……だよっ」

ミリは手のひらに爪が食い込むほど強く握りしめている。

あまりの事に先程まで理解しきれなかった事実が、段々と理解するにつれ怒りに変わっていく。

「汝ら冒険者とやらには、随分と我が研究の糧となった。おかげで聖杯も随分と完成に近づいた。だが……まだ足りないようだ。出来る事なら、完全な形にしてやりたかったのだがな」

「もう、黙れよ」

フォンが一步前へ出て、剣を真っ直ぐオーバーロードへと向ける。

「キリが死んだ事は、悲しいが仕方の無い事だ。俺達が弱かったせいだし、そもそもそういう事になるのも覚悟した上でここへ挑んでいた。けどな、その死を、それまでの生を、お前みたいなヤツに汚されるのは我慢ならない」

フォンに続いて他の皆も、臨戦態勢へと入る。

一触即発……、その空気を感じてオーバーロードは雰囲気を変える。

「来るがいい。汝らが退けぬ理由を持っているとはいえ、それは我とて同じ事。我は我を信じてついてきてくれた者達のためにもここで終わるわけにはいかぬ。我、オーバーロードの力で死して灰燼と化すが良い！」

オーバーロード自身が何らかの装置、そう思わせる姿はもはや生物ではなく機械だ。

牙や爪など、驚異に思えるものは持ち得ていないものの、逆にどのような攻撃をしてくるのかわからない。

ソニンが鞆から一つのビンを取り出し、蓋を開け中身を辺りに振りまく。

「効果があればいいですけど……」

ビンから溢れる霧が仲間達を包んで、衝撃を和らげる守りとなる。気休め程度にしかならないかもしれないが、相手の出方がわからない以上慎重に……。

「我、汝の身を蝕む者なり……」

ミリが軟身の呪言を詠唱すると同時に、サクとミネラがオーバーロードへと突撃する。

「い、いきなり……」

ダメージを与えられるうちに与えるのは悪いことではないのだが、様子見というのもあるだろう……とソニンは思う。

「流石に我が前へと立つ事ができただけはある。だが……」

二人の攻撃を受けたオーバーロードはよろめきながら、強烈な閃光を放つ。

「…………ツ」

部屋全体を覆う閃光は君達を余すことなく襲う。

それはただの光ではなく、眩しかったのは一瞬で、目がくらむという事もなかったのだが、その効果は君達の体にはつきりと現れた。

「ぐ…………。頭が…………」

光が止むと同時に、フォンは激しい目眩に意識を取られそうになる。

他も、体調に何らかの不調を訴え始める。

「…………全く、突っ込みすぎ…………ですよ」

ソニンはそれが様々な状態異常による変調だと感じ、それを打ち払う治療を開始する。

迅速な対応に事なきを得たが、ソニン自身が行動不能に陥るような状況になっていれば、戦線の瓦解にも繋がりがかねない事態だ。

「はあっ！」

が、体調が復活するや否や、サクが再びオーバードロードに向かって突撃する。

「愚かな……」

サクの攻撃が届く一瞬前、オーバードロードの身を淡い光が包み、衝撃をサク自身に跳ね返す。

「ああもっつ！ 少しは私の話も聞いてください！」

吹き飛ばされるサクの元へ治療へ向かう。

「迷惑をかける……」

サクは刀を杖代わりにしながら、よろりと起き上がる。

「光ってるばかりで、何もわからないな。もう少し見た目に凝ってもいいんじゃないか？」

「汝らのように、無駄な時間を浪費するほど我は暇ではないのでな」
軽い調子で、フォンとオーバードロードが向かい合う。

「ところであんた、どこが頭でどこが腕だか教えてくれないかね」
その横合いからミネラの鞭が伸び、オーバードロードを打ち据える。何かの繭みみたいな形状をしているオーバードロードはいまいち縛り辛くて困難しているようだ。

「生憎と、我はこの身一つしかないのな。そういう概念は持ち合わせていない」

オーバードロードはそう言いつつ、再び光りだす。

これまでと同じような攻撃ではなく、光が止むと同時にミネラがつけた傷が消えていく。

「……本当に、面倒くさいね」

状況はほぼ振り出しに。

オーバードロードは変わらず余裕な雰囲気を漂わせながらそこにいる。

「すまない、ソニン」

「え？」

サクは傷の治療が終わると同時に再びオーバードへと向かう。

「また迷惑をかける！」

そしてオーバードへ刀を振るう。

跳ね返されるかもしれないというプレッシャーを少しも感じさせない一撃は、オーバードを深く傷つける。

「んじゃ、あたしも」

「俺も行くか」

「え、え？」

戸惑うソニンを置いて、ミネラとフォンまでもがオーバードへ攻撃を加える。

「ぬうっ」

刻まれる痛みにもオーバードが揺れる。

「見た目ありきな攻撃つても、いいものだろう？」

「もう、勝手にしてください……」

総攻撃をかける三人に、ソニンはため息をつくと共に、すぐに治療が出来るよう身構える。

「小賢しい……っ」

再びオーバードが光り出す。

質量を持つかのような圧倒的な光は、床に亀裂を入れながら君達を襲う。

衝撃が部屋を蹂躪し、土煙が激しく舞う。

土煙の中から現れたのは、サクとミネラ。

二人とも床に手を付き、何とか倒れまいと堪えている。

「やはり人は……、脆いな」

二人の姿にこの戦いももう終わりかとオーバードは思う。

しかし、二人の姿はとても弱々しいのに、その口元は笑っていた。

「我、汝を恐怖で組み伏せる者也」

土煙の中から聞こえるその詠唱に、オーバードの意識が向く。晴れていく土煙の中、ソニンが二人の治療のために飛び出してい

く。

オーバーロードはソニンの傷の少なさに驚き、そしてハツとする。そして完全に晴れた土煙の中から、盾を構え、完全に後衛をガードしきつたフォンと、三人が総攻撃を仕掛けていた間、ずっと力を溜め込んでいたミリが現れる。

「力の差は覚悟していた。正攻法でやつても勝てないだろうとな」
盾から顔をのぞかせ、彼もニヤリと口元を上げる。

「なら、その力を利用してもらうだけなんだよ！ 『畏れよ、我を』！」

ミリの渾身の呪言が、オーバーロードを包む。

「そんな物が我に効……っ」

振り払おうとするオーバーロードであったが、執拗に絡まる呪言はそれを許さない。

「練りに練ったもん。そう簡単に解かれたら……困るんだよっ」

ギリツと拳を強く握り締め、更に強くオーバーロードを侵食する。

「さあ、仕上げなんだよ」

ミリは再び意識を集中しはじめ、追加の呪言を詠唱する。

「『命ず、自ら滅せよ』」

オーバーロードの体がぐらりと揺れる。

ミリの唱えた呪言は、恐怖に縛られた……テラー状態の相手に命令をする呪言。

テラーにさえかかってしまえば例えオーバーロードでも抗うことはできない。

そして、その命令とは自分自身を攻撃する事。

「ぬおおおおおっ」

オーバーロードが叫びと共に光を放つ。

ただその光は、外に向けられるのではなく、まるで中から爆発するかのよう輝いていた。

そして、目が眩む閃光の中から現れたのは、体中にヒビが入り沈黙するオーバーロード。

「やったか!？」

初めてとも言えるオーバーロードに対する有効打。

流石にあの傷はそう簡単には癒せないだろう。まだ倒しきれないとしてもこのまま押し切れるはず……そんな気の緩みに差し込むようにオーバーロードが低く、うなるように声を出す。

「聞くがいい、人の仔よ。我は、滅んだ世界からの脱却、新たな世界での未来を夢見た」

消えかけていたオーバーロードからのプレッシャーがじわじわと蘇る。

まだ終わりじゃない……君達は再び武器を取り直し、最後の戦いの準備を始めなければならぬ。

「何人であろうと、その邪魔はさせぬ! 人が人であるがゆえの、限界を我は超えるのだ!」

オーバーロードのその繭のような体が左右に割れていく。

先程までの姿とは打って変わって、頭、翼、足、尻尾と生物の形をとっている。

さしずめ羽化のような変化は、君達に驚異を与えるには十分過ぎていた。

「神となりし我が力思い知れ!」

オーバーロードはその大きな翼を君達に向けてなぎ払う。

その大きさ故、それだけで大きな衝撃を生み、フォンが守りに入る間もなく吹き飛ばされる。

「汝らがここまでやるとは思わなかった。だが、それ故に我はこれ以上一切の手加減はせぬ!」

立て続けにオーバーロードは攻撃を重ねる。

灼熱の炎で部屋を満たしたかと思えば、凍える氷の雨を降らせ、轟く雷鳴にて君達を討つ。

怒涛の攻撃に守るところか、回復すらも間に合わず、君達5人は揃って床へと体をうずめる事となる。

「く、そ……」

一瞬にして壊滅状態へと陥れられた自分と、仲間たちを見てフォンは悔しげに歯をくいしばる。

(また俺は、守れないのか……っ)

痛みを感じないほどに悔しさで溢れそうになっているフォンは、薄れゆく意識を必死につなぎ止めるように強く盾を握り締める。

「まだ、だ……っ」

そんな中、よるめきながらサクが立ち上がる。

刀を杖代わりとし、目を完全に開く事もできないでいる。

それでも心は屈しない。

(私は、私は仲間を守る剣だ。どんな事があるうと、二度と折れたりするものかっ)

彼女に残されていたのは信念だけ。

一度は忘れたそれを、必死につなぎ止める。

「……汝らは、人でありながらその強さまで辿り着いたか。惜しくは思うが、その強さ、刈り取らせてもらおう！」

オーバーロードは再び翼を振り上げ、君達に向かってなぎ払う。

満身創痍の君達に防ぐ手段は無く、オーバーロードもそう思い、

戦いの終結を確信した。

だが……。

「……何だ、それは」

ぎりっ、ぎりっ、とオーバーロードの翼が不思議な力の壁に遮られる。

どこから、とオーバーロードは辺りを見渡すと、その力は一枚の盾から放たれていた。

「……これ以上、仲間を傷つけさせてたまるものか」

荒く息を吐きながら弱々しく盾を構えている。

だがその防御はほんの小さな盾一枚で、仲間に向かう攻撃全てを無効化していた。

フォン自身すら知らない、その不可思議な力はオーバーロードにさえ衝撃を与える。

しかしその力も長くは続かず、オーバーロードの攻撃を防いでいた力の壁も消失する。

好機と見たオーバーロードは、すかさず攻撃を加えようとするが、そこで違和感に気づく。

先程まで立ち上がる事も困難としていた君達は、その傷を完全に癒してオーバーロードの攻撃に備えていた。

「私に出来るのはここまでです。後は任せましたよ」

ソニンが一瞬で全員の傷を癒す……そんな奇跡のような芸当をやりかけていた。

「ならば、再び地へ叩き付せてやろう！」

オーバーロードは再び怒涛の如く攻撃を開始する。

だが、フォンらにそれが届く直前、その姿が幻影のように揺らぎ……消失する。

「レンジャー奥義！ 『真・夢幻陣形』！ 何故真なのは大人の事情さ！」

現れたのは魔物たちの足止めのため道中に残っていたミルリア、リズ、リン、克蘭ク、リリックだ。

自分達の役割を果たし、仲間の元へと駆けつけてきたのだ。

オーバーロードはミルリアの生み出した幻影に、惑わされ君達を見失う。

「でやああああっ！」

そこへ上空からリンがオーバーロードへ斬りかかる。

ただの斬撃ではない。オーバーロードの体に、まるで巨人が振るう武器で付けられたかのような傷が刻まれる。

「う、ぐあ」

たまらずオーバーロードは苦悶の声をあげた。

これが人の力なのか……そんな疑問を持たずにはいられないオーバーロードの目に、場違いなほど陽気に踊る少女の姿が映る。

（最後の戦い……私の力と想い、全てこの歌にのせるヨ！）

「『最終決戦の軍歌』！」

ただの歌、ただの踊りであるはずなのに、部屋の空気がガラリと変わる。

「いい仕事だ。リリック」

その横でリズが静かに銃を構える。

放つ弾丸がいつももの物と違うのか、いつも以上に力をこめている。だが銃口に一切のブレはなく、放たれた弾丸は真っ直ぐにオーバーロードへと向かっていく。

「……っ」

直撃を受けたオーバーロードは、あまりの衝撃に全身を硬直させてしまう。

その固まった背中にトン、と誰かの手が当てられる。

「悪いが、この術式に含まれる愛は……ゼロだ」

クランクの腕に膨大なエネルギーが集束していく。

「受け取れ、『超核熱の術式』だ！」

その瞬間、クランクの腕に集まっていたエネルギーが一気に爆発する。

何の小細工もされていない、ただただ『大きな』エネルギーの爆発はあらゆる耐久性に影響されずダメージを与える。

「……調子に、乗るなっ」

オーバーロードも負けじと攻撃を繰り出そうとする。

だが、動き出す瞬間に全身を茨に縛られ身動きを封じられる。

「まあ、そんなに焦るなって。あたしにも付き合ってよ」

その茨を生み出したミネラは力の限り茨を引き絞り、オーバーロードの自由を奪い続ける。

そして。

「これは……お姉ちゃんの……」

リアーリスの反撃が始まる中、傷ついたエスバットがミリの所へ

やって来て、小さな鐘を一つ手渡していた。

「お土産さ。ま、それが本物かどうかまでは判断つかないけど」
ミリはそつとその鐘を抱くと、一筋の涙を零す。

「ありがとうございます……っ」

「なに、お代は見物料とさせてもらうよ。貴方達が変わる、時代つてやつのね」

ミリは大きく頷き、オーバーロードへと視線を向ける。

オーバーロードは全身を茨に縛られ、絶好のチャンスだった。

(一緒に戦うんだよ……。お姉ちゃん)

自身の物と、姉の……。二つの鐘の音を響かせながら、ミリは呪言を唱える。

「あらゆる災い、あらゆる苦悩を汝に。『黄幡の呪言』!」

オーバーロードは放たれた呪言に対して抵抗する事が出来ず侵食されていく。

病毒、麻痺、テラー……。あらゆる異常に侵されたオーバーロードは最早声を発する事さえも叶わない。

「終わりだな、オーバーロード」

そして、サクがオーバーロードの正面へと躍り出る。

そして腰を落とし、鞘に収めたままの刀にそつと手をあてる。

「お前にも、自分ではなく誰かのために果たすべき目的があったよ
うだが、それは私達も同じこと。どちらが正しく、どちらが間違っていたなんて答えは無いし、私達も自分達のことを正義だとは思わない。ただ一つだけ、確実にわかることがある。お前も、私達も進む道が違っただけで同じ人であるという事だ。違った道は、幾年月を経て交わり、互いの障害となった。互いにその障害を取り除かねば前へは進めない。進むためには取り除かねばならない」

刀を強く握り、光に迫る速さでオーバーロードを一閃する。

「私達は先へ進ませてもらう! オーバーロード!」

オーバーロードの体が二つに裂ける。

そして叫びをあげる事も無く、静かに光の粒となり消えていく。

その光景は、君達の冒険の終わりを告げていた。

人の弱さを知り、人為らざる姿になったオーバード。

人の弱さを知りつつ人であることを選んだ者たち。

そのどちらが強かったのか、その答えはこの戦いでは得られない。

そう、オーバードが消えゆく姿は、冒険の終わりと同時に、
始まりを告げていたのだ。

これまでの冒険より、ずっと長い冒険の始まりを。

地上：世界樹が見下ろす街

公国始まって以来最大の祭……、そう言っても過言ではないほど街は沸き立っていた。

「まさかあいつらが本当にやつちまうとはなあ！ ハッハッハ！」
酒場の店主は自分の店で客に混じって好き勝手に騒いでいる。

誰もが勝手に店の酒を注ぎ、浴びて、また注いでいた。

だが何も問題なんてない。今日は店中……いや、国中の酒樽が空になるのだから。

「んで、主役はどうしたんだよ！ 誰か知らねえのか！」

店主の叫びに客の一人が呆れた声を出しながら律儀に答える。

「大公宮だよ。一体何回言えばわかるんだよ酔払い！」

「んだあ？ そりゃあ、俺んどこに来るより大切な用事なのかよ！」

「大切に決まってるだろ！」

そんなやりとりに店内が大きな笑い声に溢れる。

その中には、とある少女と老人も紛れていた。

「いたたたっ……。笑うと傷に響くわね……。」

「お嬢様。自分の体のことも労るべきかと」

エスバットの二人は、世界樹の麓でリアーリスと別れ、その足で酒場に直行していた。

世界樹制覇の事実は一瞬にして国中に広がったのか、その時には既に大盛り上がりの宴会中だった。

まだ傷も癒えていない体で酒を飲み、笑い、そして痛みを身を縮こませていた。

「今騒いでおかないと損じゃない。ようやく、終わったんだし、ね」
アーテリンデは物憂げな表情で言う。

ライシュッツはそんなアーテリンデの表情を見て、何かを諦めるように息を吐く。

「というよりも、いつまでここに素面でいるわけ？ じじいも飲み

な！」

「じ、じい……」

国中に蔓延する熱気に、万人等しくハメを外していく。

「酒場へは行かないんですか？」

「騒ぎ方というのにも人それぞれあるのだよ。私は私なりに騒ぐさ」
時を同じくして、交易所のひまわりちゃんと、ギルド長が顔を合
わせていた。

ギルド長はいつも着用している重い鎧を脱いで、その素顔を晒し
ている。

「久しぶりに見ましたけど、何だか寂しそうな顔をしていますね」

ひまわりちゃんにどうして、と尋ねられギルド長ははにかむよう
な笑みを見せる。

「何、あいつらの事はギルドが出来た頃から知っている。まあ、当
たり前だがな……。最初はただのひよっこだと思っていたのがいつ
の間にかこれだ。感慨深くもあるというものだろう」

「親心……みたいなモノですか？」

「そうかもしれない……。だが」

ギルド長の言葉にひまわりちゃんは首を傾げる。

「本音を言えば、私自らが迷宮を制覇したかった……といった所か
もしれないな」

ひまわりちゃんは一瞬きよとした後、口元に手をあててくす
つと笑う。

「それにしても、少し見ない間にこの店も狭くなった気がするな」
ギルド長は周りを見渡しながら、随分の扱っている武具の種類が
増えたなと感じていた。

「迷宮で手に入る素材がたくさんあるので。お父さんも最近すつこ
く張り切りっぱなしだったし」

あの武器も、あの防具も、思い返せばリアーリスが持ち込んだ素

材から作ったものだ。

その一つ一つに、彼らとの思い出を感じたひまわりちゃんは、胸の中に不思議な思いが生まれるのを感じた。

「この武器とか……すごい値段だな……。さぞ強大な魔物の素材なのだろうな」

「あ……、それ値段一桁間違えてます……」

そして、件の英雄リアリスは……。

「頭を上げてください。下げなくてはならないのはこちらの方なのですから」

大公宮の大広間にて公女と対面していた。

公女の言葉を受け、君達は静かに立ち上がる。

そして先頭に立つフォンが、そっと『それ』を公女に差し出した。

「……これで、父様は助かるのね」

諸王の聖杯。

オーバーロードを倒した後、部屋に安置されていた聖杯を見つけ出し、持ち出したのだ。

「それについてですが、話さねばならない事があります」
畏まってフォンは告げた。

その聖杯がどのような物であるかを。

迷宮の頂上に君臨していたオーバーロードの事を。

順序立てて説明していくことに公女の、側に控えていた大臣の表情が神秘的なものへと変わっていく。

「……ですが、本来の機能自体はオーバーロード自身にしか扱えないようです。薬を作るのに使用する分には問題ないと思いますが……」

最後にそう付け加えて、説明を終わる。

「調合の際は私も手伝わせてもらいたい。及ばずながら力になれる

かと」

クラルクが一步踏み出して話す。

公女はその申し出にありがとうと礼をいう。彼女とて父親の病を治すためにこれまで動いてきたのだ、ここで引くわけにもいかないのだらう。

「本当に……本当にありがとうございます。貴方方は本当にこの国の英雄です」

堪えきれずに涙を流す。

指でそつと拭いて、何とか元の表情に戻そうとしても中々戻ってはくれなかった。

「聖杯は大公宮が責任をもって預からせて頂きます。二度と間違った使い方をされないように」

聖杯が公女の手に移り、いよいよ君達の冒険にも終わりが見えてきた。

国を上げての盛大の祭。その中心で過ごす時間はあっという間に過ぎ去っていった。

冒険者達はこれからどうするのだろうか。

制覇したとはいえ、迷宮はまだそこにあり、解明されていない部分は星の数ほど残っている。

それを調べる者もいれば、国へと帰る者もいるだらう。

それはリアーリスとはいえ例外ではない。

「そうか……。皆、帰るんだな」

これまでずっと仲間として過ごしてきた君達だが、この国へ来た理由は様々だ。

「貴方達二人は残るの？」

リスの言う二人とは、フォンとサクの事だ。

彼ら二人を除いて、皆この国から出て行ってしまおうようだ。

「ああ。大公宮はまだ迷宮の調査を続けるらしいから、その同伴を頼まれたんだ」

「皆と違って私達は特に帰る理由が無くてな。受けることにした」
迷宮にはまだ謎が多い。衛兵だけでは心許無いのだろう。

「何、暇さえあれば皆顔を出しに来るだろう」

「はいはい！ ボクも遊びに来るよー！」

「話に聞く同窓会ってやつだね！」

……どうやら、それほど長い別れにはならなさそうである。

「私も、お姉ちゃんの事とか父様に報告して……落ち着いたら絶対また来るんだよ」

ぎゅっと自分の胸元で揺れている姉の形見を握り締める。

「ミリ……」

全てが終わって、これまでを、これからをゆっくりと見ることができるようになった。

得た物の大切さも、失った物の大きさも。

「大丈夫だよ。お姉ちゃんとは、ずっと一緒だもん」

「そう……だな」

今は無理でも、いつかきちんと整理できる日が来るだろう。

「お姉ちゃん、そろそろ時間だよ」

「ん、もうそんな時間か」

皆を運ぶ列車の到着時刻が迫っていた。

フォンとサクは、そこで皆と暫しの別れとなる。

「じゃあ、またな」

軽く手を上げて別れを告げる。

またいつか会えると信じているからこそ、重々しい雰囲気を持たない。

仲間達の姿が小さくなっていく。

「俺達も、行くか」

そしてその姿が完全に見えなくなり、彼らも動き出す。

フォンはそっと手を差し出し、サクはその手をじっと見つめる。

「……そうだな」

そしてゆっくりとその手を取り、二人は街へと戻っていく。

出会いがあれば、別れもある。

そして、また新しい出会いが来る。

それは誰にも分からない運命によって定められている事だ。

ただ……、ひとつだけわかつている事がある。

そう、君達は再び出会うのだ。

天高く聳える、世界樹の迷宮で。

「これが私の国の世界樹にまつわる話じゃ。もう百年も前の事じゃがのう」

金色の長い髪と、綺羅びやかな装飾が施された鎧を着た女性が手に持っていた本を閉じる。

潮の香りに包まれているそこは、船の上。

帆一杯に風を受け、その雄姿をもって水面を切り裂き進行している。

船を利用している乗客は誰も彼もが一般人には見えなかった。

剣、槍、杖。戦うための道具を身につけた戦士達だ。

「百年前と言えば、海都にて大異変が起きた年。何か関連があるか

もしねないと我々がやってきたのだ」

女性の側に姿勢を正して立つ黒装束に身を包んだ細身の男が話を引き継ぐ。

「へえ。良くわかんねえけど、面白そうだな。俄然やる気がでるってもんだ」

にやりと笑いながら立ち上がったのは、長い髪を後ろでまとめている男だ。

海に慣れているのか、揺れる船上でもその姿勢は崩れない。

「暴れ甲斐がありそうだな！」

それに同調したのは、腰よりも長い黒髪を適当に結び、荒々しい印象を見受ける女性。

「これからどれだけ危険な場所に行くかわかってるのかな……。この人達」

それを呆れた表情で見つめるのはウェーブのかかった桃色の髪に、ローブを着込んだ少女。

この五人は鎧の女性と、黒装束の男以外は出会って間もない間柄だ。

だが恐らくこれから長い付き合いになることだろう。

船の向かう先は、海都『アームロード』

新たな世界樹の迷宮である。

「それはそうと、話の続きってないのかい？ あたし的にはもうちょっと続くように聞こえてなんだかスッキリしないんだが」

「いや、実はのう……。あるにはあるんじやが、はつきりしてないというかの……。何か知っておるか？ ぬしの先祖の事であるう？」

「ううむ……。どうやら家族にも伝えなかったようだな。詳しい事は知らぬのだ」

黒装束の男は唸り声を上げながら、どこか申し訳なさそうにする。
「なにやら………迷宮に潜む悪の根源に裸で打ち勝った………などと言
う説もあるのだ………」

あまりに意表を突く話に全員がそれを嘘だと笑う。

さて、本当の所はどうだったのだろうか。

君達はいかにして迷宮を、頂点の更の上を制覇したのだろうか。
その事実が語られる日は………恐らく来ないであろう。

地上：世界樹が見下ろす街（後書き）

というわけで、完結してしまいました。

まさか……最後まで書ききるとは思いもよらなかった……。

詳しい後書きは後ほどブログのほうへ書いてみようと思います。

そしてここを利用してちょっと宣伝。

7月25日 大田区産業プラザPioにて開催される「アグリゲイト4」で行われる世界樹オンラインイベント「幻想の樹海？」に出ます。

世界樹？ネタで新刊を出す予定です。

アグリゲイト4公式サイト

<http://ketto.com/aggg/>

それと同じくTwitterとか始めて見ました。

テキストな事しかいってませんが……。

http://twitter.com/yamada_kick

では、またどこかでー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5949f/>

日々是迷宮ナリ

2010年10月8日12時33分発行